

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

352

955

達清徽著

松華宗秘

東京佛立講堂藏版

始



特233
880



松華宗秘

伊達清徹著



自序

本門佛立講を日扇上人が開講遊ばされた根本趣旨は、蓮隆兩祖の御法流を清むるの御企てであつた事は茲に述ぶる迄もないが、其の廓清運動の中心となつて居るものは、讀誦の廣軌に對して口唱の要行を勸進し、解義に走つた人々を信の一字に引戻さんとせられたこと、信するものである。

不肖曩に妙講一座式考及び現證論據を發表したのは、偏に此の御義を顯揚し奉らんと志したに外ならなかつた。即ち當講内に於て、妙講一座式は在家の爲めの易行道を示したもので、僧侶隨自の内證に約する日は、必しも是を要せざるやの謬解を懐くものあるを聞き、憂講の微衷を以て研究し、先輩諸師の批判を仰いだのである。又現證利益は發信の門であるといふことを知らず、之に膠着して遂に菩提の大直道を進むことを忘却するものが間あることを見聞し、其の淺識不解の當講を毒せんことを恐れ、敢て蒙を啓かんが爲に秃筆を呵した次第であつた。爾來幾星霜を経て、改廢すべき點些しとせず。されど大體に於て違する所なきを確信し、更に他の二三を加へて今回印行する事にしたのである。

不肖十有八歳にして淺田現國、岡野現相兩師に親しみ、其の導きによりて先師日教上人の門下に投じ、佛立教徒たるの法悦を感銘してより、報恩の御爲めにも、今生の思出にもと、行學二道を勵みたりしが、今や第五十の歳將に暮れなんとして、彼の室町時代の智將、細川頼之の『人生五十功無きを愧づ』の歎切に迫り、自憐に堪へざるものがある。時恰も田中清長師の勸めらるゝに任せ此の小集を編することゝした。これ敢て世に問はんとするものに非ず。たゞ自ら情を遣らんとするのみと云爾。

昭和十年 漆月

佛立講堂 伊達清徹 謹識

凡例

- 一、本書に『松華松毬』と題したるは、松の花、松の實といふ程の意味にて、長松門下に於てさゝやかなる一存在を表示するのみ。
- 一、わが故郷の門外に二抱へばかりの古松あり。家蔵之に依て松下園と號し後、松華園に改む。われ長松門下に列するの日、私かに是を模して松華堂と稱し、いま松華院といふに因む。
- 一、書中引證の祖書は讀者の便を思ひ、成るべく頁數を出せり。而して其頁數は靈長閣發行の『日蓮聖人御遺文』に依る。
- 一、本書は種々の機會に於て發表したるものを集めたるものなれば、文體前後調はず。又重複すると屢々なり。讀者之を諒せよ。

松華松毬 目次

目次

四

佛立主義概説

第一 序説	三
第二 信仰の對象	一四
第三 修行	一八
第四 信仰の目的	四〇
第五 結 勸	四三

現證論據

第一 總論	四七
第二 現證の眞意義	六二
第三 法華經と現證	八四
第四 布教法としての現證	一二六

十二宗名大意

第一 總釋	一五六
第二 過去宗	一六五
第三 下種宗	一七六
第四 本門經王宗	一九三
第五 事相宗	二〇二
第六 無智宗	二一一
第七 信心宗	二一八
第八 易行宗	二二七
第九 經力宗	二三三
第一〇 口唱宗	二四一
第一一 名字即宗	二五八
第一二 教彌實位彌下宗	二七三
第一三 直入法華折伏宗	二八六
第一四 結 勸	三〇二

目次

五

佛立教徒 信行常識

第一 祈願	三〇七
第二 謗法拂	三一四
第三 助行	三二九
第四 御講	三四一
第五 御法門	三四八
第六 回向	三五八
第七 御供養	三七二
妙講 一座式考	
第一 初隨喜品	三八三
第二 名字信行觀	三九一
第三 信智増進	四一七
第四 一座の結構	四三四
第五 一座の分段	四三二

— 目次終 —

口唱經句
 行伏宗

為杉森杉經

大僧正日浮抄



佛立主義概說

佛立主義概說

第一序説……………	三	一本尊……………	二四	五 現證利益……………	三三
一 名稱……………	三	二 日蓮大士……………	二七	六 呵責謗法……………	三六
二 開講……………	五	第三修行……………	六	第四 信仰の目的……………	四〇
三 開導上人傳……………	五	一 自行の三業……………	六	一 卽身成佛……………	四〇
四 嗣法……………	二	二 妙講一座……………	三	二 寂光淨土……………	四二
五 組織……………	三	三 化他の三業……………	七	第五 結 勸……………	四三
第二信仰の對象……………	二四	四 教化……………	三〇		

佛立主義概説

第一序 説

一、名稱 佛立講と稱する根據は、宗祖日蓮大士の御書中に屢用ひられた「佛立宗」の語に基いたものであります。一例を挙げれば、

問テ云ク八宗九宗十宗ノ中ニ何レガ釋迦佛ノ立テ給ヘル宗ナル哉。予答テ云ク、法華經ハ釋迦所立ノ宗也。其故ハ已説、今説、當説ノ中ニ法華經第一ト説給フ。是レ釋迦佛立テ給フ處ノ御語ナリ。此故ニ法華ヲ佛立宗ト云ヒ、又法華宗トモ名ク。(日蓮聖人御遺文一六七頁——以下頁數のみを出す)

已ニ説クとは法華已前の經を指し、今説クとは法華同時の經を指し、當ニ説クとは法華以後の經を指すのであります。この三説に超越して法華經は最第一なりと法華經第四の卷、法師品にお説きなされてあります。されば法華經は諸經中の王である。従つて釋尊の大悟の奥旨は此外に無いのであ

ります。宗とは主ナリ、尊ナリと訓じ、最尊最上の義を意味する文字でありますから、法華經を佛の立てさせ給ふ宗と稱するのであります。猶ほ開祖日隆聖人が日蓮諸宗の墮落を責めて別に一宗を弘通せんが爲め、京都に本能寺を建立する直前に、諸本山に主義信條を宣布された法華天台兩宗勝劣抄の中にも、屢佛立宗の文字が用ひられてあります。蓋し諸宗は「人立宗」である。佛の御定のまゝに弘めないで、勝手に自義を挿入して建立する宗である。我が今弘めんとするものは佛の御意に隨從し、一分の自説を加へない正真正銘の佛敎であるといふ事を表榜するものと拜せらるゝのであります。佛立講開發教導の師、日扇上人は宗祖の御意に依り次の如く述べられてあります。

本門法華日蓮宗ハ久遠實成ノ佛ノ立テサセ給ヒシ宗旨ナル故ニ佛立宗ト云フ。經ニ云ク諸經ノ中ノ王ナリ、最モ第一ト爲ス。カクノ如ク立テサセ給ヒシ故ニ、其趣ヲ解説教導スル故ニ佛立講ト云フ。(本門佛立講旨)

本門佛立講ト申スハ、宗祖出世ノ御本懷、上行所傳ノ御題目ヲ廣宣流布セシメンガ爲ノ故ニ、トリ結ビタル講ナリ。法華宗ノミハ佛ノ立テサセ給ヒシ宗旨ナル故ニ佛立講ト申ス。天台宗ニ紛レヌヤウニ本門ト申ス也。講トハ御法義ヲ講説スルナリ。(萬年永續繁昌記)

二、開講

安政四年正月十二日、京都新町蛸薬師、谷川淺七(八品堂と號す)方にて開講。開導上人御自筆の清風自畫傳に云く、ハジメノ御講聽衆四人ナリ。後此講萬人ヲ以テ數ンズト思ヒオキテタリ。と當家主入谷川淺七、妻シマ女、手代宗助、竹屋町三長の母ヒサ女以上四人で第一聲が發せられたのであります。

三、開導上人傳

姓を大路といひ後、長松と改む、名は清風又は無食と號し、日扇と稱せられました。幼名は仙次郎、長じて仙右衛門と改稱、父は延貞、母は國女、代々京都蛸薬師、室町西、姥柳町に住せられ、上人は文化十四年四月一日同地にお生れなされた。七歳の時甫めて書を青蓮院ノ宮御内人、圓山存古齋に就き、後同御内人、勝見主計に學び、更に粟田山田兵庫の門にお入りなされました。畫は九歳の時、岸駒の高弟白井華陽に學ぶ。十歳にして書畫に堪能なる故を以て平安人物誌に其名を留む。十七歳本居宣長の高弟、城戸千栢に就て國學歌道を修められました。廿五歳同門四百餘人中より選ばれて千種有功卿の御殿に源氏物語を講ず。前席には小泉將曹が古事記、長澤ともをが枕草子を講ぜられたさうであります。家の宗旨は淨土宗でありますが禪宗をも修め、又日蓮宗を行じ能勢の妙見の瀧へ一七日かゝつて祈つたことがあります。廿六歳母を亡うて無常を感じ出家の志が發

つたのであると拜します。

四十九日の暮參の歸るさ櫻の散るを見て、

ちるまでも見てだに花にあかざるをあな心な夜の嵐や

又、病中母の身にまとはれし衣服をほしたるを見て、

おもかけのおしはかられて悲しきは母の朝よひ身になれしきぬ

又、祖母貞薫尼が寺詣からかへられた時、

わが母はいまかへるらし板橋のいたの上つく杖の音する

などがある。如何に母を慕はれたかを推する事が出来ます。これは父に早く別れ母の手一つで育てられた爲であると思ひます。其後江戸に遊學し重病にかゝり死生の巷をさまよはれた事があります。

玉の緒を此世かの世によりかけて一筋ならぬおのが身ぞ今

病癒えて後、

死ぬるとも生くともよしと思ふ身にまだあづかれる夢やあるらん

など、其時の述懐であります。此事があつていよく出家遁世の志がつのられたやうであります

つたのであると拜します。

す。然し淨土や禪宗では満足出来ぬので、天台や眞言も學ばれたのであるが、二十九歳の時、京都本能寺で多くの門人を集めて席上揮毫を催した縁で、貫首日肇上人に謁し本門法華宗義を受けられました。然るに宿縁深厚の爲か遂に此の宗で出家の素懐をおとげなされました。即ち慶應元年四月二十八日、三十二歳の時、最初に信仰の導きをして下された本能寺塔中、長遠院日雄師の傳書を受けて、當時學匠として宗内に聞えた、淡路津井の隆泉寺、心光院無著日耀上人(後に大本山妙蓮寺貫首)に従つて薙髮染衣せられました。其後師の膝下で修學し、或は京阪へも往復されましたが村上勘兵衛、村田麥浪など同信のすゝめにより、荒廢甚しき東山の西行庵に住み、讀誦唱題、或は寫經など怠らず修行なされたこともありす。其頃の歌に、讀誦と題して、

あはれ冥加あらせ給へとよむ經をいくらの諸天聞きいますらん

母菩提の爲に法華經を書寫し始むとて、

うけがたき人の身だにもうれしきに今日汲み初むる法の水壺

満願の日、

かきをへし心のうちの涼しさは佛の外に知る人もなし

恰度其頃、讃岐高松の松平左近公が、三途不成佛といふ論を立てられた。此左近公といふは高松城主の舍弟であるが世塵を避けて法華宗の信仰に安住されて居つた方で、或日法席で、某僧侶が尋ねられるには、法華違背のものは墮地獄勿論であるが、其子孫が至心に追善回向されたら直に成佛致すべきや否や。然るに公は貴僧はどう思ふと反問された處、即身成佛何の疑かあらんと答へた。左近公は回向で天上人間に轉生する事は出来るが、直に成佛は出来得ないものである。そんな事で成佛が出来れば暇をつぶし骨を折つて信心する事も無いといふ意味を以て辯駁された。その爲に宗内は敵味方に別れ頗る騒がしい折柄、同公の招聘により渡海して此の問題に就て指導された。其後間もなくわが佛立講を開かれたのであります。これは宗内の様子を見るにつけ聞くにつけ僧侶の墮落甚しく、從て宗風日々に衰へるのを歎かれて遂に身を挺して宗内改革の爲に立つ決心をされたのであります。而して宗内改革というて議論をして歩くといふのではない。大に布教して熱心なる信徒を育成するのであります。從て僧侶攻撃も随分せられた様であります。

かたちこそ人を助くる姿なれ諸宗の坊主、土の人形
おほかたの世捨人には心せよ衣をきても狐なりけり

大講義大教正の名をつけて法を賣れども買ふ人はなし
これが爲め他宗他派の讒訴にあひ、明治元年第一回の法難、六角の大宮の本牢、切支丹ノ間に入れられ、又同五年第二回の値難等がありました。

牢に三度入れられ八度處をば追ひ出されつゝ立てし此の講の感詠があります。明治二十三年七月十七日早朝、弟子二人と俱に多數信徒の見送を受けて京都を出發し、淀川を船で下る途中、暑氣に堪へ難いので、大阪府下守口で上陸し休憩中御臨終遊ばされました。御年七十四。これより先、五月上旬頃より老衰の爲め法席を休まるゝ事が屢ありました。然し少康を得れば又出講するといふ有様、高弟達は暗い心で師の姿を見守つてゐられたのであります。五月中旬に神戸の佛立寺開堂の式を營む筈であつたが、發病の爲めに延期し漸く六月三日執行されました。七日に歸京して二十日間も静養、又七月一日から出講されたが三日には氣色が頗る悪い。そんな状態が日々續く。十五日神戸の信徒淺田米吉への手紙の末に、

思ひ見れば年は七十路あまり四つ、御用濟にて歸るのである

の一首が添へられてありました。十七日も大阪の信徒の懇請もだし難く下向なされたのであつたが、

而も其途中で遷化されるといふのは、所謂倒れて後止むの言葉を文字通り實行なされたのであると思ひます。大ていの人ならばかく老衰して居るのであるから出講は謝絶するのが常前、然るに身體の續く限り布教に東奔西走なされた。これは日蓮聖人が、命ノ通ハンキハ、南無妙法蓮華經ト唱へテ唱へ死セヨ（九七二頁）とあるを身讀されたのであると思ひます。日頃弟子信徒へ、能役者は舞臺で死ぬを本望とする。其如く信者は御法の爲めに死ぬることを喜ばねばならぬと教訓なされてあつたのであります。御教歌に

死ぬること案じてゐるも無益なりいけくばたり唱へ死せん

死ぬること御題目にて御安心、今がままで唱へ弘めよ

日頃教へて置かれた通り實踐躬行されたのは實に尊い努力であると深く感佩身に餘る次第であります。生涯墨染の一沙彌で過されましたが、御遷化後、其布教の功大なるを以て一躍、權大僧正を追證せられ更に大僧正を加へられました。實に異數といはねばなりません。遺詠數千首、遺書數百卷。開導上人御一代の布教の方法は、書や歌を縁として發信入講したのもも随分ありましたが、大體は先づ病氣で困つて居る人を勸めて妙法を持たしめ、本人に妙名口唱の行を積ましめて治癒得益せしめ、

徐々に教導して佛立主義に徹底せしめられたのであります。信徒の信心前を初心、中心、後心の三つに大別されました。初心といふのは自分の事みに精進する分際で、佛祖の教訓に違背せぬやう朝夕の御本尊への奉仕、勤行をはげみ、講席や寺へ參詣し法話を聽聞する。中心といふは他を勸めて信心を持たしめる。これを教化又は御弘通の御奉公といふ。勿論自身は初心の手本になるやう勤行、參詣は勤めるのであります。後心は、必しも學問とか財産とかは問題でない。不惜身命の決定心ある者でなければなりません。然しこれは表面上はつきり顯れて居ないものでありますから、指導者の中心に認識して初心より中心へ、中心より後心へと導くのであります。信徒を育成するに二つの方法があります。一は御講、信徒各自の宅で法席を營ませ法話をすること。又、寺では月に數回參詣日を定めて參詣聽法せしめる。其時は開導上人は經文祖書等を講じ、一首の教歌に結んで領納せしめられました。書と歌はわが佛道の菜なれ、かきわくるにも思ひやるにも歌にして教へて置けばいつまでも御法門をば忘れざりけり歌よみにきかす歌ではこと狭し阿呆の耳にも入りやすくよめ等、凡百の事を歌にして指南されました。此の稿に於ても開導上人の説を立證する場合には多くは教

歌を出しました。それは直接開導上人の説に觸れた方が正確であると思ふからであります。先年大本教の教義の講演を聞いた事があつたが、講師の意見のみ聞かされて少しも教祖の言葉所謂お筆先を出さなかつた。その時に私は思つた。これでは講師の考であるか教祖の考であるかわからぬと。加之今日では佛立講の教へが擴がつた爲めに、やゝもすれば末から末へと誤傳されて根本の本義を失うて居るのが随分あらうと思ひます。それで或は此の稿を見てあれは筆者の私見であるといふ風にゆがんで見られるかもしれぬ。それ故くどい程引證するのであります。述者の意のある所を酌んで頂きたい。

第二の指導方法は信徒同志が相觸れ合つて行くやり方でありました。これは病人の出来た時に助行といふのを致します。助行といふのは平癒を祈る本人が正行で、援助するのを助行といふ。組合の人々に入り變り立ちかはりして助行する。これが一週間なり二週間なり、或は一月二月等と續く。これでは信者同志の異體同心は知らず識らずの間に堅く結成されるのであります。事實下手な親戚より何程親しいか、又どの位頼りになるかそれは想像以上であります。

四、嗣法

開導上人は始め、花洛本門佛立講開導導師と稱せられ後、略して單に佛立開導と

いうて居られました。又講有とも稱せられました。講の所有者といふ意味であります。前者は信心上、後者は組織上の役名のやうなものであります。後繼者は御遺言狀に依り高弟日聞上人(姓は御牧、名は現喜、後大僧正に進む)第二世を嗣ぎ、在職二十餘年、明治四十四年八月二十五日御遷化。三世には又、日聞上人の御遺言狀に基き日隨上人(姓は野原名は辨了、後大僧正に進む)就職十箇年御在任。大正九年十二月十二日化。以來四世日教上人(姓は御牧名は現隨、權大僧正、東都佛立講初祖)、第五世日風上人(姓は小野山、名は清衛)、第六世日容(姓は明田、名は現學)、第七世日淳上人(姓は西村、名は現良、大僧正)であります。

五、組織

本門法華宗に屬す。京都北野有清寺を根本道場と爲し、全国各地及び朝鮮、滿洲等に布教所(親會場と稱す)散在す。統一機關は法燈相續者「講有」を戴き、行政部として總務局に總理以下僧俗役員が有り、地方は支部と稱し、支部擔任(僧侶)の下に支部長以下役員(信徒)あり。而して支部は組を以て組織し、些くとも百戸以上の信徒が無ければならぬのであります。組には組長等の役員があります。立法機關は地方支部より講政代議員を選出し、講政會議を毎年春四月、京都根本道場に於て開會します。

第二 信仰の對象

一、本尊 日蓮聖人の顯はされた南無妙法蓮華經の本尊を生きて御座します御佛なりと信するが佛立講の根本信であります。日扇上人云く、法華經ノ行者ノ御本尊は南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經ハ生身ノ佛ナリ。又日蓮大士ノ御タマシヒ也、故ニ文字即佛ナリ。二ナク別ナシトハ是也。經ニ云ク、此ノ中ニ已ニ如來ノ全身有スマ、四五抄ニ云ク、文ニ非ズ義ニ非ズ一部ノ意ナリト。歌に、
 妙法の生きていませる御佛を、たゞ文字なりと思ひけるかな

法華經の文字はもとより如來なり、しか思へとはいふにあらじを

此中已有如來全身の文は法華經第四の卷、法師品の經卷所住ノ處ニハ皆應ニ七寶ノ塔ヲ起テ、極メテ高廣嚴飾ナラシムベシ。復タ舍利ヲモ安ズルコトヲ須ヒジ。所以ハ何ン此ノ中ニ已ニ如來ノ全身有ス。の中の一句であります。佛舍利をも安置しなくてもよろしい。何故なれば此の妙法蓮華經の中に如來の全身がこもられてある。されば此の妙法五字を立派な殿堂を造立して奉仕し供養せよとの御意であります。又非文非義の文は、日蓮聖人の御指南に、妙法蓮華經ノ五字ハ經ノ文ニアラス、其義

ニアラス、唯一部ノ意ノミ(一五四二頁)。この文と同じ意の御指南に、所詮、妙法蓮華經ノ五字ヲバ當時ノ人ハ名ト計リ思ヘリ。サニテハ候ハズ、體ナリ。體トハ心ニテ候。乃至妙法蓮華經ト申スハ文ニ非ズ義ニ非ズ一經ノ心ナリ(一六五六頁)ともあります。日蓮聖人當時の天台宗等の學者どもは、妙法蓮華經をたゞ御經の題目(名)に過ぎないとか、或は一句一偈(文)であるとか申して居つたのであります。そんな部分的なものでなく全體である。生命其物だとの意であります。日蓮聖人はもつと具體的に述べられた文があります。無作三身ノ寶號ヲ南無妙法蓮華經ト申ス(御義口傳)。又は釋迦多寶ノ二佛トイフモ用ノ佛ナリ。妙法蓮華經コソ本佛ニテ御座シ候へ(九五九頁)ともいはれてあります。尤も佛名として經文に顯れて居るのではありませんが、前の法師品の御文を拜してもわかる様に、此の五字には如來の全身がましますのであるから、御佛として御仕へするのであります。それでこれを法面人裏の本尊と稱するのであります。元來佛と申すは、人間と妙法とが一體になつたお方であるから、妙法を表とすれば人間は裏となり、若し人である佛を表とするときは妙法は内面に隠れるわけである。故に妙法蓮華經は法面人裏の本尊、佛は人面法裏の本尊、畢竟二者一體であります。これを人法一箇とも、人法一體とも申すのであります。然らばなぜ人面法裏の佛を本尊とせず、法面人裏の

妙法を本尊とするかといふに、これにはいろいろの義があります。第一釋尊出現時代は所謂人面法裏であるが、入滅後は其遺教が主となるのであるから、法面人裏となるのであります。第二は付屬の法に約する。法華經には本化上行菩薩を召出して我滅度の後、此の五字を以て一切衆生を助けよと付屬せられました。而も此の時の御言葉には、此の五字には如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の中に宣示顯説す（七ノ卷如來神力品）と御説き遊ばされてあります。佛名よりも佛像よりも遙に勝れてましますのであります。佛名や佛像では全きを得られぬが、此の五字ならば如來の有する一切の法も神力も、何もかも悉く具有、顯現して居るのであります。第三に下種の義に約する。下種とは一切衆生の己心に備つてゐる佛性を開顯することでありませう。而して其佛性を妙法蓮華經と名付くる。一切衆生よ汝の心の名は妙法蓮華經であるぞ、釋尊の大悟の玄底なる此の妙法こそ汝等の佛性の名であるぞと教示するが日蓮聖人の出現の使命であります。されば此の五字を日蓮黨の旗印とするのが即ち本尊となり、宣傳の標語とする所に題目口唱行が生ずる。日蓮聖人云く、法華弘通ノ旗印トシテ顯ハシ奉ルナリ。是レ全ク日蓮ガ自作ニアラズ、多寶塔中ノ大牟尼世尊、分身ノ諸佛、スリカタギタル本尊ナリ（一六二五頁）。或は、日

本乃至漢土月氏一闍浮提ニ人毎ニ有智無智ヲキラハズ、一同ニ他事ヲステ、南無妙法蓮華經ト唱フベシ。此事未ダ弘マラズ、日蓮一人、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經ト聲モ惜マズ唱フルナリ。（一五〇九頁）など示されてあります。以上の次第で妙法は法の姿を以て顯はされて居るけれども、其實體は生身の如來である、と信するが佛立講の教へであります。開導上人の御教歌には、

妙法は生きていますといふことを疑はぬをば信者とぞいふ

二、日蓮大士

妙法の本尊の御前に日蓮聖人の木像を安置して生きて御座す祖師と御任へ致します。妙法五字の本尊を生身の如來として仕へると同様であります。されば祖像の御前にて其の御遺書たる如説修行抄を拜讀する音聲を聞く時は生身の祖師の御聲を聞くと思へと指南されてあります。

佛立開導の御教歌に

生きています祖師の教を受けながら、こは御書なりと思ひけるかな

此の木像を生身に拜み奉ることは宗祖日蓮聖人の觀心本尊抄に、木畫ノ二像ニ於テハ外典内典共ニ之ヲ許シテ本尊トナス乃至草木ノ上ニ色心ノ因果ヲ置ズバ木畫ノ二像ヲ本尊トタノミ奉ルモ無益ナリ（九二九頁）と示されたものに依るのであります。

本尊と祖像との關係は、祖師日蓮聖人は本尊を顯し弘め給うた能顯能弘の御導師、本尊は所顯所弘の法であります。然し、日蓮ガタマシヒラ墨ニソメ流シテカキテ候ゾ。日蓮ガタマシヒハ南無妙法蓮華經ニスギタルハナシ(九八六頁)と示されてありますから、此の二者は一體不二、不二にして而も二なるものであります。併し乍ら、本尊は必ず無ければならぬものであります。たゞ末法の大導師として、日蓮置しなくてもよろしい。祖師は本尊の中にましますが故であります。たゞ末法の大導師として、日蓮ハ日本國ノ諸人ニ親シキ父母(八二三頁)でありますから、恰度父母の位牌の前に寫眞を置くといふ親子の情に似たる心地より、特に造立し奉るものであります。

因に記す。當講信者の戒壇に安置する祖像は折伏の尊形で、これは必ず根本道場の安置の御寫しでなければならぬのであります。そこの佛師が勝手に彫刻したのでは許されぬことになつてゐます。

第三 修行

一、自行の三業 信心修行は自行、化他行の二つを備へなければなりません。先づ自行の三業とは身と口と意で信心修行するのであります。意に本尊は生身の如來にましますと信じ、身に尊敬の

奉仕を懈らす口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る。就中、口業の唱題を以て修行の正意と致します。なぜかといふに、意は大切には相違ないが我等の心位當てにならぬものはない。今火のもえ立つ様な信心前と思つてゐると、もうさめて忘れた様になつてゐます。心が本意となると信心に時々斷滅がある。それに老幼、男女、賢愚によりて大變な相違が生ずる。それで心を本意とせず口業を本意とするのであります。口で妙法五字を唱ふるが成佛の主因となれば老幼男女賢愚の差別はない。皆平等に修行することが出来ます。非常に喜んで居る時も、關心を持たなくなつた時でも口に任せて唱ふる事には格段の差は生じない。一例を擧げて見ると日蓮聖人の信念と今日の末弟や信徒の信念とは天地の相違があるが、口で唱ふる段になれば日蓮聖人の唱ふる妙法五字も、愚な今日の信徒の唱ふる題目も同一といはねばなりません。これは聖人在世の時に既に或る信者が、聖人の唱へさせ給フ題目ノ功德ト、我等ガ唱へ申ス題目ノ功德ト何程ノ多少候ベキヤ(一五二三頁)と質問されたに對し、更ニ勝劣アルベカラズ候。其故ハ愚者ノ持チタル金モ智者ノ持チタル金モ、愚者ノ燃セル火モ智者ノトモセル火モ其差別ナキ也(一五二三頁)と答へられてあるを見て知られませう。佛立開導師は殊に此の口唱正意を強調された方でありませう。

法の水結ぶ心は濁るとも、口に唱ふる聲しすめらば
唱ふるが信心なれば唱へずには有難がるは信心でなし

口唱程不思議に妙な行はなしその身はまめに心かしこに

然し如何に口唱本意とは申せどんな事をしてよいといふのではありません。上に擧げたる日蓮聖人の聖愚平等の御指南の次下に、但し此經ノ心ニ背キテ唱へバ其差別有ルベキナリ（一五二三頁）として法華經第二の卷譬喻品の十四謗法が述べられてあります。謗法トハ法ニ背クトイフ事ナリ（四四九頁）と示されて、法華經の心に背くことが謗法である。而も謗法罪の重いことは實に大なるもので、日蓮聖人は、謗法ハ無量ノ五逆ニ過ギタリ（八六六頁）と斷ぜられてあります。五逆罪といふは佛法世法に互る重罪である。それよりも無量無數倍勝れたる大罪であります。されば、何ニ法華經ヲ信ジ給フトモ謗法アラバ、必地獄ニヲツベシ（一五二五頁）とも誠められてあります。此の謗法に就て佛立講は尤も八箇間敷取扱うてゐます。開導の御歌に、

諸の重きむくひの其中に謗法罪にすぎたるはなし

大君の御國にすみて大君をそしる如きを謗法といふ

然らば何が謗法かと申せば、當宗以外の佛に信仰を致すことであります。日蓮聖人云く、

タトヘバ大塔ヲクミ候ニハ先ヅ材木ヨリ外ニ足代ト申シテ多クノ小木ヲ集メ一丈二丈計リユヒ上
ゲ候也。カクユヒ上ゲテ材木ヲ以テ大塔ヲ組ミ上ゲ候ツレバ、返テ足代ヲ切り捨テ大塔ハ候ナ
リ。足代ト申スハ一切經ナリ。大塔ト申スハ法華經ナリ。佛一切經ヲ説給ヒシ事ハ法華經ヲ説セ給
ハン爲ノ足代ナリ。正直捨方便ト申シテ法華經ヲ信ズル人ハ阿彌陀經等ノ阿彌陀佛、大日經等ノ眞
言宗、阿含經等ノ律宗ノ二百五十戒等ヲ切りステ抛テ後、法華經ヲバ持チ候ナリ。（一九九五頁）

從來信仰せし佛菩薩等の本尊守札を皆拂ひ清めることを謗法拂といふ。これが出来なければ佛立講の信者とはいへない。從て邪道に墮して居るものなるが故に現當二世の利益に預ることは出来ません。

御利益の隔てとなれる不思議さは他宗堂社の札守りすら

謗法を拂らはな利生あらはれず雲が晴れねば月も拜めず

謗法を拂ふ薬のよきよて重きやまひのなほる妙法

自家安置の佛壇が清められ妙法五字の本尊をおまつりしたらば次は當然從來の信仰行爲をも改むべきであります。

法華經ヲ行ズル人ノ、一口ハ南無妙法蓮華經、一口ハ南無阿彌陀佛ナンド申スハ、飯ニ糞ヲ雜ヘ、沙石ヲ入レタルガ如シ。法華經ノ文ニ、但ダ大乘經典ヲ受持スルコトヲ樂フテ、乃至餘經ノ一偈ヲモ受ケザレ等ト説クハ是也。世間ノ學匠ハ法華經ニ餘行ヲ雜ヘテモ苦シカラズト思ヘリ。日蓮モサコソト思ヒ候ヘドモ、經文ハ爾ラズ。譬バ后ノ大王ノ種ヲ姪メルガ、又民トトツゲバ王種ト民種ト雜リテ、天ノ加護ト氏神ノ守護トニ捨テラレ其國破ル、縁トナル。父二人出來スレバ王ニモアラズ民ニモアラズ人非人ナリ。法華經ノ大事ト申スハ是也。(一九三〇頁)

日蓮宗と名乗つてゐるものの中に、此の宗祖の禁を守つてゐる者が何人ありませう。謗法佛が佛立講の特色の一と數へられるのは寧ろなさない次第であります。猶序乍ら述べて置くのは別社勸請謗法といふことで、これは世間に妙法本尊から離れて別社に種々の佛菩薩諸天を祭つてゐるのを散見致しますが、よし本尊中に日蓮聖人が書顯されてある佛名であつても謗法となるのであります。末法今時に於ては南無妙法蓮華經のみが本尊で、他の一切の佛菩薩等は妙法の體内にこもられてあらねばならぬ。隨て妙法本尊中より離れて別に獨立して安置することを許さぬ。恰も妙法は一本の樹で、他は皆枝葉であります。枝葉は樹の幹から發生して其生命を保つて居るのであるから、萬一これを樹の

幹から切離すと同時に其枝葉の生命は失はれて仕舞ふやうなものであります。以上は謗法の大體の説明で、曩に擧げた十四謗法は其細別でありますから茲には略します。猶、懈怠謗法、不養生謗法などがありますが、然しこれは實際上から生じた言葉で、教義上に取立てゝいふ程でありませんから、これ又略することに致します。

二、妙講一座 本尊の御寶前に於ての修行方法は、開導日扇上人の制定された妙講一座による。

妙講一座の内容は、一懺悔、二勸請、三回向、四隨喜、五發願の五種の文を唱へて、而して後南無妙法蓮華經を高聲に口唱するのであります。第一に懺悔の文は、無始已來謗法罪障消滅、今身ヨリ佛身ニ至ル迄、持チ奉ル、本門ノ本尊、本門ノ戒壇、本門事行八品所顯、上行所傳、本因下種ノ南無妙法蓮華經、以上。過去無始久遠已來。妙法に背き來りし謗法罪を懺悔し、只今より成佛の大目的を達成するまで本門の本尊を信仰、本門の大戒を持ち、本門の題目を口唱し奉ると誓願するのであります。第二に勸請、これは如來在世の諸尊、即ち本尊に顯現せる聖衆及び宗祖日蓮聖人已下嗣法列祖を勸請し其の威光倍增、法樂莊嚴を祈るのであります。文章が長いから略します。第三回向、自身の今修行する所の功德を法界群靈の佛果菩提の爲めに回向し、又持經者の面々の信行不退、現末の二世

大願成就、祈る處の病者の面々の當病平癒、扱は一天四海皆歸妙法等を祈請するのであります。第四隨喜は此の稀有の妙法に値ひ奉りしを喜ぶのであります。法華經第六の卷、隨喜功德品に云く、若シ人、法會ニ於テ、是ノ經典ヲ聞クコトヲ得テ乃至一偈ニ於テモ隨喜シテ他ノ爲ニ説ク云云。法を聽て隨喜するの文でありますが、今は法に値遇したるを隨喜するのであります。文は略します。第五は發願、願クハ生々世々、菩薩ノ道ヲ行ジ、無邊ノ衆生ヲ度シテ、永ク退轉ナカラシムコトヲオモフモノナリ。以上、發願は誓願を發すること、一般の祈願の願よりは非常に強い意味が籠つてゐます。誓といふものは恰も牛馬に對する御のやうなものであると譬へられてあります。馬や牛は御するものが無かつたら、路草をくろてなかく目的地に達しない。それと同じで此の誓といふものが無いと兎角なまけ勝になりやすいものであります。誓願に就て總願、別願の二種があります。阿彌陀如來の四十八願、藥師佛の十二願、釋迦佛の五百の大願などはそれ々の佛の特殊の誓願で、これを別願といふ。總願といふのは一切の菩薩に通ずる大願で四つあります。一衆生無邊誓願度、二煩惱無數誓願斷、三法門無盡誓願知、四無上菩提誓願證。以上を四弘誓願といひます。處で、此の四つの中第四の願は最上の目的たる成佛そのものであるが、これに到達するには第一の願が極めて重要であります。日蓮

聖人云く、菩薩ト申スハ必ズ四弘誓願ヲオコス。第一衆生無邊誓願度ノ願成就セズバ、第四ノ無上菩提誓願證ノ願モ成就スベカラズ(一〇〇四頁)と。そこで佛立開導師は第一の願を前掲の如く一つ文發さしめ、その一願に全力を注がしめんと教導せられたのであります。他を差置くことを御教歌に、

こんど目に娑婆に來たとき又申す、法門無盡誓願知

扱、以上の五種は即ち五種の懺悔である故に略して五悔ともいふ。なぜこれが懺悔となるかといふに、第一の懺悔はいふ迄もありません。第二の勸請は佛菩薩の來臨影向を祈請するもので、佛よ來つて、我等を救護し給へと祈る。これは今迄、佛を嫌ひ寧ろ滅し去れというてゐた罪を懺悔するのであります。第三回向、他を倒しても自利を計つてゐた罪を滅ぼさんが爲に自身の修行した功德を他に回しませんとする懺悔であります。第四は隨喜、他人の善事を嫉みそねみ、果ては妨害をも加へてゐたのを懺悔する。第五發願、これは今迄の懈怠の罪を懺悔するのであります。これ等の要文を言上した後に、本門八品所顯上行菩薩所傳の南無妙法蓮華經を口唱し續けます。口唱行と五悔の要文との關係は、口唱は正修の事觀で、五悔は助觀となります。口唱行を事觀といふのは先づ觀法に事と理との二つがあることを知らねばなりません。天台宗の觀法は理觀で、身口意三業の中には意業に屬する。日

蓮聖人は理を捨て、事相に就き口業正意を以て悪人指導の第一方法と立てられたのであります。佛立開導師の歌に

妙法を口にまかせて唱ふるを本門事行観心といふ

あな尊と妙と唱ふる聲の内に三千觀をなすになるとよ

正觀の口唱を樂とすれば助觀の五悔は解毒劑であります。先づ過去の謗法罪障の毒を懺悔陳露して、而して後妙法の大良藥を服する。天台の六祖、妙樂大師は、古衣ヲ浣フニ先ヅ灰汁ヲ以テシ後ニ清水ヲ用ユルガ如シと説かれてあります。これもよい譬喩と思ひます。猶ほ口唱の修行の中で宗祖日蓮大士の著、如説修行抄を拜讀する。これは不離身抄ともいふ。此書御身ヲ離タズ常ニ御覽アルベク候と書添へられてあるのに基くのであります。信心増進、信心不退の爲に拜讀する。又法華經第七の卷如來神力品の上行附屬の一節を訓讀する。これは上行菩薩末法出現を讚歎する意と、此經受持のものは必ず成佛疑ひなしの金句を隨喜する意とが含まれてあります。

此の神力品の一節を讀誦するに就て、或人が讀誦謗法とて經文讀誦を誹謗する佛立講が御經を讀むのは自家撞着だと非難された事がありました。佛立講は、必しも經文讀誦を攻撃するものではありません。現にかく少しでも讀經して居るのでもわかりませう。然るになぜ讀誦謗法といふ言葉があるかといふに、開導師は讀誦に二通りある。一は讚歎讀誦、二は輕賤讀誦、いふ迄もなく末法は下種の時である。從て下種の妙法五字口唱が正行で、讀誦は補助行であります。然るに當今の日蓮諸宗を見るに、其正行の妙法口唱を初心の劣行かの如く取扱ひ、助行たる經文讀誦を後心の勝行と思はせ振りにやつて居る。この正傍倒置は下種の大法たる妙法を輕賤するものなりと責めるが讀誦謗法の語であります。妙法五字の弘通の爲にする讀誦ならば讚歎讀誦であるから誠に結構なんであると示されてあります。次の御教歌を以て其意のある所を推知せられたい。

お經よめ心得てよめ末法は、下種のみぎりと心得てよめ

題目でお布施がとれぬもの故に在家のしらぬ御經よむなり

題目は是好良藥、法華經はこの妙藥の機能がきなり

三、化他の三業

自行滿れば必ず化他ありといふのが一般であるが、佛立開導師の御教は左様ではありません。自行を滿す爲めに化他行をするのであります。これを化他即自行といふ。即ち巖に四弘誓願の處で述べた如く、衆生無邊誓願度の願が成就せなければ無上菩提誓願證の目的が成就しない

のであるから、自身が成佛する爲にはどうしても一切衆生を成佛の道に引き入れねばならぬのであります。法界の一切衆生と申せば人類に限らず、禽獸蟲類の畜生道、餓鬼道、地獄道のもの迄含めていふのでありますから誠に無邊の衆生である。従てこれを悉く教化するには一生や二生で出来るものでありません。生々世々の大願であります。開導の御歌に、

助くべき衆生無邊の娑婆なれば、度願の菩薩來たりいんだり

折伏にくたびれたらば一やすみ、してまたすぐに娑婆に出でこん

死に變り生れ變りてこの娑婆に修行すること菩薩なりけれ

扱て化他の三業とは如何。慈悲を懐くは意業で、折伏の聲を發つは口業。弘通の爲めに東奔西走、

而も憎まれ謗られ、或は打擲等を被むるは身業であります。開導の御歌に、

折伏は慈悲より出づる教なり、我身の罪も遂にほろびん

折伏は人を憎まず高ぶらず、あはれむ事ぞ祖師の御本意

何の爲め憎まるゝをや喜ばん人を助けて慈悲のあまりに

○

娑婆にては我が成佛をさしおいて人を折伏するが肝腎

信心といふは折伏、折伏をせねば御弟子といふいはれなし

折伏のいくさの時は一人でも教化したるぞ手柄なりける

○

のりの爲め押入れらるゝ牢獄は死しての後の淨土なりけり

着つゝわれ忍ぶ恨みを身に重ね、法の衣と思ふうれしさ

憎まるゝ程に御法に仕へよと親の教へにかなふうれしさ

初めは意業（慈悲）次は口業（折伏）三は身業（値難）の意味を顯す。かく慈悲の念を懐いて折伏

苦行を成すればそれが我身の罪滅となり、手柄となり、淨土參拜となるのであります。化他即自行で

あります。翻つて義に述べたる自行の三業は單なる自行とのみ見えたが、化他行を自行の一部と解す

る時は自行も亦單なる自行ではなくて、やがて又化他行となる事を知ることが出来ませう。即ち意に

法を信じ口に妙名を唱へ身に恭敬禮拜することはそれが取も直さず他人の手本となるのである。他は

これを見聞して隨喜の心を起す。これは化他を意識してもせんでも其効果は必ず發生するものであり

ます。就中口唱の行は其の及ぶ範圍が非常に廣いので特に口唱即化他として稱揚されてあります。南無妙と唱ふる聲が世の人の耳に聞えて折伏となる

世の人の耳に聞えて妙法を唱ふる聲を折伏といふ
惜まるゝ心にかちて目に見えて供養參詣するが折伏

財を惜み勞を惜む欲心に打勝て、他を供養し或は參詣を勵むは罪滅の自行であります。それが其儘化他の折伏行となる。かく自他が相即して遂に成佛の大目的が達成せられるのであります。

四、教化

化他行は文字の示す如く、他を教化して此の妙法五字を受持口唱せしむることであり。然るに何故に妙法を受持せざるべからざるかの間に對して説明すべき語は、妙法蓮華經は汝自身の名であるからこれを受持せねばならぬと答ふべきであります。日蓮聖人云く、

夫レ無始ノ生死ヲ留メテ此度決定シテ無上菩提ヲ證セント思ハ、須ラク衆生本有ノ妙理ヲ觀ズベシ。衆生本有ノ妙理ト者、妙法蓮華經是レナリ。故ニ妙法蓮華經ト唱ヘ奉レバ衆生本有ノ妙理ヲ觀ズルニテアルナリ。(一一七頁)

元來法華經は何の爲めに説かれたのかといふに、衆生本來として具有する佛知見を開發せしめんが

爲めであります。法華經第一の卷、方便品に云く、

諸佛世尊ハ唯一大事ノ因縁ヲ以テ世ニ出現シ給フ。舍利弗、云何ナルカ諸佛世尊ハ唯ダ一大事ノ因縁ヲ以テノ故ニ世ニ出現シ給フト名ル。諸佛世尊ハ衆生ヲシテ佛知見ヲ開カシメ清淨ナルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シ給フ。衆生ニ佛知見ヲ示サント欲スルガ故ニ——衆生ニ佛知見ヲ悟ラシメント欲スルガ故ニ——衆生ヲシテ佛知見ノ道ニ入ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シ給フ。云云。

是を開示悟入の四佛知見といひます。大悟徹底の佛知見が衆生の己心に具有されて居るのを開示し、悟入させたい斗りに佛は世に出現したのであるとの御意であります。此の佛の内容を第六の卷、如來壽量品に説き顯はされました。如來一代の説教、五千七千の經卷中、此の壽量品の如き佛の内容を説いた經は全く無いのであります。五百塵點劫といふ久遠の昔、佛は凡夫として菩薩道を行じ、己心の佛知見を磨き上げられたのであります。これを久遠の本佛といふ。此の本佛のお悟りを妙法蓮華經と名け奉る。今我等が奉仕する御本尊こそ即ち本佛の妙法蓮華經でましますのであります。本佛の全體は此の本尊に顯現して居ます。然るに日蓮聖人は何の爲めにかゝる本尊を開顯されたかとい

ふに、一に我等の佛性の名なるを教へ、而して此の尊貴なる本佛の大慈悲の光りを被むらしめて我等に佛性を磨き上げさせんとすの御心からであります。日蓮聖人云く、

深ク信心ヲ發シテ日夜朝暮ニ又懈ラズ磨クベシ。何様ニシテ方磨クベキ。只南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ルヲ是ヲミガクトハ云フナリ。抑モ妙トハ何ト云フコゾヤ。只我ガ一念ノ心不思議ナル處ヲ妙トハ云フナリ。不思議トハ心モ及バズ語モ及バズト云フ事ナリ。乃至此ノ妙ナル心ヲ以テ法トモ云フナリ。此法門ノ不思議ヲアラハスニ譬ヲ事法ニカタドリテ蓮華ト名ク。云云。(一一八頁)

佛立開導の御教歌に

妙法はわが佛性の名なりしを、きかすは我といかで知らまし

人皆の心の名ぞと驚は、法、法華經とつぐるなるらん

あなたの佛性の名が妙法蓮華經である。といふことを教へるのが教化で、これを下種の妙行といひ、日蓮聖人は下種の導師、妙法は下種の大法と申し奉るのであります。

妙法は佛の種といふことを授けたきゆゑ憎まるゝなり

五字口唱、一部讀誦にすぐれたり知らずやこれは下種の大法

五、現證利益

末法弘通の目的は上に述べた衆生已心本有の妙法を開示するにあるのであります。が、偕て教化の實際となれば殆ど耳を傾ける者さへも無いのであります。茲に於て各宗各派何れも布教法に苦心する次第であります。日扇上人は末世の悪人には道理や經文を引いて説明しても到底問題にならぬ事を觀察し、現證利益を以て發信せしむるより外無きを悟られたのであります。御教歌に、

いか程に講釋すとも妙法の御利益見ねば信は起らず

目に見えた御利益なくば法華經を眞實經と誰かしらまし

現證利益は發信の門として多大の効價を有する。併し乍らこれは日扇上人の發明に基くものではありません。宗祖大士が六百有餘年前はつきり示されてあります。二三の御文を出せば、

日蓮佛法ヲコ、ロミルニ道理ト證文トニハ過ギズ。又道理文證ヨリモ現證ニハスギズ。(一一五五頁)

如何シテカ今度法華經ニ信ヲ取ルベキ。信ナクシテ此經ヲ行センハ手ナクシテ寶ノ山ニ入り足ナクシテ千里ノ道ヲ企ツルガ如シ。但シ近キ現證ヲ引テ遠キ信ヲ取ルベシ。(一一五六頁)

サレバ過去未來ヲ知ラザル凡夫ハ此經ハ信ジ難シ。又修行シテモ何ノ證カアルベキ。是ヲ以テ思フ

ニ、現在ニ眼前ノ證據ヲランズル人此經ヲ説カン時ハ信ズル人モ有リヤセン。(一一五七頁)
 元來現證といふ文字はいろ／＼の義に用ひられてゐます。第一に、文證に對する現證で、佛法ト申スハ道理ナリ(一六三四頁)であるが、この道理を眞理なりと直に受納し得ざるものゝ爲に經文或は祖師先哲の文書を以て立證する。これを文證又は證文といひます。然るに此の文證も信じ切れない者の爲には現實の證據を以て示すより外方法は無いのであります。即ち修行によりて不思議の利益が顯れる時始めて發信するものであります。佛法の本領は道理と經文であります。然し布教の上から考へる時は道理文證より現證の方が効價は多いとの宗祖聖人の御指南であります。日蓮聖人は道理一方便で布教をされた様に思ふ人があるかも知れぬから今二三の祖文を引て見ることにします。
 人界所具ノ佛界ハ水中ノ火、火中ノ水最モ信難シ。然リト雖モ、龍火ハ水ヨリ出デ、龍水ハ火ヨリ生ズ。心得ラレザレドモ現證アラバ之ヲ用ユ乃至此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキナリ。(九三三頁)
 御親父御祈禱ノ事承ハリ候。佛前ニテ祈念申スベク候。乃至肝要ハ此經ノ信心ヲ致シ給ヒ候ハバ現當ノ所願満足アルベク候。(一一六一頁)
 然レバ則チ罰ヲ以テ利生ヲ思フニ、法華經ニ過ギタル佛ニナル大道ハナカルベキナリ。現世ノ祈禱

ハ兵衛ノ佐殿、法華經ヲ讀誦スル現證ナリ。(一八〇七頁)
 更に一步進めて申しますと現證布教の本案は佛であります。法華經第二の卷、譬喻品に三車と大白牛車との譬が説かれてあります。それは何事も知らずに火宅の中に遊んで居る我子を助けようと父が一生懸命で呼び立てるが、子供等は何か火事だとい向聞き入れない、それで遂に一案を考へ出した。即ち牛車、鹿車、羊車の三車を貸して上げるから早く出て来いと叫んだ。すると何れも遊戯を止めて相争うて飛び出して来た。經の原文を引いて見ませう。
 汝ノ欲スル所ニ隨テ皆當ニ汝ニ與フベシト。爾時ニ諸子、父ノ説ク所ノ珍玩ノ物ヲ聞クニ、其願ニ適ヘルガ故ニ、心各勇銳、互ニ推排シ競フテ共ニ馳走シ、争ウテ火宅ヲ出ヅ。
 今迄顧みもしなかつたものも自身の利益といふことになれば、他を推排し、争うてやつて来るといふ所は、正に末法今日の機情にソツクリといはねばなりません。猪飛び出して来た子供達に對しては三車でない一大白牛車を與へられました。理窟から云へば、こりや約束が違ふ。おれは羊の車だ、イヤ僕は鹿の車だといふのであるが、そんな理窟もいはず皆んな大に喜んだ。
 各々大車ヲ得テ未曾有ナルコトヲ得タルハ、本ノ所望ニ非ザルガ如シ。(譬喻品)

と、望外の賜物に喜んだのであります。所で子供はそれでよいとして、釋迦佛は、サテ舍利弗よお前はどうか思ふ、三車をやるというて大白牛車をやつた父の嘘付といふ批難を受けるのが當然と思ふか、どうじゃ。舍利弗尊者は假令ひ一物を與へずとも火難を免れ一命を全うすることが出来た丈でも充分であります。況や望外の大車を賜ふをやと答へられました。願ふ所のものを與へるといふは現證利益で、望外の賜物といふは成佛の一大事であります。現證利益によりて發信した爲め入講の際豫期せざりし成佛でふ大利益を頂戴することが出来る身の上となつた。これ入講者には本の所望では無かつたのであります。教化するものゝ方では當然の豫定行動であつたのであります。或は思ふ人があるかもしれぬ。現證は方便で成佛が眞實目的とすれば、現證は所謂の嘘も方便といふ程度のものか。否、決してそんな輕薄なるものではありません。宗祖聖人は現證の有無によつて成佛の成不を決すると述べられてあります。それは文永八年二月末より晴天のみ續て一滴の雨もない。三月、四月、五月、六月と徒らに過ぎ庶民大に苦しんだ。執權時宗大に憂ひ、日頃歸依厚き極樂寺の良觀上人へ祈雨の依頼をされた。早速御受けして六月十八日より祈りにかゝることにきまつた。その事を宗祖聖人が聞き及ばれて、時こそ來れり。現證を以て彼を屈伏せしめんと直に使を遣はされました。

余案ジテ云ク、現證ニ付テ事ヲ切ラント思フ處、彼常ニ雨ヲ心ニ任セテ下ス由披露アリ。此ニ兩火房祈雨アリ。去ル文永八年六月十八日ヨリ二十四日ナリ。此ニ使ヲ極樂寺ヘ遣ス。年來ノ御歎キコレナリ。七日ガ間ニ若シ一雨モ下ラサバ御弟子トナリテ、二百五十戒具サニ持ツ上ニ、念佛無間地獄ト申ス事ヒガヨミナリケリト申スベシ。(一五六六頁)

何といふ大膽な言分でせう。僅の一現證にて立宗の大義を捨てようといふ事は、而も對手にもよれ、雨ヲ心ニ任セテフラスてふ祈雨の名人を以て自ら任じて居る人に、それも一日片時の間の事でない七日間、大雨とでもいふかといふに一滴の雨で、法の邪正を決しようとは寧ろ無茶というてもよい。どんなはづみに一滴の雨が降らぬ事もあるまいと、側のものには心配する處であるが、宗祖聖人は少しも心配なさらない。彼の邪教でどうして雨が降るものかと、これを以て現證と成佛の必然的關係のあることが伺はれるのであります。猶ほ七日の間に一遍も雨はふりませんでした。越えて七月四日まで祈りに祈つたが遂に骨折り損となつた。此時日蓮聖人は良觀上人を責められた言葉に、

法華眞言ノ義理ヲ極メ、慈悲第一ト聞ヘ給フ上人ノ、數百人ノ衆徒ヲ率ヒテ七日ノ間ニイカニ雨ヲフラシ給ハヌヤラン。是ヲ以テ思ヒ給ヘ、一丈ノ堀ヲ越ヘザル者、二丈三丈ノ堀ヲ越ヘチンヤ。易

キ雨ヲダニフラス給ハズ況ヤ難キ往生成佛ヲヤ。後生恐ロシクヲボシ給ハ、約束ノマ、ニ急ギ來リ給ヘ。雨フラス法ト佛ニナル道、教ヘ奉ラン。(一六〇九頁)

矢張り祈雨と成佛とは続きでありました。現證利益を單なる方便と輕視することは出来ないのです。然し現證利益の一事に執着して成佛の一大事を忘れたる時は、此の現證は最早現證ではありません。單なる現世祈りに過ぎない。と開導聖人は嫌はれてあります。

信心といふは佛果を願ふべし、今を祈るは皆迷ひなり

いづれをか大事と思ひ惑ふらん、未來願はゞ此世ともなり

現世より未來大事と行すれば今世も共に所願成就

六、呵責謗法

化他の業は他をして此の妙法五字を受持信唱せしむるが目的であります。然し同じく受持するといつても謗法の穢れがあつてはいけません。此事は前に自行の三業の下に於て述べた通りであります。そこで其の謗法の穢れに染まぬやうに指導する責任があるのであります。但だ自分の教化した人ばかりでない、進んで他人の教化した人でも矢張り謗法不信の行爲を觀過してはなりません。これを觀過するものは與同罪といふ罪を作ります。宗祖聖人が四條金吾に與へられた御消息

に、

一國コゾリテ日蓮ヲカヘリテセム。上一人ヨリ下萬民ニ至ル迄、皆五逆ニ過ギタル謗法ノ人トナリヌ。サレバ各々モ彼ガ方ゾカシ、心ハ日蓮ニ同意ナレドモ身ハ別ナレバ、與同罪ノガレ難キノ御事ニ候ニ、主君ニ此法門ヲ耳ニフレサセ進セケルコソ有難ク候ヘ。今ハ御用ヒナクトモアレ、殿ノ御失ハ脱レ給ヒヌ。(一〇五九頁)

涅槃經ニ云ク、若シ善比丘、法ヲ壞ルモノヲ見テ、置テ呵責シ驅遣シ舉處セズンバ當ニ知ルベシ、是ノ人ハ佛法中ノ怨ナリ、若シ能ク驅遣シ呵責シ舉處セバ是レ我が弟子、眞ノ聲聞ナリト、余、善比丘ノ身タラズト雖モ、佛法中怨ノ責ヲ遁レンガ爲ニ唯大綱ヲ據テ粗ボ一端ヲ示ス。(三八四頁)

前には與同罪とあり、次には佛法中怨ノ責とありますが、何れも他人の謗法を見免し開免しにする罪で謗法と同罪となるのであります。猶ほ涅槃經の置テ呵責セズの置の一字を日蓮聖人は非常に強く誡められてあります。

置不呵責フ文ノ事、仰ニ云ク此ノ經文ニ於テハ日蓮等ノ類ヒノ恐ルベキ文字一字之レアリ。若シ此ノ文字ヲ恐レザレバ縦ヒ當座ハ事ナシトモ未來無間ノ業タルベシ。然ラバ無間地獄ヘ引キ入ル獄卒

ナルベシ。夫レハ置ノ一字是ナリ。此ノ置ノ一字ハ獄卒ナルベシ。謗法不信ノ失ヲ見ナガラ聞キナガラ云ハズシテ置カンハ、必ズ無間地獄へ墮在スベシ。乃至日蓮ハ此ノ字ヲ恐ル、故ニ、建長五年ヨリ今弘安年中マデ在々所々ニテ申シ張りシナリ、云々。(日向記)

日蓮一代の折伏は置の一字に始まる、といふのであります。當講に於て呵責謗法を重視する誠に所以ある哉。御教歌に、

謗法を見つゝ聞きつゝ責めざればわが身も同じ罰當るなり

謗法を責むるは菩薩、せめざるは地獄へ落す鬼にぞありける

第四 信仰の目的

一、即身成佛 信仰の目的は苦みから離脱して永劫の樂しき生活に入ることにあります。日蓮聖人云く。佛法ハ自他宗異ナリト雖モ、瓶ブ本意ハ道俗貴賤共ニ離苦得樂、現當二世ノ爲ナリ(八六八頁)。我等は淺間敷凡夫で而も住む世界は弊惡充滿の火宅の娑婆であります。そこで念佛宗などでは捨身往生といふ教を説て、早く此の身を捨て、西方十萬億土の彌陀佛の御膝元へ往生を願へと勧め

る。是は一種の自殺獎勵になるので寧ろ有害といはねばなりません。日蓮聖人は是は佛の眞意ではない方便の教である。眞實の法華經の教は即身成佛であると叫ばれたのであります。即身成佛とは身に即して佛を成す、といふことで捨身往生の反對であります。即ち前に述べた下種——我等の己心の具徳たる佛性を教へて開顯せしめ、其の自在の神力を發揚させる。其の常住不滅、不老不死の生活に遊樂せしめる事であります。然らばそれは何時到達するかといふに、下種された時が到達した時であります。これを下種即身成佛といふのであります。開導の御歌に、

持ちたる日より心の蓮の花、さきてある身と悟りける哉

吾祖師の教へのみ文おろがめば胸の蓮の花ぞ開くる

然らばそれで立派な佛か、といふにこの佛を名字即の佛といふ。此の佛がやがて觀行即の佛、相似即の佛、分證即の佛、究竟即の佛と、だん／＼進んで行くのであります。究竟即の佛が即ち完成されたる佛であります。どんな事をして進んで行くのかといふに慈悲に充滿せる佛は衆生濟度をするより外に樂しみも仕事もないのであります。佛立開導日扇上人云く、

淨土參拜シテ樂ヲセウト思フヲサトス。信者心得違ヒラスベカラズト云フ法門ノ事。

九界ノ衆生ノ助ケニモナラズ、教ヘニモナラズ、カラダハ樂シテウマイモノ食フテ、ヨイ衣ヲ着テ
廣キ殿堂、高キ屋ニ女ト酒トヲ並ベ立テ、百味ノ飲食、遊興ニ娛樂快樂ヲ極ムルヲ樂シミトスル
佛菩薩阿羅漢等ハ寂光淨土ニ一人モナシ、乃至佛菩薩ハ九界ノ衆生ヲ助ケンガ爲ニ身命ヲ抛テ
衆生ノタメニ苦シムヲ樂シミトシ給フ云々。(開化要談)

どんな佛でも末法今日に出現される時は菩薩の姿であります。これを從果向因、人界示同の尊形と
申し奉る。佛果の位より佛因の菩薩界に向ひ、人界に凡夫と同じ姿を示現されるのであります。こ
の人間に示同されて衆生救助の菩薩行が何よりの佛の樂しみとされる所なのであります。

死して又、また此の國に生れ来て、法に仕へて人を助けん
苦しみを樂しみとして行すれば難は菩薩の遊戲なりけり

寂光で樂隱居する心なし、娑婆の修行が眞の法樂

二、寂光淨土

佛の住む世界を寂光淨土といふ。法華經に本佛は常に此の娑婆世界にありと
説かれてあります。妙樂大師云く、豈ニ伽耶ヲ離レテ別ニ常寂ヲ求メンヤ。寂光ノ外ニ別ニ娑婆
アルニ非ズ。と、伽耶とは娑婆世界の異名であります。されば此の娑婆の外に別に寂光淨土はな

いのであります。日蓮聖人云く、今本時ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ
(九三九頁)。開導師歌うて云く、

自由自在、娑婆と寂光、文福茶釜おなじものにてくるりと變る

經に遊戲神通して佛國土を淨むとある意を詠ぜられた歌に、

寂光の都と娑婆を思ふ故、けふも御法に遊びくらしつ

死ぬるにはあらでしばらく寂光へ、かへる所はこゝの娑婆なり

第五 結 勸

無智の信心に安住し、南無妙法蓮華經と口唱し、妙法經力を以て一切衆生を折伏するが本門佛立講
の信仰であります。佛立開導の御教歌に、

幸に智慧なき身こそうれしけれ、しらす本化の菩薩なりけり

今迄はものしり人にあひわびぬ、無智の信者にわれ親しまん

われ人をさとすばかりの智慧もなし唯信心の友をもとめん

(終)

現證論據

佛立開導日扇上人御指南
本門立佛講旨

本門法華日蓮宗ハ、久遠實成ノ佛ノ立テサセ給ヒシ宗旨ナル故ニ佛立宗トイフ……………經ニ云ク諸經中王、最爲第一……………斯ノ如ク立テサセ給ヒシ故ニ、其ノ趣ヲ解説教導スル故ニ、佛立講ト云フ。

宗門ノ本尊ハ萬法具足ノ大曼荼羅ニシテ……………題目ヲ以テ本尊トナス……………經云如來一切所有之法、コレ妙法五字ニ萬法具足ノ文證ナリ……………此ノ五字文ニ非ズ義ニ非ズ一部ノ心ナリト……………行者已心ノ三千具足ナリ……………一切衆生ノ佛性ナリ……………一切衆生語默作々皆一心ヲモトトシテ起ルナリ……………故ニ心ヲ一境ノ妙法ニ止メテ餘念ナク平ニセシムレバ……………生死ニ迷ハズ……………主ニ忠ニ親ニ孝ノ誠ノ心トナリ……………信心ノ位ニテ悟ノ位ニ入ルノ直道……………仁義五常ノ道モ自ラニ立テバ現世安穩ノ法ナリ……………生死ニ迷ハザレバ後生善處ノ法ナリ……………外典ニ國家平ニスル法ニモ其ノ心ヲ治メシムルヲモトトス……………内典ハモトヨリナリ……………過去現在未來ノ三世ノ因果ヲサトシテ、勸善懲惡ノ法ヲ説キ、二世安樂ノ大法ヲ弘ムル現世安穩、天下泰平、後生寂光ノ福報ヲ示ス……………是本門法華經ノ大法ナリ。

諸佛諸天ヲ以テ本尊トセズ、諸佛ノ師トセサセ給フ本法ヲ本尊トスル……………則チ經文ナリ……………祖師ノ立宗ノ本懷ナリ。

明治五年壬申六月五日

清風謹書
在御列

第一總論	……	四七
一 發信の門	……	四七
二 他宗との相違	……	四九
三 守護の目的	……	五三
四 墮落の原由	……	五四
五 本述一致の邪義	……	五八
六 本尊は本述勝劣を表す	……	六〇
第二 現證の眞意義	……	六三
一 現證の四義	……	六三
二 現前せる證據	……	六五
三 現前せる證果	……	七三
四 現在したる證據	……	七六
五 現在したる證果	……	八二
第三 法華經と現證	……	八四
一 現證經	……	八四
二 現證の原則	……	八八
三 一代超過の大端	……	九二
四 寶塔の涌現	……	九四
五 地涌千界	……	一〇〇
六 十大神力	……	一〇四
七 燒臂還復	……	一二三
八 六根清淨	……	一二七
九 増益壽命	……	一三三
第四 布教法としての現證	……	一三六
一 開基日隆聖人と現證	……	一三六
二 宗祖大士と現證	……	一三一
三 釋尊と現證	……	一三七
四 三車と大白牛車	……	一三八
五 病子と良醫	……	一四三
六 父王教化に二王子の苦心	……	一四九

現證論據

第一總論

一、發信の門

佛立開導日扇上人は現證利益を非常に重視せられました。その事は、現證の利益を見ずに愚にも法の邪正をあげつらふ哉

と詠ぜられた一首の教歌によりても知ることが出来ます。即ち現證利益を宗教宣布の第一線に置いて、少くとも現證利益のない宗教は宗教としての價値はないものであるといはれたのであります。されば或る書には當宗ハ現證利益宗ナリとまで判ぜられてある位であります。然らば中山や原木山の禱と同一なりやと疑ふ人があるであらうが、彼此の相違は種々ありますが、この現證利益といふことに就ても天地の差があると申さねばなりません。第一彼等が現世の利益を取扱ふはたゞ現世の禱りとしてであつて、この禱りと法華經の最大目的たる未來成佛と何等の關係はないのであります。故に彼

等にありては現證利益といふことはいへない道理であります。なぜかといふと、現證とは文證（又は證文とも云ふ）に對する言葉で、生き證據といふ意味であります。この妙法五字を信唱すれば末代惡人愚人の未來無間地獄に墮すべき定業を轉じて寂光淨土參拜を成就せしむることが出来る、その經文上の證據——文證——は第七卷に我が滅度ノ後ニ於テ斯經ヲ受持スベシ、是人佛道ニ於テ決定シテ疑ヒアルコトナシとある。而しそれ丈で信を生ぜない人の爲に生き證據——現實の證據——現證として不治と定まつた業病を口唱力で平癒せしめ以て未來の信を發さしめんとするのであります。即ち發信の門として現世の祈り成就を施設するのであります。佛立開導の御教歌に

物しりは何も益なし御利益を見てこそ法の妙を信すれ

御利益のあらはるゝをば眞ぞと思ひて法の妙を信ぜよ

めに見えた事でなければ今時の我等凡夫に信は起らず

隨て信仰の目標は未來成佛にあります。若し未來成佛を離れて現世のみを祈るものあらばそれは寧ろ謗法として却けねばなりません。されば病氣平癒を祈願する場合でも、必ず先づ祖先の靈を弔ひ而して後に祈願言上をなすのであります。これに關する御教歌は

信心といふは佛果を願ふべし今を祈るは皆迷ひなり

いづれをか大事と思ひ惑ふらん未來願はゞ此世ともなり

現世より未來大事と行すれば今世も共に所願成就

偕て未來といふ事を聞入れずたゞ現世のみ思ふて居る人——急病人の如き——には例外として先づ現世の願を成就せしめ、而して後に未來を教ゆべきであるといふ御教歌もあります。

現世のみ思ふ人よりなき時は現世祈りで御利益を見よ

これは前の發信門の歌と殆んど同じものであります。前のはたゞ發信のみを説き、これは現世のみ思ふ人といふ制限つきで、前よりは更に狭い範圍内の人々を教化する場合に特に許された御教歌であります。

以上を以て現證利益と未來成佛との關係がほゞ判つたことと思ひます。

二、他宗との相違

次に中山派の祈禱と當講の祈願との相違點を細く述べて見ると、彼れは僧侶の祈願を主とし信者自身の方は傍とされ、甚しきに至つては信者でも何でもない者の爲に祈禱をする。それに反して當講は信者自身を主とし、僧侶の方は助行とされて居ることあります。

譬ば茲に或人を當講で教化する。否祈願をする場合は先づ祈願を願ひ出る人、及び受ける人が必ず當講の信者でなくてはならぬといふことが第一條件であります。よし願ふ人は信者でも受ける人が信者でない場合には祈願はせぬのが原則であります。それ故若し信者でない場合には先づ入講をして信者となる必要であります。隨て謗法拂をして當講の所定の本尊を護持せしめ、本人自身の信行口唱を勵ますのであります。僧侶はこれをして信をゆるまさぬ様監督をし、時に折伏を加へて増進を計る。その修行の實地に當りては一緒に口唱して修行を容易ならしめる。これを助行といふ。本人が正行であるのに對して援助の行といふ意味であります。

更に大なる相違點を擧ぐれば、彼輩の祈願の對象——本尊——は鬼子母神とか毘沙門とか或は妙見とかの神體が多い。然るに當講にありては必ず妙法五字の御本尊でなくてはならぬのであります。彼等の解釋によれば、未來成佛は御本尊の利益、現世の守護は諸天善神、それ故現世祈りの場合は箇々の神々に祈願するのであると、これは根本に於て間違て居るのであります。未來成佛の道と現世利益の道と道が違つて居る様に見て居ますが、當講の御教へには兩者の道は全く同一であるのであります。これは前に出しました御歌や説明で御わかりになつてありませうが、未來成佛の行は、死にか

けてからするのでなくこの法を持ちそめた日——時——から致すのであります。

其の持つた上で現世の願をするのでありますから、信心の中で祈りをするのであります。されば信行の方法は全く同一であります。宗祖大士の御抄に

謗法ヲ責メズシテ成佛ヲ願ハ、火ノ中ニ水ヲ求メ水ノ中ニ火ヲ尋ヌルガ如クナルベシ。ハカナシ
 〳何ニ法華經ヲ信ジ給フトモ、謗法アラバ必地獄ニヲツベシ。(曾谷殿御返事 日蓮聖人遺文一五一

五頁)

未來成佛の法は既に謗法を恐れて妙法五字を信唱するにある以上、現世の願成就の道も矢張り謗法を拂ふて信者自身の信行を主とせねばならぬことは火を踏るより明かであります。

されば當講に於ては現證利益は一分の六根清淨成就であり、やがて成佛の第一歩であると教へられてあります。身延山に行つて見ますと入口の山門即ち仁王門で御籠りをしてゐる信者があります。仁王尊に向つて南無妙法蓮華經と太鼓を鳴らして拜んでゐます。有名な中山の法華經寺では祈禱所としては鬼子母神堂でやつてゐます。其他柴又の帝釋天王、雜司ヶ谷の鬼子母神等何れも皆御本尊とは別に祈禱所が出来てゐるのであります。それ故本堂には參詣せずして祈禱本尊たる神の御堂丈で歸る

人が多い。従て身延山には本堂が焼けてから未だ建立せぬ、無くても不自由せぬ譯であります。雜司ヶ谷も本堂がつぶれてから再建をせず其跡には狐の穴を築き、威光天といふ稻荷を祭つて油揚げや狐の像を賣つて居ります。

此の威光天といふ稻荷は或は池上本門寺の石段下に祭つてあるのが本家かもしれませぬ。何れにしても信者の傾向を察する住持僧の施設が斯様であります。身延山は明治八年といふ六十餘年以前に焼失した本堂を今に再建せずに祖師堂で間に合はして居ります。それで迷信者の歡迎する神々の方は、仁王堂、妙法二神(天狗)、帝釋天、八大龍王、大黒天、鬼子母神、七面天女、石割稻荷、其他何々稻荷など何れも大小の堂を構へて夫れ々御賽銭かせぎをして居ります。

三、守護の目的

元來諸天善神が法華の行者を守護するといふのは法華經の行者なるが故に守護するのであつて夫等の神々に祈るから守護するものではないのであります。恰も警察官が臣民を守るのは、臣民にたのまれるから守るといふのでなくて、正しい臣民なら頼まれなくても守るが任務であります。たのまれるからとて悪い臣民——盜賊——を守ることは出来ないのであります。若しそんなことがあれば直に免職であります。それと同じく諸天善神は法華經を修行するもの——成佛の目的

を持て行するのには勿論である——を其目的を完成せしむる爲に守護するのであります。故に神々は我等より何等の報酬を得ずとも、守護することに依て神自身の修行が成就する故に、妙法より御利益が頂戴出来るのであります。陀羅尼品に

汝等但ダ法華ノ御名ヲ受持スル者ヲ擁護スル福量ルベカラズ

と釋迦佛が讃歎されてあります。何の僅かな供物目あてに惡人共を守護遊ばすものですか。彼の龍ノ口の御法難の道すがら鶴岡の八幡宮の前で宗祖大士が、如何に八幡大菩薩、眞實の神か邪神か今法華經の行者日蓮が妙法の爲めに頸切られんとするに何故に出で遇ひ給はぬぞ。今宵若し命終りなば靈山の釋迦佛へ日本の八幡大菩薩は誓を守らぬ神なりと、さし切つて言上すべしと申されたと傳へられてあります。八幡大菩薩がおれを拜まぬから守護せぬとあつたらば釋尊より御叱責を受くべきものであるのであります。たゞ彼れ守護神の注目する所はこれは果して法華經の正しい信者であるや否やを驗するのであります。換言すれば謗法の穢れはありはせぬかどうかといふことを御覽になるのであります。謗法のあるのは正しい修行者でない。是は前の曾谷殿御返事にあります様地獄行の衆生でありますから守護を加へる必要はない。こんなものを守護すると謗法の味方と見られて仕舞ふ、大變々々

と善神は其人から遠離して仕舞ふのであります。この反對に正しい信者であれば自分の名を唱へて守護を願はずとも必ず守護せねばならぬのであります。彼の菅原道真公の歌として傳へられて居る、

心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん

とあります如く、信心が誠の佛道になつて居たならば祈らずとも善神は護るのであります。

四、墮落の原因

ナゼ身延山や中山の法華經寺、池上の本門寺等はあんな風に信仰が墮落したのでせう、と不審がるお方が随分あらうと思ひますので序を以て一言申して置きます。

そも、信仰の墮落は教義の不完全から來るものであります。彼の身延山の總門にかけられた、開會關といふ文字があつた墮落を物語つて居るのであります。尤も開會といふことは法華經の御力を表すものであります。が兎角正しい意味に用ひずして之れを間違つて取るものでありますから、宗祖大士の法孫、華洛弘通の大導師日像聖人は

初心ノ者ニ對シ開會觀心ノ法門ヲ云フベカラズ。之ヲ沙汰セバ即チ謗法ヲ起シ折伏ヲ妨ゲム。と遺誡されてあります。開會といふことに法開會、人開會といふことがあります。佛がお悟りを開

かれてから四十二年の間いろ／＼の御經を説き、後八年の間法華經をお説き遊ばした。この前の四十

二年の經々は實は方便教で、後八年の法華經を説き聞かす爲めの調機調養の法門でありました。いはば大學に入る爲めに豫科がある、こゝで豫備知識を養ふといふがごとく、目的は法華經の法門を正しく聽聞させるが爲でありました。しかるに豫科の教に執着して目的の大學の法門に入らぬ人々が多い。其處ではは方便の教だと説き論して其執着を破り眞實の教を授けたが、偕て振り返つて見れば、四十二年の經々は皆夫れ／＼意義のあることで決して悪法ではないのであります。たゞ執着をして肝心の御教に背くから打破るといふことが必要となつたのであります。されば一旦それを棄てさせて眞實の教を頂いた以上、最早執着が無くなつたから、あれもなか／＼役に立つたものなんだよ、あれは皆々を正法に導いてくれた恩人だよ、方便の經とて廢物にするのではない、皆法華經の中の一部である。其の本來具はれる價値を顯して、法華の組織内に歸入せしめる、これを法開會といふのであります。然し開會しても本末上下の區別は何處迄も正して行くもので、親子は一體、王臣一致と申しても、子が親をオイ君呼ばはりにするのではありません。王と臣とが友達となるのでもありません。臣子は主親を敬ひ、又主親は臣子を愛するといふ差別が存するものであります。それを兎角墮落すると親子一體ぢや。親のものは子のものの子のものは子のものといふ強い考が忤どもに起るのであります。それを

宗祖大士は如説修行抄にお示し下されてあります。

當世日本國中ノ諸人一同ニ如説修行ノ人ト申シ候ハ、諸乘一佛乘ト開會シヌレバ何ノ法モ皆法華經ニシテ勝劣淺深アル事ナシ。念佛ヲ申スモ眞言ヲ持ツモ禪ヲ修行スルモ、總ジテ一切ノ諸經並ビニ佛菩薩ノ御名ヲ持テ唱ルモ、皆法華經ナリト信ズルガ如説修行ノ人トハ云ハレ候也等云云。予ガ云ク然ラズ。(日蓮聖人遺文九六九頁、以下日蓮上人遺文の六字を略す)

宗祖大士は然らず、違ふ、と仰せになつてあります。どう違ふかと申すと、十章抄にタトヒ開會ヲ悟レル念佛ナリトモ猶體内ノ權ナリ、體内ノ實ニ及バズ。(六七七頁)

と御示し遊ばされてあります。開會の上に差別を立てねば秩序を亂すものであります。されば開會の上にも成佛の教は法華經、末法下種の要法は南無妙法蓮華經の題目に限る。このお題目を皆に受け持せしめる様に何れの法も努力すれば、それで何れの法も皆御役に立つといふものであります。處が番頭が掛先をごまかすといふ世の中、とても經王のお題目を立て、居ることをせぬ惡僧ども、謀叛を企て、お題目様と對抗するといふが現在の有様、それ故今は開會の法門は却て味方の規律を亂す基でありますから、一切これを用ひず一切折伏主義で行くが當世末法の布教の大方針であります。

以上は法開會に就て申しましたのですが人開會も同様で、一切の佛、菩薩、神々皆久遠實成の釋尊の方便の姿である。觀音菩薩は三十三身に身を現じて所有の諸の衆生を救ふといふが、釋迦牟尼世尊は三十や五十や百や千でない、無量無數の姿を以て衆生を救助されるのであります。されば一切の佛、菩薩、神々は皆釋迦牟尼佛であるといふが人開會であります。而してこれとても開會の上に差別を立て、根本の釋尊は勝れ、一切枝葉の分身の佛神等は劣る。體内の權は體内の實に及ばず、體内の垂迹は體内の本地に及ばずと教へられてあります。されば宗祖大士は勝れたる根本本地の釋尊をだに本尊として拜めば、一切の枝葉の垂迹示現の佛菩薩、神々は其の本體釋尊なるが故に皆一時に拜んだ事になる。元綱を引けば綱目は動く道理、方便の姿は方便を必要とする人には無くてならぬ姿であらうが既に眞實の弟子檀那であれば方便の姿は不用である。其の方便の内にはまします眞實體文を尊敬すればよいと本門の本尊をお授け下さつたのであります。十界の曼陀羅中に諸尊がましますのはこの義を顯現したものであります。十界の曼陀羅は全體として久遠の釋迦佛、本末を顯はした尊形であります。然るにこの御本尊から一體支引離して別社勸請すれば、それは久遠の釋尊から引離すことになつてもとの方便の姿となつて仕舞ふのであります。枝を幹から切り離せば最早それは生命の無い

草木でありますと同様、本佛から切り離されたる枝葉の神佛は何の生命もないものと成り下つたのであります。それを人開會の墮落と申します。身延の總門にいかめしく掲げられた開會關の三字は、此總門内一切の神佛は、皆開會せられた神佛であるから難有い神佛であるといふ意味を顯はして居るのでせうが、御本尊様から切離した別社勸請は、決して獨自に於て久遠の生命を呼吸するものではありません。最昔本佛の血脉は斷絶して居るのであります。若し總門内は一幅の御本尊である、一箇の本門の戒壇である、決して別社勸請にはならぬと逃口上を申すかもしれませぬが、總門内には社殿ばかりでない、いかさま野郎だの茶屋女などの悪るが巢を喰うてゐるが、あれらも矢張り本尊聖衆であるか、御戒壇中で邪婦公許といへば助平野郎は或は喜んで御本山詣でをするかもしれぬが、清淨なる滅罪生善處とはいふことは出来まい、と申さねばなりません。

所詮開會といふ文字を衆人參拜の總門に出すことが間違つてゐるのであります。開會は能化の聖人の内證に懐いて置くべき法門で、表に顯すものでないのであります。それを表に掲げるといふのが間違つた教理上から來る當然の歸結で、即ち本迹一致の邪義がこの愚を敢てせしめたものであります。

五、本迹一致の邪義

宗祖大士は治病抄に仰せになつてあるには

法華經ニ又二經アリ。所謂ル迹門ト本門トナリ。本迹ノ相違ハ水火天地ノ違目ナリ。例セバ爾前ト法華經トノ違目ヨリモ猶相違セリ。爾前ト迹門トハ相違アリト雖モ相似ノ邊ニ有リヌベシ。乃至ナホ本迹ヲ混合スレバ水火ヲ辨ヘザルモノ也。(二〇九九頁)

と。同じ法華經中にあつても前の十四品迹門と後の十四品本門とは天地水火の相違があるのであります。然るを開會の上には本迹は一致である即ち一往勝劣再往一致といふ邪義を立て、宗祖大士の此の御文を無視して仕舞つてゐるのが身延山一派であります。尤も清水龍山師の如き彼の宗内で第一流の學者は昔の人は本迹一致など馬鹿氣たことをよくも申したものだと思つて居るが、外の人々は矢張り一往は勝劣を立てるが往いては一致なりと申してゐます。この再往一致、即ち開會の上に一致を立てるといふことが、やがて一切の迷信をわき出させる根元であります。本迹一致はやがて權實一致に墮し、佛神一致、一切平等となるのであります。これは天台大師の述べられた諸法實相論を難有いものだと思ふから自然本迹一致を主張する様になつたのであります。天台は迹門の導師なれば、迹門正意在顯實相でよろしいが、今日蓮大士は本門の導師でましますから、本門正意顯三壽長遠とて久遠の釋尊を一切衆生に信ぜしめねばならぬのであります。然るに猫も杓子も狐も狸も仁王も天狗

も皆久遠の佛では久遠の佛の尊嚴を毀つけるものといはねばなりません。

本迹の二門の相違は、迹門は諸法實相が根本でありますから理を尙ふ故に不二の法門を面とします。本門は久遠實成の釋尊が生命でありますから、本因本果の事を主とする、事を主とする故に而二を正意とするのであります。差別の物々三千の事象を一體の實相理に會歸、融合するは迹門の法門これを二而不二といひます。二は差別相をいふ言葉であります。この不二一體の理の上に千差萬別の波瀾を認めるが本門の事の法門であるから不二而二といひます。不二は無差別の義、二ナラズシテ而モ二ナリは一體の上に差別の相を生かすのであります。

天台大師は不二の法門を主とする迹門の導師、その眞似を而二を主とする本門の導師日蓮大師の末流がしてはよろしくありません。古來この天台の眞似をするのを天台の袋かつぎと申します。この袋かつぎの人々は不二といふことを大變難有がる處から開會といふ内證をも表看板とし、神も佛も、本地も垂迹も皆不二ちや平等ちや平等大慧一乘の妙法ちやと申して居ります。この不二を喜ぶ處が謗法の根源であります。

六、本尊は本迹勝劣を表す

種々と教義上に本迹一致を主張致しますが、一番肝心な御本尊

様はどうちやといはねばなりません。觀心本尊抄に曰く、

塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニハ釋迦牟尼佛、多寶佛、釋尊ノ脇士ハ上行等ノ四菩薩、文殊彌勒等ハ四菩薩ノ眷屬トシテ末坐ニ居シ、迹化他方ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民ノ大地ニ處シテ雲客月卿ヲ見ルガ如シ。十方ノ諸佛大地ノ上ニ處スルハ迹佛迹土ヲ表スルガ故ナリ。云云（九四〇頁）

本化の上行等の大菩薩は釋尊の脇士として上座にあり、文殊彌勒等さへ漸く四菩薩の眷屬となり、其他の迹化の菩薩は遙か末座にあり、又本佛は高く雲上に迹佛は迹土を表して低く大地に坐す。これは明らかに本迹勝劣の相を圖示し給ふ所であります。まさかこれを未開會の法門といふ人はありません。本迹勝劣は開會の上にも何處迄も存するものであることを知らねばなりません。

非常に枝葉に亘り過ぎました。已下現證の眞意義、法華經と現證、布教法としての現證の三篇二十節に亘りて佛立講の主張する現證義を述ぶることとします。

第二 現證の眞意義

一、現證の四義 現證といふ文字に就て解釋を加へて置きたいのは、現といふ字にも證といふ字にも夫れ々二様の義を含んで居るといふことです。先づ證といふことから申して見ますと、證とは普通一般では證據、證人、證文等と熟字して「アカシ」とか「シルシ」とかいふ意味合に使はれて居りますが、佛教では多くの場合、證覺、證得、證大菩提といふ風に「サトル」ことに用ひられてあります。彼の世俗に「内證」といふ言葉が盛んに使はれて居りますが、あれも本來は「ウチノサトリ」の義で、佛様が未熟の衆生の爲に善巧方便し給ふに對し、御心の内の眞實の御悟りを「内證」と申してあるのであります。それが轉訛して女房の亭主に對して隠し事をするのを「内證事」といふ様になつたのであります。然し佛教でも證據といふ意味に用ひない事はありません。法華經見寶塔品に多寶如來が釋迦尊の御説きになつた法華經の眞實であることの證人に御立ち遊ばしたことを説いて、法華經ヲ説ク處有ラバ、我が塔廟是ノ教ヲ聽カンガ爲メノ故ニ、其ノ前ニ涌現シテ爲メニ證明ト作テ讚メテ善哉ト言ハン。(見寶塔品)

とあります。茲を以て證明法華の多寶如來と申し奉るのであります。又提婆達多品に、智積菩薩、文殊支利ニ問ハク、仁、龍宮ニ往テ化スル所ノ衆生其數幾何ゾヤ。文殊支利ノ言ク共數無量ニシテ稱計スベカラズ、口ノ宣ブル所ニアラズ、心ノ測ル所ニアラズ、且ク須臾ヲ待テ自ラ證アルベシ、言フ所未ダ竟ラザルニ無數ノ菩薩寶蓮華ニ坐シテ海ヨリ涌出セリ。とあるのも矢張り證據といふ意味であります。口でもいへぬ心でも思へない程澤山な教化が出來たそれはやがて事實で證せられるであらうといふことを「自ラ證アルベシ」と仰せられになつたのであります。

次に「サトル」といふことに就て文例を挙げますと、法華經方便品に此ノ輩ハ罪根深重ニ及ビ増上慢ニシテ、未ダ得ザルヲ得タリト謂ヒ、未ダ證セザルヲ證セリト謂ヘリ。

とあるが如きであります。即ち罪障が重く且つ慢心者であつて、未だ證得して居ないにもかゝはらず、最早己れは悟つたと思ふて居ると云ふ事でありませぬ。其他安樂行品には

法ヲ聞テ歡喜シ而モ供養ヲナシ、陀羅尼ヲ得、不退智ヲ證ス。乃至善法ヲ修習シ諸々ノ實相ヲ證ス。

不退智といへば成佛に於て退轉せざる智慧であります。その決して退轉せざる智慧、換言すれば必ず成佛する智慧を得られたのですから、それが所謂「サトリ」であります。實相といふのは眞理といふと同一で實相ヲ證スルといへば眞理をサトツタといふことであります。

第二に現に就て申しますと、過去に對する現在の義と、未來に對する現在の義とあります。過去に對する現在の義といふのは現前の事實——現はれ其のもの——を指し、未來に對する現在の義とは嘗て現在したる事實——過去をも含む——ものをいふのであります、換言すれば未現に對する已現の義であります。

偕、如上の現と證との各の二義を組合せて考へますと次の様な四種の義が出来るのであります。

- 一、現前せる證據——目前の利生
 - 二、現前せる證果——顯現せる生身の佛
 - 三、現在したる證據——利生の記錄
 - 四、現在したる證果——成佛の記錄過去の佛
- 過去證に對する現在證
未來證に對する現在證（過去證の義）
- 單に現證といふても以上の如き四種の義を含んで居るといふことを知らなければなりません。以下

日蓮大士の御文を引いて其の意義を詳述致しませう。

二、現前せる證據（目前の利生） 現前せる證據とは目前に現るゝ利生であります、宗祖大士の下山抄に云く、

余案ジテ云ク現證ニ付テ事ヲ切ラント思フ處、彼常ニ雨ヲ心ニ任セテ下ス由披露アリ。古ヘモ又雨ヲ以テ得失ヲアラハス例コレ多シ。云云。（二五六五頁）

我祖大士が常に道理を以て難じ、文證を引いて責め給ふたけれども、彼れ良觀房は「理窟はつけ様で」といふ様な顔をして、敗けても敗けない「恥しらす」であつた。それで何時か一度法華經の經力を以て律宗の教への下劣なることを事實を以て證據立て、二進も三進も出来ない様にしてやりたいと思召して時機を待つて御座つた。處が文永八年二月末つ方より日々晴天のみ續いて絶えて一滴の雨をも見ることが出来ぬ。三月も四月も五月も六月も徒らに過ぎて萬民益々大旱魃の苦み。執權北條時宗深く憂へて日頃歸依深き極樂寺の良觀房を召して祈雨の依頼があつた。これを早速御受けして六月の十七日其の儀式が行はれるといふことを宗祖大士御聽き遊ばされ、時こそ來れり、現證を以て彼を屈伏せしめんと直に使を遣はされた。

此ニ使ヲ極樂寺ニ遣ス。年來ノ御數キコレナリ。七日ガ間ニ若シ一雨モ下サバ御弟子トナリテ二百五十戒ヲ具サニ持タン上ニ、念佛無間地獄ト申ス事ヒガヨミナリケリト申スベシ。予ダニモ歸伏シ奉ラバ我弟子等ヲハジメテ日本國大體カタブキ候ナント云云。(一五六六頁)

と、何と大膽な事でありませう。宗祖大士は日頃「智者ニ我義ヲ破ラレズバ用ヒジ」といふ程の御方で道理の上、文證の義によつて立宗遊ばされ、又弘通宣傳されてあるのに、僅かの一現證で今迄の主義を捨て、念佛に従ひ、其上、念佛無間などといふたのは考へ違ひであつたと謝罪しようと思はれてある。而も對手にもよれ、一雨ヲ心ニ任セテ下ス(前出下山抄參照)てふ祈雨の名人を以て自ら任じて居るものに、それも一日片時の短時間ならぬ七日間、それも大雨にあらで一滴の雨にて邪正を決しようとは餘り大膽といはねばならぬ。若し偶然にでも一滴の雨が降らぬにも限らぬ、其時はどうなさると心配申し上げたい位であります。然し其心配は無用であります。天龍八部を我が眷屬とし給ふ本化上行の再誕である。一言の降らぬの宣言は同時に天龍八部に對する降らすの嚴命であつたのであります。大悟徹底の御一言、最高權威者の命令、如何に祈らうとも何の甲斐もないのが當然であります。

けれども先方ではナニ小理窟坊主が位にししか思ふて居ないのですから、よしそれならば大雨を降らせてお辭儀をさしてやらうと大に腕によりをかけて祈りに祈つた、賴基陳狀御書に、

良觀房悦ビ泣テ七日ノ内ニ雨ヲ下スベキ山ニテ弟子二百餘人頭ヨリ煙ヲ出シ聲ヲ天ニヒマカシ或ハ念佛或ハ請雨經、或ハ法華經、或ハ八齋戒ヲ説キテ種々ニ祈請ス。四五日マデ雨ノ氣無ケレバ魂ヲ失ヒテ多寶寺ノ弟子等數百人呼ビ集メテ力ヲ盡シテ祈リタルニ七日ノ内ニ露バカリモ雨降ラズ。其時日蓮聖人使ヲ遣ス事三度ニ及ブ乃至、持戒持律ノ良觀房ハ法華眞言ノ義理ヲ極メ慈悲第一ト聞ヘ給フ上人ノ數百人ノ衆徒ヲ率ヒテ七日ノ間ニイカニ雨ヲフラス給ハヌヤラン。是ヲ以テ思ヒ給ヘ、一丈ノ堀ヲ越ヘザル者二丈三丈ノ堀ヲ越ヘテナヤ。易キ雨ヲダニフラス給ハズ況ヤ難キ往生成佛ヲヤ。然ラバ今ヨリゾ日蓮ヲ怨ミ給フ邪見ヲバ是ヲ以テ翻ヘシ給ヘ。後生恐ロシクヲボン給ハバ約束ノマ、ニイソギ來リ給ヘ、雨フラス法ト佛ニナル道教ヘ奉ラン。乃至、良觀房ハ涙ヲ流ス弟子檀那ハ同ジク聲ヲオシマズ口惜シガル云云。(一六〇九頁)

同文例でありますが種々振舞抄には、

詮ズル所ハ六月十八日ヨリ七月四日マデ良觀房ガ雨ノ祈リシテ日蓮ニ(裏ヲ)カ、レテ降ラシカ

ネ、汗ヲ流シ涙ノミ下シテ、雨フラザリシ上逆風ヒマナクテアリシ事。三度迄使ヲツカハシテ、一丈ノ堀ヲ越ヘヌモノ十丈廿丈ノ堀ヲ越ユベキカ。和泉式部色好ノ身ニシテ八齋戒ニセイセル歌ヲヨミテ雨ヲフラシ、能因法師ガ破戒ノ身トシテ歌ヲヨミテ天雨ヲ下ラセシニ、イカニ二百五十戒ノ人々、百千人アツマリテ七日二七日セメサセ給フニ雨ノフラザル上ニ大風ハ吹キ候ゾ。コレヲ以テ存ゼサセ給ヘ各々ノ往生ハ叶フマジキゾ云云。(一三九一頁)

果せる哉露ばかりも雨はふらなかつたのであります。文中に各々の往生といはれたのは彼等が常に安養淨土に往生するといふて居る其の口を藉りて御責め遊ばしたのであります。日蓮聖人と御書き遊ばしたのは頼基殿の筆を代理せるが故であります。要するに雨の祈りは僅かな事であるが、この僅かなことすら成就せぬ法であるから未來成佛の大願はとともく及びもつかぬ事であると折伏遊ばしたのであります。結文の一行半は其の意味を充分に現はして御座るのであります。されば如何に現證利益を説くとも、この成佛の結縛を忘れたならば宗祖大士の御本意に反くものとなるのであります。これは又下山抄に、

今ノ祈雨ハ都テ一雨モ下ラザル上ニ、二七日日間前ヨリハルカニ超過セル大旱魃大惡風十二時ニ

止ム事ナシ。兩火房眞ノ人ナラバ忽ニ邪見ヲモヒルガヘシ跡ヲモ山林ニカクスベキニ其義ナクシテ面ヲ弟子檀那ニサラス上、剩ヘ讒言ヲ企テ日蓮ガ頸ヲ切ラセマイラセント申ス上、アツカル人ノ國マデ狀ヲ申シ下シ種ヲタタントスル大惡人ナリ。而ルニ無智ノ檀那等ハ特怙シテ現世ニハ國ヲ破リ後生ニハ無間地獄ニ墮チナン不便サヨ云云。(一五六七頁)

何處までも成佛の御教へであります。未來の成佛を忘失せる祈りは正しき祈りでないことが伺はれるのであります。

この雨の祈りに就て思ひ浮んだ事があります。それは毒鼓といふ雜誌の二月號に大阪の小平清五郎といふ人が「信ニ入レル我」なる題目の下の佛立講を非難せる一項であります。一寸抜書すると、長松清風師ノ逝去セラレタ河内ノ守口ヲ靈場トシ毎月十六日ニ一大參詣ガアル。電車ノ無イ時分デアツタカラ雨デモ降ルト大變故、毎月當番デ變ル々々晴天ノ御願ノ爲ニ守口ノ道場ヘ日參シテ祈念ヲ凝スノデアアル。若シ其月ノ十六日ガ晴天ナレバ其ノ當番ノ人々ノ信仰ハ確認セラル、ガ若シ雨降レバ其ノ當番ノ人々ノ信仰未熟ヲ裏書サレル事ニナツテ居ツタノデ當番ノ人々ハ皆競争で一生懸命ニ里カラノ處ヲ日參スルノデ随分豪イ意氣込デアツタ。百姓ガ早デ困ル様ナ時デモ田植時デモソ

ナ事ニハ頓着ナイ。唯ダ參詣者ノ僅カナ勞苦ヲ厭フ爲メニ無理ニ晴天ヲ佛天ニ祈願スルノデアツタ云云。

此の文章を讀み其の事實を考へて御覽なさい。私は寧ろ佛立講の信者の意氣込を感じこそすれ、決して輕蔑する心になれるものではありません。一病氣の爲めとならばまだであるが、兎に角天候をただ一念の信仰によつて左右せんとするの大膽さ、不敵さ、驚くより外はありません。か程の信仰があつてこそ未來墮獄の定業を轉じて成佛の大願を成就する事が出来るのであります。然し夫は狂愚だとしてもいふかもしれませんが、それならば今現證論に就て引證した宗祖の御事實はどうするかといはねばなりません。之れも亦狂愚といふべきか。又僅か一日の雨を止めることさへ——而もそれは早といふ程の場合でもないのに——それ程の憎悪が生ずるならば、宗祖大士が小半年以上も雨が無くして萬民大餓渴の苦しみを受けて居る時に、如何に御法の爲めとはいひ乍ら、雨祈りの妨げをするとは何たる罪深い事であると申さねばなりませんまい。

日蓮ニ(裏ヲ)カ、レテ降ラシカネ。(二三九一頁)

明らかに雨祈りの妨を遊ばされたのであります。これは御責めになりませんか。日蓮聖人程のお方

がそんなことで敵を責めずとも外に道があらう、卑怯なやり方だ、國難を喜ぶ不都合な僧だと、中平氏等側の人々は思ふとせねばならぬ。或はそれとこれとは比較にならぬと仰せられるか知れませぬが、道は一つです。宗祖大士もこれによりて小乗の教の下劣な事、一面に法華經の優秀なることを天下に公知せしめんと遊ばされたのであります。我が佛立講に於ても之によりて經力の勝れて貴くましますことを自他に知らしめ、一は發信の動機を與へ一は自他の信心を強めしめんより外はないのであります。それでなくて何のたゞ僅かな參者の勞苦を省かんが爲に毎日二里の長途を日參しようぞ。不可抗力と世間できまつて居る天候に就て經力佛力を試み自他の信念向上に資せんとする外全くないのであります。

此外、其の中平といふ人はさまざまの誹謗を述べられてありますが、取るに足らぬものであるのと本稿の目的に直接の關係が無い爲めに省略することゝします。

諸以上の事柄により、現證とは現前せる證據といふ意味であることが了解された事と信じます。されば當講は佛立主義である以上、佛陀に目をかけて、其の佛と等しくして異なる事無き身の上にならんとする事が眞の目的であります。而してこれを證據立てる爲めに、文證——釋迦世尊の悟りの御言葉

があるがそれでも猶信ぜぬものがあるから目前の利生——現前せる證據——を以てナール程と感心せしめる様にとの御意を以て現證利益は施されるのであります。發信入道の門として開かれてあるといふことを知らなければなりません。

三、現前せる證果（顯現せる生身の佛） 前項の現證は證據といふ意味で淺近なる事實を以て深遠なる成佛の可能を證據立んとするものであつたのであります。法蓮抄の但シ近キ現證ヲ引テ遠キ信ヲ取ルベシの御意でありました。此の項の現證は現前せる生身の佛體それ自身をいふので、又證を現はすと讀めば眼の前で成佛の覺體を現はす（後の龍女の即身成佛參照）意となります、當體義抄（九九三頁）に云く

問フ法華經ハ何ヲ以テ體ト爲ス耶。答フ諸法實相ヲ以テ體ト爲スト文。此ノ釋分明ナリ。又、現證ハ寶塔品の三身是レ現證ナリ。或ハ地涌ノ菩薩、龍女ノ即身成佛是也。地涌ノ菩薩ヲ現證ト爲ス事ハ經文ニ如蓮華在水ト云フ故ナリ菩薩ノ當體ト聞キタリ。

法華經の寶塔品にして釋迦牟尼佛（報身）多寶佛（法身）十方分身の諸佛（應身）みな悉く靈山會上に集り給ひ一佛として世界に残り給ふ方が無かつた。根本の佛、境智の二尊既に顯れ給へば分身

校末の諸佛、従はざるなきの道理であります。此の所有の佛、法報應三身如來これを指して實體たる諸法實相を現實に證得されたる覺體なり、即ち現證なりと仰せになつたのであります。詳言すれば、宇宙萬有の實體たる實相眞如の妙理は智者の心眼、念慮の伺ふ所であつて肉眼の見得べきものではありません。否、宗祖大士は本地難思ノ境智ノ妙法ハ迹佛等ノ思慮ニ及バズとさへ仰せになつてあります。なか／＼實體は知得すること能はざる所のものであります。然るに久遠本時に於て釋迦牟尼佛本因妙の修行を遊ばしたとき、此の難思の境智の妙法、即ち諸法の實體をお悟り遊ばされました。既にお悟り遊ばすとそれが成佛であります。佛とお成りなされたのであります。佛とは眼に拜むことの出來るお方であり、其の肉眼にも拜むことの出來る佛體、その悟が證であつて、それが眼に見ゆるのが現であります。生身の佛體を現證と云ふ意味は如上の次第であります。表によりて示せば左の如し。

冥在せる眞如の理體——諸法實相——體——法
現示せる證果の佛身——三身——現證——人

次に地涌の菩薩を現證とする義は、靈山會上の目前に地より現出せる尊形であるからであります。

地涌の居士は菩薩であるから證とはいへないといふ人があるかも知れませんが、證は必ずしも佛でなくとも菩薩にも許すことのある語であります。天台大師が六即といふ修行の位を立てられた時、始めが理即、次に名字即、三、觀行即、四、相似即、五、分證即、六、究竟即とせられました。第五の分證即といふのは菩薩の位をいふので佛は最後の究竟即であります。一分のさとりを開くのが菩薩でありますから菩薩の事を分證と名けたのであります。かゝる次第で菩薩にも證といふ字が用ゐられるのであります。更に進んで申しますれば釋尊の果位の佛に對して本化上行等の菩薩は因位の佛であります。釋尊は從因至果の姿を示せる佛陀で上行大士は從果向因の次第を示せる佛陀であります。釋尊は不老を顯し上行は不死を現すといふ約束もあります。不老不死の覺體が眞の成佛でありますから、釋尊上行大士は其の覺體の兩面といつてもよいのであります。然り因果具足の妙法本佛の因的尊形と果的尊形であります。されば一佛二名と申し奉るのであります。天台大師は上行菩薩の因位の壽命を常壽と釋し、開基日隆聖人は上行大士の御壽は釋尊よりも長しと仰せになつてあります。此の因形の佛、一佛二名、從果向因の上行大士は、其の御姿を其儘人界に現はし遊ばして日蓮大菩薩と御成り遊ばされました。人間の姿乍らそれが佛の尊容であります。これを一佛二名、

從果向因、上行體具、人界示同の尊形、日蓮大士と稱し奉るのであります。此の宗祖日蓮大士の尊容こそ、末法我等が熱望願求する所の即身成佛の現證であります。生ける末法の佛陀であります。日隆聖人は「六即私記」の中に日像門流の秘傳として、世間の成佛は即意成佛、當流の成佛は即身成佛。信——意業の信者——は即意の成佛。口唱折伏——身口業の信者——は即身成佛なりと判ぜられ、土籠御書の「色心二法トモニ遊バシタル」法華色讀を讚歎し、最後に我が高祖日蓮大士こそ即ち其の三業相應即身成佛の手本であると示されてあります。我等其の御弟子檀那の一分に與るもの、病氣平癒てふ發信門の現證——部分的現證——によりて必ず目的の殿堂百味の飲食を盛れる成佛の現證——身心總てを妙化する全體的現證——に到らねばなりません。手段的現證たる病氣平癒のみに滯留して遂に目的現證たる現前せる證果、折伏修行、死身弘法の即身成佛に到らなかつたならば宗祖大士が大聲叱呼された、日蓮先驅ケンタリ若黨ドモ二陣三陣續イテ迦葉阿難ニモ勝レ、天台傳教ニモコエヨカシ、僅カノ小島ノ主等ガヲドサンヲチテハ閻魔王ノ責ヲ如何スベキ、の御命令に服従せぬものとして當然軍律に照されて、罪を無間に開かねばなりません。如何に口には、

「マコトニ果報ヲ論ズレバ、龍樹、天親、迦葉、阿難ニモ勝タリ。」

と唱へた所で、迦葉・阿難にも勝れ、天台傳教にもこゆるだけの修行、即ち宗祖大士の御跡を慕ひ奉りて折伏逆化の弘經を致さなかつたならば「本化上行の流類、讀持此經、是真佛子」になれないのでありますから、淨土參拜は危いものであります。どうか「願クハ生々世々菩薩ノ道ヲ行ジ無邊ノ衆生ヲ度シテ永ク退轉ナカランコトヲ念フモノ也」の御信者となり、當講弘宣の眞目的なる大現證を體得せられんことを願ふものであります。

猶、如蓮花在水とは法華經第五の卷從地涌出品に本化上行菩薩の尊容をたゞへ給ふた御文で、此ノ諸ノ佛子等ハ其數量ルベカラズ。久シク佛道ヲ行ジテ神通智力ニ住セリ。善ク菩薩ノ道ヲ學シテ世間ノ法ニ染マザルコト蓮華ノ水ニ在ルガ如シ。

と、文の中に世間の法とありますが、これは五濁熾盛なる娑婆の惡習を指すのであります。本化上行菩薩は汚泥の如き惡水にひとしい娑婆の惡風に染められない、俗にいふ泥中の蓮であります。不識の間に世間の惡風に染められたり、或は惡習と知り乍らも、世間がうるさいから、憎まれては困るからといふてそれに従ふて行くなどはよくあることであります。此等は青菜の湯に於けるが如しとでも申すべきであります。

扱この當體義抄には蓮華に譬喩の蓮花と當體の蓮花と二通りあることを述べられて、泥中に咲く清淨の白蓮華は譬なる故に譬喩の蓮華と申し、其の譬ふべき目的の成佛の方を當體の蓮華と釋せられました。即ち地涌の大士は正に當體の蓮華であるといふ現證として、其の大士を形容せるこの如蓮華在水の經文を御引き遊ばしたのであります。

三に龍女の即身成佛は一層明に現證の義を平易に示すものであります。それは提婆品の説相を述べれば自ら知り得ることが出来ます。

智積菩薩、文殊師利菩薩ニ問ハク、此ノ經ハ甚深微妙デアアルガ此經ヲ修行シテ速ニ成佛シタモノガ龍宮ニアリマスカ。
 文殊ノ云ク、有リ、娑竭羅龍王ノ女、年僅カニ八歳、智慧利根、刹那ノ間ニ成佛セリ。智積ノ言ク、我レ釋迦佛ヲ見奉ルニ無量劫ノ間修行シテ後、成佛サレタ、我ハ其ノ龍女ノ須臾ノ間ニ成佛セシコトヲ信ズル能ハズト。其ノ言未ダ終ラヌ内ニ龍女ハ忽然トシテ佛前ニ現レ佛ヲ禮シ而シテ一面ニ坐セリ。其ヲ見ルナリ舍利弗、龍女ニ言ハク、汝、久シカラズシテ成佛セリト思ヘリ、是レ信難シ其ノ所由ハ女ニハ五ノ障アリ何ゾ速ニ成佛スルコトヲ得ンヤ。

龍女其時、無言ニシテ一ノ寶珠ヲ佛ニ奉ル。佛速ニ御受取遊バサル。龍女、智積及ビ舍利弗ニ向テ言ハク我が成佛ヲ見ヨ、佛ノ寶珠ヲ收メ下フヨリモ猶ホ速カナルベシト。其ノ時ノ大衆ハ皆此ノ龍女ガ忽然ノ間ニ南方無垢世界ニ於テ三十二相ノ佛トナリ衆生ノ爲ニ妙法ヲ演説スルヲ見テ默然トシテ信受シタ。(以上取意)

靈山會上、大衆環視の其の中で忽然として成佛されたのは實に現前せる證果であります。是れ即ち證を現はせるものであります。第二の現證義であります。

四、現在したる證據(御利生の記錄)

法華經の經力の現れます姿は第一の現前せる證據——現世の願ひ成就——と第二の現前せる證果——成佛との二つで總てを盡して居ります。所謂法華經樂草喻品の「現世安穩、後生善處」の二大利益であります。以下説かんとする第三、第四の兩項はただ現證といふ文字の用ひられた多少異なる場合を示すに過ぎません。

偕、現在したる證據といふことは、此の法華經が娑婆世界に於て種々なる機會に接觸せし毎に機感冥應して現はせる妙法經力の記錄を指すものでいはゞ昨日發つた現證利益も、今日から見ますれば一つの現證の記錄となるのであります。よしそれが何かの文書や口碑に傳へられてゐなくても立派な記

録であることを失はないのであります。凡夫の眼に映せずとも經力が宇宙に印したる深刻なる靈跡は確乎として萬代の後までも生きて居るのであります。されば何時でも其の記錄を引き出して法華經の經力の微妙なることを證據立てることが出来るのであります。

其の一例は本尊問答抄に曰く、

然ラバ則チ罰ヲ以テ利生ヲ思フニ法華經ニ過ギタル佛ニナル大道ハナカルベキナリ。現世ノ祈禱ハ兵衛ノ佐殿、法華經ヲ讀誦スル現證ナリ。(一八〇七頁)

兵衛ノ佐とは頼朝公のことを指されたのでありますから、宗祖の御時から見れば九十何年といふ過去の事、そのむかし頼朝公は法華經を信仰し熱心に讀誦せられた其の利益によりて平家を滅すことが出来たのであると仰せになつた御文であります。頼朝公が法華經を讀誦せられたといふことは南條殿御返事にも、

大將殿(頼朝ヲサス)仰セアリケルハ、法華經ノ御事ハ昔ヨリサル御事トハキ、傳ヘタレドモ、丸ハ身ニ當リテ二ツノ故アリ。一ニハ故親父(義朝)ノ御クビヲ太政入道(清盛)ニ切ラレテアサマシトモイフ斗リナカリシニ、イカナル神佛ニカ中スベキト思ヒシニ、走湯山ノ妙法尼ヨリ法華經ヲヨミ

ツタへ千部ト申セシ時、高雄ノ文覺房親ノクビヲモチ來テ見セタリシ上、敵ヲ打ツノミナラズ日本國ノ武士ノ大將ヲ給ヒテアリ。コレヒトヘニ法華經ノ御利生ナリ。二ツニハコノ稚兒ガ親ヲ助ケヌル事不思議ナリ。大橋ノ太郎トイフヤツハ頼朝奇怪ナリト思フ。假令ヒ勅宣ナリトモカヘシ申シテ、クビヲ切りテ。アマリノ憎サニコソ十二年マデ土ノ牢ニハ入レテアリツルニカ、ル不思議アリ。サレバ法華經ト申スコトハアリガタキ事ナリ云云。(一四三八頁)

頼朝公が法華經を千部讀誦成就の日、文覺房が親の頸を持つて來て親子の最後の對面をさしてくれ、これ法華讀誦の御利益。又平家を滅して敵をとり武家の統領 總追捕使となつたも亦法華讀誦の現證。三に大橋太郎が謀叛の罪によりて十二年が間、土牢に籠められやがて斷頭の座に到りしとき、其遺兒が鎌倉の八幡宮で強盛に法華經を讀誦したので遂にゆるさねばならぬ様になつた。たとへ勅宣なりとも許すべき奴でないが、自からなる妙の御力には頼朝も抵抗することが出來ぬとて赦免された。この事偏に法華經の經力いみじき現の證據なり。此の經力によりて未來成佛の信を發すべしと勸信せられたのであります。

又唐の祥公が集めたる法華傳記の中に遺龍、烏龍の法華經書寫の功德の事を法蓮抄(一一六一頁)に

御引き遊ばされてあります。その他、遠く溯れば法華經に現はれ給へる藥王菩薩の燒臂還復の事などありますが、これは又後に「法華經と現證」の題下に述べることにしますから、茲には略すことゝします。

五、現在したる證果(成佛の記録・過去の佛) 前述の記録と云ふ義を更に深く進めますと成

佛の記録といふ義に到ります。撰時抄に

文證、現證アル法華經ノ即身成佛ヲバナキニシテ、文證モ現證モアトカタナキ、眞言ノ經ニ即身成佛ヲ立テ候。(一一〇九頁)

法華經には成佛の道理を第一に説き、第二に其の成佛せる過去の記録(現證)を擧げ、第三に法華經を信するものは必ず成佛するといふ證言(文證)が擧げられてあります。方便品の諸法實相、四佛知見は第一で多寶塔の涌現、本化上行等の菩薩の涌出、久遠五百塵數の古佛の現はれ、及び提婆品の二箇の諫曉、不輕品の不輕菩薩の御事は第二で、神力品の付屬の文、殊には「我が滅度ノ後ニ於テ此ノ經ヲ受持スベシ、是ノ人佛道ニ於テ決定シテ疑ヒアルコトナシ」は第三であります。かく用意周到に説き顯せる成佛の教は他に全く比類のなき永異諸經の妙經であります。今擧げたる撰時抄の

御文中「現證アル法華經ノ即身成佛」とは第二の過去の成佛の記録を御擧げ遊ばしたのであります。過去の記録と申しますと大變力弱いものゝ様に思はれる方があるかも知れませんが、宗祖大士は此の即身成佛の記録——現證を大變重要視遊ばされ、

イカニ人申ストモ即身成佛ノ人ナクバ川ユベカラズ。乃至。大日經、金剛頂經等ノ眞言經ニハ其人ナシ云云。(一九六七頁)

と力説遊ばされてあります、どんなに立派な御教でも過去の記録が無ければ畢竟これ理論、構想といふに止まり、實際宇宙の眞相に觸れたものでない。いはゞ手ごしらへの理窟で、何等の權威もなきものであるであります。彼の鶏の生める卵は極めて簡單なる出来であるからとて、もし人が人工的に如何に是を模倣して造つて見ても遠く及ぶことが出来ません。彼は簡單でも其の中に生命を宿し此は如何に巧妙でも生命が下つてこない。其の間は實に天地の差よりも猶甚しといはねばなりません。それと同様に、弘法大師が法華經の醍醐一實の妙味を大日經に盗込んで置いて、そして口を拭ふて、「震旦ノ人師争フテ醍醐ヲ盗ム」など他人の事かなぞの様に空ろをふいて自家の教理を眞實めかして居つても、悲しいかな盗んだものであるから道具立が揃はない。所謂の道理と文證とはどうにかこ

じつけても肝心要の成佛の記録がない。大日經で即身成佛したといふ現證がない。これでは生命は宿らぬ。イヤある大日如來がそれだといふかもしれぬが、大日如來は理法身で、壽量品の佛の如く、我本菩薩ノ道ヲ行ジテ成セシ所ノ壽命といふものがない。とても凡夫の手本とはならぬ。即ち即身成佛の記録とはならぬのでありますから遂に宗祖大士に「其人ナシ」と尻を割られる様になつたのであります。さて、此成佛の記録といふのは言ひ換へれば現在したる證果——過去の佛——に外ならぬのであります。而して過去の成佛を過去と押へて而も現證といはれた文例は、波木井三郎殿御返事に、佛、不輕品ニ自身ノ過去ノ現證ヲ引テ云ク、爾時ニ一リノ菩薩アリ常不輕ト名ク云云。(九八二頁) 釋迦佛が不輕菩薩として杖木瓦石を蒙り、罪障消滅して六根清淨の位に叶ひ遂に成佛されたといふ過去に發つた事柄——證果——嚴密に云へば過去證を指して過去の現證と仰せになつたのは現在せし證果の意味を示せる一文例であります。

上來述べ來りし四種の現證中、當講に於て専ら用ひられて居るものは第一の現證、即ち現前せる證

據——目前の利生——現世安穩であります。然し乍ら更に一步を進めて深思熟考、紙背に徹底する——所謂の文底秘沈の義を探らば、第二の現在せる證果——生身の佛——即身成佛といふ義が當講の現證論の根柢となつて居ることを發見するのであります。以下筆を新にして再び、更に三度論することに致します。

第三 法華經と現證

一、現證經 法華經は現證經であります。現證を以て一大眞理を顯はしたお經であります。換言すれば從來の諸經の如く抽象的に教法を垂れたと異り具體的に一大眞理を顯示したのであります。一度び經を開けば現證の多きに驚き、再び細けば現證の外何等教説らしきものなきに怪しみ、三度拜するに到つて其處に幽玄微妙の深意あるを發見し隨喜の涙がそゝがれるのであります。實に宗祖大士が、法華經ハマサシキコトハ僅ナリホムル言葉ゾ多ク候と仰せられたるも此の邊の消息を語られたものであります。又法華經より以外の御經には大の字を冠せるものが多いが妙の字を以て始めた御經は無いと仰せられたのも同義であります。道理と云ふ方面からまともに説いた時に大の義となりまされし

き説となるのであります。二代五時の教説中に、第一華嚴時、これは大方廣佛華嚴經といふ、時間論(緣起論——縦の説)的教説としては佛敎中の白眉、第二阿含時は小乘教、第三の方等時大乘の初門大の字はふさはしくない。第四の般若時、摩訶般若といふ即ち大般若經六百卷など空間論(實相論——横の説)的教説としては一切經中其右に出るものなしとさへいはれてあります。第五の法華時と同時にされてゐる最後説の涅槃經、これも摩訶般涅槃經——摩訶とは大と翻す——即ち大涅槃經——であります。かく時間空間の兩廣舌に對しても如來一代の説教五十年の始中終に於ても何れも大の字を以て呼ばれてあります。獨り法華經のみ妙法蓮華經と妙の字を以てせられてあるは如來の施設の用意がなくてはならのであります。即ち如上の大廣説を取りて一丸とし如來出世の一大本懷を完成せられたのが法華經でありますからそれらと區別せんが爲に妙の字が附せられてあるのであります。如何に區別するか、彼には大義圓滿の説なりと雖も完成でない純一無雜でない。而してこの理論的方面を満足する様純一無雜的に統一完成されたのは法華經中前十四品の迹門であります、十如實相論であります。二乗作佛であります。更らに此の十如實相、二乗成佛の教理に對して畫龍點睛的に生命を與へ、妙義を光り輝く様されたのは後十四品の本門就中、壽量品の久遠實成の法門であります。こ

の最後の妙理たる本門久遠實成といふが法華經の生命である所の義であります。これが所謂現證なのであります。否、迹門所説の十如實相も矢張り二乗成佛と云ふ現證を以て説顯はして居ると申さねばなりません。

然るに世間無智の學者等、この現證經たる法華經を見て何等幽玄微妙なる法門を説かずとなし、法華經の説を以て第二第三とするものが多い。判り易い所で、高橋五郎氏の著「日蓮論」に

法華經ハ——平田篤胤が評定セシ通り——功能書ノミ夥シクシテ肝心ノ藥紛失シタルガ如キ觀アルモノナリ。從來ノ研學者コレヲ遺憾トス。華嚴般若等ノ類ハ却ツテ深遠ナル哲理ヲ説キテ甚ダ敬重スベキ點多キ者ナルハ亦是レ江湖ニ知レワタレル事實ナルニ非ズヤ。之ヲ要スルニ日蓮ハ其ノ効能書ノ立派ナルニ目眩ミテ竟ニ法華妙法テフ藥ノ紛失レアルニ心ヅカザリシ也。云云。

釋迦世尊、道場所得の一大秘法は釋迦世尊の親から身證を以て説示し給ふ所の大事實であつて、其處には言論は末節となる。世の所謂る探りを入れる様な推測的な哲學などと譯がちがふのであります。妙樂大師は但ダ遠本ヲ點ズレバ遠妙自ラ彰ルと贊せられた如く、本佛の本因本果てふ大事實の顯示はそれが究竟の哲理であつて其處に自然と遠妙が彰はれるのであります。眼光紙背に徹するの

にして始めてこれが判る。平田等の如き國漢のなまかちり輩でどうして其の深意を伺ふことが出来るものか、況や高橋等に於てをやであります。迹門所説の二乗作佛が何位の價値を示したのかそんなことは釋尊一代の説法を味はなくては知ることの出来ないものであります。一代諸經を口傳する時「爲ニ鹿苑證果聲聞」と七字を以てせられてある位のものであるが、聲聞——即ち二乗が一代佛敎の中軸をなして居る事に眼が止まれば、法華經の二乗成佛は其の究極地なることは自ら知られるのであります。これがわからぬでこれさへ窺ひ得ずしてどうして本門の法門久遠實成がわかりませう。二乗成佛の佛の本地を示したものが本門であるのです。本門顯れざれば二乗作佛も定まらず根無し草の波に漂へる如きものであると宗祖大士は示されてあります。二乗が成佛した劫國名號が授けられた。そしてどんな佛になるのです。佛の正眞の姿——根本の佛身を知らずして、名稱だけで何の甲斐がありませんか、佛作つて魂入れずとはこの事でありませう。そこで本門の久遠實成が顯はれねばならぬのであります。この久遠實成の姿は説明や文章でわかるものではない。大事實の顯示なくしてはどうしても出来ないであります。即ち現證を以て其の最極の法門を説顯し二乗等に最後の保證を示し大安心を與へたのであります。まこと法華經より現證の事實をばづしたならば法華經は正に平田輩の

ふ如きものとなり終るでせう。

あゝ法華經中の現證、これを一言にすれば妙である。あゝ妙、妙、妙、不可思議、この妙不可思議といふ言葉は正しき哲學的の言葉ではない、讚歎の辭であります。宗祖大士の所謂——ホムル言葉ゾ多ク候へ——であります。以下經中所説の現證を列擧して、如何に法華經と現證とが重大なる關係を有するかを述べて見ませう。然しホンの一部分です。貧弱なる私の筆は貧弱なる私の腦の領解丈すら述べ得ないのであります。どうかその積りで讀んで頂きたい。

二、現證の原則（如來神力品）

法華經に於ける現證を述べるに付て先づ其の現證——證を現はす——の原則を説き次に品々に亘りたいと思ひます。

抑々現證とは、佛の有する不思議自在の神通力が示す所の偉大なる事實をいふのであります。而して佛が其の神通力を起さねばならぬ所以のものを指して茲に現證の原則と名けたのであります。即ち神通を以て衆生に佛の崇敬し信頼し得べき御方なるを知らしめ、説法の目的の徹底を計らんとする思召に外ならぬのであります。されば天台大師は玄義一に

此ノ法ヲ説カンと欲スルニ先ヅ神通ヲ以テ駭動ス故ニ一切自在神力ト云フ。既ニ變通ヲ見テ醒悟シ

渴仰ス。教ヲ説クコトヲ爲スヲ得ルナリ。

これは第七卷如來神力品の四句の要法たる如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切秘要之藏、如來一切甚深之事、に依つたものであります。而して天台は此の四句の順序を約説の次第といふてあります、即ち説法の順序といふことであります。先づ説かんとする題名を擧げ、次に神通力用を示し、三に其の名の示す所の本體を説き、四に其の因果を明かすといふのであります。實體の如何を説く前に其の實體の有する價値を衆生に示して信頼させて置いてそれから扱こんなものぢやと其の姿を顯示する。一例を以ていへば茲に一冊の書物がある。是を他人に賣付けようとする場合、新聞雜誌等で廣告をする、『法華經の實義』といふ書物であるが、と第一に名を示し、是は何、某の大僧正の題字があるとか、又は何々博士の推賛を得たものであるとか、と世間の人が其の内容の價値あることを信用する様にさまざまの肩書を出す。勿論著者が勝れた人であれば、これは當代第一の何々博士空前の快著だといふ風に充分信頼させて置く。この題字とか序文とかを書く人又は著者の如何によりて賣行きが大幅に上がるのであります。されば著者は筋をたどつて名士の序文をたのむことが第一の苦心とされてあります。又自分の名を秘して名士の名前で大に賣らんとするものも澤山あります。實際どんな

によいものでも無名の士の著作には一瞥をも與へぬ世の中ですから、どうしてもかういふ風になるのは自然の理であります。儲信用を得れば買手がつく、買つて讀んで見ても肩書がよいと安心して其の所説を信賴する、従つて其の意味をよく諒解するに至るのであります。教主釋尊は常にこの筆法で實體を説く前に先づ神通を示して彼れ衆生をして充分信賴心を起さしめられるのであります。法華經を説かれるに就てもそれく神通を示された。迹門には此の土の六瑞、彼の土の六瑞。本門には又これに比すべくもない大瑞たる寶塔の涌現、本化の菩薩の涌出があります。宗祖大士の瑞相御書に曰く

夫レ天變ハ衆人ヲアドロカシ地天ハ諸人ヲ動カス。佛、法華經ヲ説カントシ給フ時、五瑞六瑞ヲ現ジ給フ。サレバ天台大師ノ曰ク、世人ヲモヘラク蜘蛛掛レバ即チ喜ビ來リ鴉鵲鳴ケバ即チ行人至ルト。小事スラ尙ホ微アリ大焉ソノ瑞ナカラシ。近ヲ以テ遠キヲ表ス等云云。夫レ一代四十餘年方間ナカリシ大瑞ヲ現ジテ法華經迹門ヲ説カセ給ヒヌ。其ノ上本門ト申スハ又爾前ノ經々ノ瑞ニ迹門ヲ對スルヨリモ大ナル大瑞ナリ。大寶塔ノ地ヨリヲドリ出デシ地涌千界大地ヨリナラビ出デシ。云云。(一三三八頁)

末法の今日お互が他人を教化するとき、まあ私にだまされたと思ふて信心して御覽なさいとて其の法華經の如何なるものなるか、佛立主義の内容説明などを指置て、先づ現證を拜ませるは全くこの如來の説法の次第に依つたものであります。既に現證を拜して隨喜身に餘る、講席に座して法話を聽聞するに、昔日あざけりを以て對せるものが信順喜悅を面にあらはして仰ぐに至る。諸人の等しく經驗する所であります。全く佛立開導上人の施設する所、佛意の機微に徹すると思はずには居られません。

三、一代超過の大瑞(序品) 序品、序は緒なり、いとぐちなり。釋尊出世の一大事たる法華經を説かんとするいとぐちを起し來る處の場面でありますから、爾前の經々の序品とは大に異なる所がなくてはならぬのは申す迄もないことであります。其の場面の有様をかいつまんで申しますれば、六瑞として六つの不思議なことがあるのであります。六つとは(一)説法瑞——大乘教の無量義、教菩薩法、佛所護念と名くるを説く。(二)入定瑞——無量義處三昧に入る。(三)雨華瑞——四種の天華、雨の如く降る。(四)地動瑞——普く一切の世界六種(動、起、踊、震、吼、擊)に動く。(五)心喜瑞——一切の聽衆、未曾有なりと喜ぶ。(六)放光瑞——佛白毫相を放ちて東の方萬八千の世界を照すといふのであります。已上は此の娑婆世界の出來事ではありますが、最後の放光瑞から生れてくる東の方

萬八千の世界に於て又六通りの瑞が見ゆるのであります。その六つとは(一)見六趣瑞——彼の世界の
 上は天界より下地獄界に至る迄六道の出来事明かに見ゆ。(二)見諸佛瑞——彼の土の佛の御有様見
 ゆ。(三)聞佛說法瑞——彼の世界の佛の說法を此の世界にて聽聞することを得。(四)四衆得道瑞——
 比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等の佛弟子の修行の狀態見ゆ。(五)見菩薩所行瑞——彼の土の多くの
 菩薩達の救濟を行じ給ふ所見ゆ。(六)見佛涅槃瑞——彼の土の佛の入滅し給ふ光影手に取る如く拜見
 せらる等をいふのであります。已上の彼の土の六瑞は恰も巧妙なる活動寫眞を見る如くであつたらう
 と思はれます。斯の如き彼我の六瑞相は嘗て四十餘年の間無かつた所のものであります。尤も放光と
 か雨花とか六種動地とかいふものは無いことも無いではありませんが、これ程の大瑞は其の質に於て
 も其の量に於ても決して無かつたのであります。宗祖大士は、
 妙樂云ク何レノ大乘經ニカ集衆、放光、雨花、動地アラザラン。但シ大疑ヲ生ズルコト無シ等云
 云。此ノ釋ノ心ハイカナル經々ニモ序ハ候ヘドモ、此レホド大ナルハナシトナリ。(一三三九頁)
 と仰せ遊ばされ、又法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞也とも讃歎されてあります。従て一切大會
 の衆皆未曾有なりと喜び且つ如何なる大事を説き給ふかと驚いたのであります。彌勒菩薩、衆に代り

て文殊菩薩に尋ねられた時、文殊支利の答の中に

諸ノ善男子、我レ過去ノ諸佛ニ於テ會テ此ノ瑞ヲ見タテマツリシニ、斯ノ光ヲ放チ已リテ即チ大
 法ヲ説キ給ヒキ。是ノ故ニ當ニ知ルベシ。今ノ佛ノ光リヲ現ジ給フモ亦復是ノ如ク衆生ヲシテ咸
 ク一切世間難信ノ法ヲ聞知スルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ斯ノ瑞ヲ現ジ給フナラン。(序品)
 又曰く、

我燈明佛(ノ時ノ有様)ヲ見奉リシニ本ノ光瑞斯ノ如シ。是ヲ以テ知リヌ。今ノ佛モ法華經ヲ説カ
 ント欲スルナラン。乃至今ノ佛ノ光明ヲ放チ給フモ實相ノ義ヲ助發セントナス云云。(序品)

一切世間の人々がとても信じ難い處の實相究竟の妙理を助發し説示せんとするが故に、一切衆生に
 大信力を起さしめんとしてかゝる一代超過の大奇瑞、大離れ業を演出されたのであること、經の文に
 明らかに見ゆる通りであります。現證とは發信の門であるとして「現證の眞意義」中に屢々述べたる如く、
 信仰の序、いとぐちを開くのが現證の御利益であります。若し現證を樂んでこれ以外に出ることを知
 らずして一生茲に停滯して居りましたならば、此の靈鷲山の會衆はいつまでもパノラマの如き展開せ
 る此土の六瑞、活動大寫眞の如き彼の土の六瑞のみを見物して居つて、遂に肝心の妙法蓮華經を聽聞

しなかつた様なものであります、諸君、現證は入信の葉でありますぞ。更に一步を進めて釋尊出世の大目的たる妙法華經の所詮たる成佛の大事に至らねばなりません。

四、寶塔の涌現(見寶塔品)

迹門の法門——十如實相——二乗成佛の序分としては六瑞の先

證があつて其の眞實を證據立られました、本門の法門——久遠實成大釋迦牟尼尊の出現の序幕として、之を證據立んとするものは見寶塔品の所説、多寶塔の涌現であります。宗祖大士曰く、

今此ノ御本尊ハ教主釋尊五百塵點劫ヨリ心中ニヲサメサセ給ヒテ世ニ出現セサセ給ヒテ四十餘年、其後又法華經ノ中ニモ、迹門ハセスギテ寶塔品ヨリ事起リ、壽量品ニ説キ顯ハシ神力品囑累品ニ事極リテ候云々。(二〇九一頁)

壽量品の法門の事の起りは寶塔品であるといふのは、即ち寶塔品が本門の序分であるといふことであります。

然るに此の品は迹門の第十一品にあるので、明らかに本門と申す譯に行きませんから密序と申してあります。又本門の序分である涌出品と對稱して涌出品を近序といひ寶塔品を遠序とも申します。猶前回到引證しました瑞相御書(一三三九頁)にも、

其ノ上本門ト申スハ又爾前ノ經々ノ前ニ迹門ヲ對スルヨリモ大ナル大瑞ナリ。大寶塔ノ地ヨリヲドリ出デシ地涌千界大地ヨリナラビ出デシ。

とあります。これは遠近の二序を御擧げ遊ばした一例であります。

偕、遠序たる寶塔品は何事を密表するかといふに、これには二箇の義があると御指南になつてあります。一は證前、二は起後であります。阿佛房御書に云く、

御文ニ云ク多寶如來涌現ノ寶塔何事ヲ表シ給ト云云、此法門ユ、シキ大事ナリ。寶塔ヲコトワルニ天台大師文句ノ八ニ釋シ給ヒシ時、證前起後ノ二重ノ寶塔アリ。證前ハ迹門起後ハ本門ナリ。(八二五頁)

迹門八品の間に二乗成佛の劫、國、名號の授記が行はれ正宗分が終りを告げて、法師品の流通分が起つた。其の時佛前の大地震裂して地中より大七寶莊嚴の妙なる塔が出現しました。而も其の中から大音聲を放つて曰く、

善哉ヨキカナ、釋迦牟尼世尊ノ説ノ如キハ皆是レ眞實ナリ。(見寶塔品)

靈山一會の大衆は皆一齊に驚きの眼を以て此奇怪にして立派なる寶塔を見上げました。高さ五百由

句、縱廣二百五十由旬の而も金、銀、瑠璃等の七寶を以て飾られてあります。大樂説菩薩は衆疑を代表して此の寶塔は何んの因縁を以て出現されたのでありますかと御尋ね申上げると、佛は此の塔は、東方の寶淨世界の教主多寶如來の安坐ましますものである。此の佛は其の菩薩道を行する時の別願に、如何なる所にもあれ法華經を説く所あらば、其處に出現して法華經の眞實なることを證據立たしと誓はれた。それで今こゝに來至して我が所説の二乗成佛の大義を證せられるのであると、御説きになつたのであります。

抑二乗成佛といふことは、佛一代の眼目ともいふべき程の大事な法門であります。これが永らくの間——四十餘年——秘め置かれて、二乗は永く佛に成るべからずと禁められてあつたのであります。それを法華經に來りて掌を返すが如く、二乗皆成佛すべしと御許しになつたのでありますから、一切の聽衆皆前後の相違に驚異の心を生じて、たやすく信を取らなかつたのであります。宗祖大士此の狀景を叙して曰く、

十方無邊ノ世界ノ一切衆生一人モ無ク迦葉舍利弗等ハ永不成佛ノ者、供養シテハ惡シカリヌベシト知リヌ。而ルニ後八年ノ法華經ニ忽チ悔ヒカヘシテ二乗作佛スベシト、佛陀トカセ給ハンニ人天大

會信仰ヲナスベシヤ。用ユベカラザル上、先後ノ經々ニ疑網ヲナシ、五十餘年ノ説教皆虛妄ノ説トナリナン。乃至、教主釋尊ノ御語ステニ二言ニナリヌ、自語相違ト申スハコレナリ。外道ガ佛陀ハ大妄語ノ者ト笑ヒシコトコレナリ。人天大會興サメテアリシ程ニ、其ノ時ニ東方寶淨世界ノ多寶如來、高サ五百由旬、廣サ二百五十由旬ノ大七寶塔ニ乗ジテ、教主釋尊ノ人天大會ニ自語相違ヲセメラレテ、トノベカウ述べサマシニ宣ベサセ給ヒシカドモ、不審猶晴ルベシトモ見エズ、モテアツカヒテ御座セシ時、佛前ニ大地ヨリ涌現シテ虚空に昇リ給フ。例ヘバ闇夜ニ滿月ノ東山ヨリ出ルガ如シ。七寶ノ塔大虚ニカ、ラセ給ヒテ大地ニモ付カセ給ハズ、天中ニ懸テ寶塔ノ中ヨリ梵音聲ヲ出シテ證明シテ云ク、云云。(七五九頁)

以上は所謂證前であります。二乗不成佛と禁しめてあるものを、二乗成佛と説き改めたので、聽衆は皆疑を生じた。それを多寶佛が證言を出して靈山の闇雲を一掃した。即ち寶塔涌現以前の分を證明したのでありますからこれを證前と申すのであります。

俗、多寶如來の證明で一段落付いたと見えますけれども、決して疑雲はスツかり拭はれて居りません。何となく奥齒に物がはさまつた様な具合であります。其處で釋迦牟尼佛は證明を徹底させる爲に、

更に大仕掛に三變土田といふ大舞臺をせり出したのであります。

三變土田とは三たび土田を變ずると讀みます。土田とは娑婆世界を指すので、弊惡の地を意味します。御經によれば菩薩達が多寶塔を開いて如來の尊形に接せんことを請はれた。釋迦世尊は此の佛の誓願によつて寶塔を開かんとする時、先づ十方分身の佛を集めなければならぬのであります。而して十方分身の諸佛を一處に集むるに就ては穢れたる娑婆世界の山河の凸凹及び地獄餓鬼畜生修羅等の四惡趣があつては不都合であるので、此等を平坦にし又淨めて一佛國土と變ぜねばならぬ。そこで佛大神通力を以て一度娑婆世界を變じて清淨ならしめ、二度八方各二百萬億那由佉阿僧祇の世界を變じて清淨ならしめ、更に三度八方各々二百萬億那由佉阿僧祇の世界を變じて清淨ならしめ、通じて一佛國土となされた。而して其の廣々とした清淨の地へ十分分身の諸佛を集め給ひて、諸多寶塔を開かれたのであります。塔は開かれた、多寶如來は中より手を動かして釋迦佛を請待し、半座を分つて塔中に二佛ならび坐されました。釋尊はこれより末世に此經を弘通したいといふ者を募集せられました。文に曰く、

爾ノ時ニ多寶佛、寶塔ノ中ニ半座ヲ分チテ釋迦牟尼佛ニ與ヘテ是ノ言ヲ作シ給ハク、釋迦牟尼佛此

座ニ就キ給フベシ。即時ニ釋迦牟尼佛其塔中ニ入り其半座ニ坐シ、乃至大音聲ヲ以テ普ク四衆ニ告ハク、誰カ能ク娑婆世界ニ於テ廣ク妙法華經ヲ説カン、今正シク是レ時ナリ。如來久シカラズシテ當ニ涅槃ニ入ルベシ。佛此ノ妙法華經ヲ以テ付屬シテ在ルコト有ラシメント欲ス。(見寶塔品) 妙法の付屬を塔中よりならせ給ふこと三度、誰か娑婆世界に於て法華經を説くものぞ。速かに誓言を立てよと仰せ遊ばされた。此の御付屬は其目前に坐せる四衆の人々ではなくして地下にある所の本化上行等の菩薩に對して仰せられたのでありますから、迹門分、安樂行品の終了を待ちて上行等の菩薩大衆、大地より踊り出で遊ばしたのであります。

靈山眼前の大衆が付屬の對告衆でなかつたことは、此の付屬を仰せになつた聲に應じて立たれた迹化他方來の菩薩、八恒河の沙の數にも過たる大衆が起立合掌して誓言を立られたのを「止ミネ善男子、汝等ガ此經ヲ護持センコトヲ須ヒジ、所以者何、我が娑婆世界ニ自ラ八萬恒河沙等ノ菩薩摩訶薩アリ。此ノ諸人等能ク我が滅後ニ於テ、護持シ讀誦シ廣ク此經ヲ説クベシ」(從地涌出品)と謝絶遊ばされたので知られます。

以上の如く三變土田し十方分身の諸佛を集め、多寶塔を開いて下方の本眷屬上行を召すは何の爲

ぞ、即ち壽量品の三大秘法を説き顯さんが爲であります。而して寶塔涌出の二品が相呼應して居るの
は、これで遠近の二序をなせるものなることが伺はれるのであります。

扱三變土田して十方の分身來集し、寂光淨土の事相を眼前に表はし、上行等の本化の衆を召し
出し本門壽量品の法門を宣説されるに至つたのは多寶塔の出現が其因由をなして居る。即ち大樂説菩
薩の多寶如來を拜したいといふ懇請が有た爲、釋迦佛は多寶佛の誓願に基て十方分身佛をお集めに
なり、やがて上行等の本化の大菩薩を召し出され廣聞近顯遠の壽量品が説き出されたのであります。
いはゞ此等の大沙門をひきおこしたのでありますから、起後の寶塔と申すのであります。所詮此多寶
塔の出現てふ事實は皆前回に説いた現證の原則によりて、先づ神力を以て衆生を動かして醒悟し渴仰
の念を起さしめ、釋尊出世の本懐たる最極の法門を聽聞せしめようとなされた、佛の神通力の然らし
むる所であります。

五、地涌千界(從地涌出品)

分身既ニ多シ當ニ知ルベシ成佛ノ久シキコトヲ矣。と天台大師
が數釋せし如く、十方に計量すべからざる分身の佛あり、如何に久遠の昔より十方の土に跡を垂れて
衆生救護に奮闘されたかが推して察せられるのであります。然し其度に相當の收獲が無くてはなら

ぬ、即ち衆生教化の成績を示す必要が其處に生ずる。前項寶塔品分身の來集は能化の佛の奮闘の度數
の實證を擧げて示されたものに對し、此の涌出品は其の結果たる所化の數の無量なることを實證する
一段であります。偕、其の教化數の計量を致すに就て先づ經文を擧げて、次に之を説明することにし
ます。法華經第五の卷に曰く、

娑婆世界ノ三千大千ノ國土地皆震裂シテ其ノ中ヨリ無量千萬億ノ菩薩摩訶薩アリ同時ニ涌出セリ。
乃至、一一ノ菩薩皆是レ大衆唱導ノ首ナリ、各々六萬恒河沙等ノ眷屬ヲ將キタリ。況ヤ五萬、四萬、
三萬、二萬、一萬、恒河沙等ノ眷屬ヲ將キタル者ヲヤ。況ヤ復タ、乃至、一恒河沙、半恒河沙、四
分ノ一乃至千萬億那由佗分ノ一ナルヲヤ。乃至、況ヤ復タ一千、一百乃至一十ナルヲヤ。況ヤ復タ
五、四、三、二、一ノ弟子ヲ將キタル者ヲヤ。況ヤ復タ單ダ己レノミニシテ遠離ノ行ヲ樂ヘルヲヤ。
云云。(從地涌出品)

御經文を拜すると無量百千萬億の大菩薩があつて、其の無量百千萬億の菩薩方が各々六萬恒河沙、
又は五萬、四萬乃至一萬恒河沙の眷屬を率ゐて御座る。一體恒河沙とは何の事かといへば印度二大河
の其の一であるガンヂス河の事を恒河と音譯してあるのであります。長さ五百里、其の大河の川の沙

は蓋し無量無邊といふより外はあるまい。處で其の一河の沙の数を數の基準に押へて一恒河沙といふ。而して六萬恒河沙五萬恒河沙と數へるのであります。恐らく如何に數に緻密の腦を有する人も、到底此の數を擧げて知ることは出來ますまい。

なぜかくの如く澤山な菩薩があるかと申せば、五百塵點劫といふ古い大昔から教化に盡されたからであります。是が成佛の古い生きた證據である、即ち現證であります。

序ながら申して置きますが唱導之師の菩薩方が將ゐて御座る眷屬が、種々相違があるのは各々娑婆世界に於て御教化遊ばされた教化子が相違してゐる爲であります。されば一人も得教化せぬ菩薩は御經文には、單ダ己レノミニシテ眷屬ナシと示されてあります。威儀堂々と靈山會上、三佛の御前に凱旋軍の觀兵式を見るが如く、展開する分列式を行ふが如きとき、將軍が一人で従ふ大隊も中隊も小隊も無かつたならば、随分恥しい次第であります。折角教化を勵んで臨終の後宗祖大士の總司令の下に、開導上人の軍團長、代々講有貌下の師團長、偕は擔任導師の聯隊長、大中小隊の下に本佛法王の見參に入るとき、せめて五萬、四萬、三萬、二萬、一萬位の教化子を引き連れて、寂光淨土の凱旋門をくぐりたいものであります。幾多の功德を積める胸間の勳章を一つでも多く飾り並べて、釋迦法

王及び十方分身の佛達にお賞めに預り度いものであります。

諸釋迦世尊の久遠の昔に成佛されたこと、これは當に眞實であるといふことを證據立る爲に、一面には十方分身を集め、他面には其の教化子を無量千萬億も集めさせ給ふたのであります。又本化の菩薩の出現には更に違つた意義が含まれてあることを發見するのであります。それは其の住處が此の娑婆世界であるといふことであります。定めて他方の極樂淨土にお住ひの事かと思ふた處が、なか／＼さうではなくして此弊惡に満ちたと見ゆる娑婆世界に御座るのであります。それで地より涌出すると御經文には説いてあります。種を蒔いて置くとき春になつて大地を割つて出て來る芽は大地より涌出するものでなくて何んでありませう。お互が此の娑婆に存在して居るのは決して他方から飛んで來たものでもなく、皆此の大地から涌出せるものであります。然らばお互は上行等の本化の大菩薩方と産地を同するの光榮を有して居るのであります。されば上行大士の出現は上は佛界釋尊の價値を確證する爲に、同時に下は九界の衆生の眞價値を顯現せんが爲に、大地より踊り出で給ふたのであります。即ち十界の性相眞實なる現證として地涌千界の薩埵を拜さねばならぬのであります。涌出品に云く、蓮花ノ水ニ在ルガ如シと、汚泥の如き娑婆世界の中に、白蓮華の如き清らかなる本化の菩薩は御座る

であります。否汚泥を離れて別に蓮華は見られぬ如く、娑婆を離れて佛身を拜することは出来ない。更に進んで申せば、娑婆を離れて極樂淨土は絶対にないといふことを立證するものと申さねばなりません。

現はれたる證據、それは成佛の義を立證するものであることは、前篇『現證の眞意義』に述べました如くであります。一體證據立てるといふことは實體——品物を其處に出して置いて、これは確かだといふ事の様子に考へて居ると大變な間違ひとなります。未だ出さない品物に就て、それは確實なるが故にとの前口上、それを生きた證據で示して置くことも亦許容せねばならぬのであります。前者は自身が直接實體に接するとき、後者は他人に勤める場合であります。今本佛法王の出現に先立て多寶塔の涌現があり、次で本化六萬恒河沙の出現を見る、皆前以て證據立て、置くのであります。所謂神力品の原則、名用體宗教の次第であります。我等佛立主義者が實體の教義を後にして、先づ現證の利益を顯示する誠に茲に依るのであります。

六、十大神力(神力品) 本門壽量の三大事を説顯さんが爲めに、七寶妙塔の出現、六萬恒河沙の本化衆の涌出がありました、緒ていよく佛滅後の衆生の爲めに、上行菩薩に此の三大事を付屬

し給はんとするに臨み、更に茲に十大神力を現し給ふたのであります。この現大神力はいふ迄もなく未來の衆生に此の難信難解の法華經を信ぜしめんが爲で、所謂末法流布の妙法の眞實經なることを信ぜしめんとする現證に外ならぬのであります。

瑞相御書に云く

佛、神力品ニ至テ十神力ヲ現ズ。此ハ又サキノ二瑞ニハ似ルベクモナキ神力ナリ。序品ノ放光ハ東方萬八千土、神力品ノ大放光ハ十方世界、序品ノ地動ハ但ダ三千界、神力品ノ大地動ハ諸佛ノ世界、地皆六種ニ震動ス。此ノ瑞モ又々カクノ如シ。此ニ神力品ノ大瑞ハ佛ノ滅後、正像二千年スギテ末法ニ入テ法華經ノ肝要ノ弘マラセ給フベキ大瑞ナリ。經文ニ云ク、佛ノ滅度ノ後ニ能ク是ノ經ヲ持タンヲ以テノ故ニ諸佛皆歡喜シテ無量ノ神力ヲ現ズ等云云。(一三四〇頁)

日蓮大士は此の十大神力を義の二瑞には似るべくもなき神力也と仰せられました。さきの二瑞とは迹門實相の法門の現證たる序品の六瑞と、本門久遠の本因本果の現證先序たる寶塔の出現、本化の涌出を指すのであります。何故にかく本迹二門の瑞相にも遙か勝れて尊き現證を茲に現し給ふかといふに、未來末法の惡人共はなかくのことでは此の付屬の妙法を信じないからであります。されば此惡

人どもを感心随喜させんが爲めに今迄には比するものも無いといふ大神通力を現じ給ふたのであります。それは神力品に、佛ノ滅度ノ後ニ能ク是ノ經ヲ持タンヲ以テノ故ニ、諸佛皆歡喜シテ無量ノ神力ヲ現ジ給フとあるを拜すれば信ずることが出来ませう。法華證明抄には、

一佛ナレバ末代ノ凡夫は疑ヤセンズラントテ、此ヨリ東方ハルカノ國ヲ過ギサセ給ヒテヲハシマ
ス寶淨世界ノ多寶佛ワザト行幸ナラセ給テ、釋迦佛ニヨリ向ヒマイラセテ妙法華經皆是眞實ト
證明セサセ給ヒ候キ。此上ハ何ノ不審カ殘ルベキナレドモ、猶々末代凡夫ハ覺束ナント思召シヤ有
ケン。十方ノ諸佛ヲ、召シ集メサセ給テ、廣長舌ト申シテ無量劫ヨリコノカタ永ク虛事無キ廣ク長
ク大ナル御舌ヲ、須彌山ノ如ク虚空ニ立テナラベ給ヒシ事ハオビタマシカリシ事ナリ。(二〇九五頁)
釋迦一佛の説法にては末代の凡夫が信ぜぬかもしれぬ故に證明法華の大誓願まします多寶如來の來
向を乞ふて妙法華經皆是眞實なりの證明を願はれた。これなればもう確であるけれども末代の凡夫は
疑ひ深い事故に念には念を入れよと、更に十方分身の諸佛の助舌を乞ふことゝなつたのであります。
この諸佛の助舌が十神力の第一吐長舌相であります。佛在世の衆生は調機調養された聽衆であります
から信受することは容易でありますが、滅後の衆生、殊には闍諍堅固、白法隱沒の惡世末法の時其師

を尋ねれば凡師なり、弟子檀那は三毒強盛の惡人であるといふ状態に於て決して樂觀することを許さ
れない。かゝる時なればこそ救世の大將軍をば文殊藥王等の迹化の大菩薩にも命じ給はず、下方の空
中より一身同體の本化上行等の菩薩を召し出し給ふて付屬された位であります。それ故に尤も偉力あ
る大神通を御示し遊ばされたのも自然の道理と背かれた次第であります。偕、十種の大神力とは何々
であるかと申せば、

一、吐長舌相 文に云く、廣長舌ヲ出シテ上、梵世ニ至ラシム。(神力品)

佛の御舌を廣長舌と申す。無量劫より已來一度も嘘をいふた事の無いといふ尊い此御舌を、高く
色界の大梵天王宮までを立て給ふたのであります。般若經の時には釋尊が長舌を三千に覆ひ遊した
事はあつた、阿彌陀經の時は六方の諸佛舌を三千に覆ふといふこともあつた、けれども十方分身の微
塵數の佛がかく一所に集まりて皆舌を出して梵天に至らしめたといふことは、一切經中更に無い所
であります。日蓮大士は、

夫レ顯密二道、一切ノ大小乘經ノ中ニ、釋迦諸佛並ビ坐シ、舌相梵天ニイタルノ文之レ無シ。(九
四五頁)

と喝破し

阿彌陀佛等ノ十方ノ諸佛ハ各々ノ國々ヲ捨テ、靈山虛空會ニ詣テ給ヒ、寶樹ノ下ニ坐シテ廣長舌ヲ出シ、大梵天ニ付ケ給フコト無量無邊ノ虹ノ虚空ニ立テタランガ如シ。(一五八一頁)

と讃じ給ふてあります。如何に此の吐長舌相の尊嚴さが推測されるのであります。

二、通身放光 文に云く、一切ノ毛孔ヨリ無量無數色ノ光ヲ放チテ、皆悉ク徧ク十方世界ヲ照シ玉フ。(神力品)

佛身には毛孔生青色相といふて一切の毛孔より青色の毛が皆右に旋がつて、少しもゴヂヤノと亂れて居ないといふ尊特相があります。卅二相の一であります。此の青色の毛が光り放つ事彼の眉間の白毫が東方萬八千の世界を照したと同じであります。一般では青色であります。こゝには無量無數の色とありますから、一本々々特徴ある光を放射されたのでありませう。

三、警咳 文に云く。然シテ後ニ還テ舌相ヲ攝メテ一時ニ警咳シ玉フ。(神力品)

警咳とはシバブクとしてせきばらひの事であります。

四、彈指 文に云く。俱共ニ彈指シ玉フ。是ノ二ツノ音聲遍ク十方ノ諸佛ノ世界ニ至リテ地皆六

種ニ震動ス。(神力品)

彈指とは指をはじくことで、手を普通に握つてそれから人指ゆびをピンとはねる。其のはねる調子に音が出るそれを彈指と云ふのであります。今でも宗派によればやつて居る所もあります。然しこのセキバラヒと指をはじく事がそんなに大事かと云ふと兎に角十方の分身の佛がお集り遊ばしてなさるのであるから、一佛二佛のセキバラヒとは譯が違ふそれに人間のセキバラヒは大した事もないが、それでも主人が家に歸る時、戸口でエヘンと一つ放ちますれば家中の大小皆居すまひを直す位、況や佛の警咳ですもの一切衆生の胸の中にピンと響く事は確であります。加ふるに十方分身の佛と來て居るのですからこたへるのこたへぬのといふて我等人間界では比を取るに物もなしといふ位であります。何しろこのセキバラヒとピンとはじいた二つの音聲が十方の諸佛の世界に至つて其上到る處の大地皆六種に震動したといふのですから大したものであつた事は推知することが出来ませう。

六、普見大會 文に云く、其ノ中ノ衆生、天、龍、夜叉、乾達婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等佛ノ神力ヲ以テノ故ニ皆此ノ娑婆世界ノ諸佛ヲ見、及び釋迦牟尼佛、多寶如來ト共ニ寶塔ノ中ニ在スヲ見タテマツリ又無量ノ菩薩及び四衆の釋迦牟尼佛ヲ恭敬シ圍繞シ上ルヲ見ル。

既ニ之ヲ見已リテ大ニ歡喜シ未會有ナル事ヲ得。(神力品)

一切の十方の諸佛の世界の人々が、皆此の娑婆大會の有様を活動寫眞を見るが如く、明らかに見て大に歡んで、未だ曾て有らざる事を得たといふ。皆是れ佛の神通の然らしむる所であります。

七、空中唱聲 文に云く、即時ニ諸天、虚空ノ中ニ於テ高聲ニ唱ヘテ云ク、此ノ無量無邊百千萬億ノ世界ヲ過ギテ國有リ。娑婆ト名ク、是ノ中ニ佛イマス釋迦牟尼佛ト名ケ上ル。今諸ノ菩薩摩訶薩ノ爲メニ大乘經ノ妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念ト名クルヲ説キ玉フ。汝等當ニ深心ニ隨喜スベシ。亦將ニ釋迦牟尼佛ヲ禮拜シ供養スベシ。(神力品)

十方の世界の衆生が大に歡喜した。其の時「汝等の此の世界から遙に遠き處に娑婆といふ國がある。其の中で釋迦牟尼といふ佛様が妙法蓮華經といふ結構な御經を説き遊ばされる。皆此の大法に至心に隨喜し又教主釋尊を恭敬し奉れよ」と大聲を以て響き渡つたのであります。此の御文によりて我等は

- 釋迦佛……………本門ノ本尊
- 娑婆世界……………本門ノ戒壇
- 妙法蓮華經……………本門ノ題目

の三大秘法を拜受するのであります。釋迦佛は娑婆世界てふ一大國土の上に立て御座る本果の佛で

まします。而して其の悟の本因下種の秘法こそ我等衆生——菩薩——に教へて下るものである。而も佛所護念と説きたれば此の妙法五字をだに受持し上れば諸佛の護念を受くこと必定であります。

八、咸皆歸命 文に云く、彼ノ諸ノ衆生、虚空ノ中ノ聲ヲ聞已リテ、合掌シテ娑婆世界ニ向ヒテ是ノ如キ言ヲ作ス、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛ト。(神力品)

諸天の宣傳を感受して直に娑婆世界の方を向ひ、合掌して南無釋迦牟尼佛々々々々々々々々南無妙法蓮華經々々々々々々と禮拜されたので有ります。今の文には題目口唱の文が有ませんがこれは略されたものであります。それは本化の智眼をかりて知ることが出来ます。宗祖大士云く、

例セバ神力品ノ十神力ノ時、十方世界ノ一切衆生一人モナク娑婆世界ニ向テ大音聲ヲ放テテ南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經ト一同ニサケビシガ如シ。(一一九四頁)

又妙密上人御消息に、

法華經ノ神力品ノ如ク一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ給フ事モヤアランズラン。(一四三二頁)

題に咸皆歸命とは、咸は皆と同義でありますから二字でミナと訓じ、歸命とは信從恭敬の義、梵語の南無を翻譯したのであります。所詮は一切衆生皆妙法に信順し奉つたといふことであります。

九、遙散諸物 文に云く、種々ノ華香、瓔珞、旛蓋、及び嚴身ノ具、珍寶、妙物ヲ以テ皆共ニ遙ニ娑婆世界ニ散ズ。散ズル所ノ諸物十方ヨリ來ルコト、譬ヘバ雲ノ集ルガ如シ。變ジテ寶帳トナリテ徧ク此ノ間ノ諸佛ノ上ヲ覆フ。(神力品)

一切衆生皆共に深く妙法に歸し本佛を禮拜する。禮拜し畢て種々の供養を捧げる。其のト方より娑婆世界に集まり來る供養が、諸佛の集團を繞ること雲の月をかこむが如くおびたゞしき事であつた。

十、同一佛土 文に云く、時ニ十方世界通達無礙ナルコト一佛土ノ如シ。(神力品)
一切の世界は娑婆世界を中心として淨化せられ、統一せられ、四通八達自由自在まことに一佛の御世界となつたのであります。

以上の十神力に就ては天台の釋義には種々の配當などありますが、それは甚だ説明の仕悪い六ヶ敷

事ばかりでありますから、たゞわかり易いを主眼として文上に就て述べた次第であります。

所詮十大神力は、末法の衆生をして此の付屬の妙法に、信を發さしめんとする現證なることを信じ

七、燒臂還復(藥王菩薩本事品)

法華經第七の卷藥王菩薩本事品にお説きになつてあるには

乃往過去に日月淨明德佛といふ佛様がましました。其の第一の御弟子に一切衆生喜見菩薩といふ方があつた。此の佛様は一期の化導終つた時に、後事一切を喜見菩薩に付屬遊ばして、涅槃に入り給ふた。此の菩薩は至つて師孝の念篤くおはしたので、出來得る限りの尊き梅檀を積んで佛身を荼毘し、其の舍利を八萬四千の寶瓶に分ちて、八萬四千の塔を立て盛んなる供養を捧げた。然し猶ほ心に足らずと思召されたのか、舍利塔の前に御自身の尊き臂を燃して御燈明に供へられた。これを拜するもの皆、現一切色身三昧といふ功德を得られた。所で喜見菩薩は身の及ぶ丈、故師の御舍利に供養を捧げ且つ又一切の菩薩が現一切色身三昧を得られたので、上は師恩を報謝し下は衆生を導利したといふ大功德を一身に感じ、心大いに満足せられたのであるが、他の一切の人々は自分等の師匠——導師が功德の爲とはいひ乍ら兩臂を失ふて不具となられたのを非常に悲しまれた。それを見た喜見菩薩は大勢

の人を集められて仰せられるには、我が兩の臂を捨てたのは佛の金色の身を得んが爲めである。此の身を捨て、金色の佛身が得られるならば如何に喜ばしい事ではないか。所で我は其の喜を偏身に感じて居るのである。少しも悲んだり後悔したりして居ない。然し皆々は師匠の私の不具なるを見て悲しみに満ちて居る様である。それで其の悲しみを喜びに轉ぜんが爲めに、其の悲みの本源なる疑を晴さんが爲めに茲に一の現證を示すであらう。佛冥覽の御前に一つの誓を立てん。

我レ兩ツノ臂ヲ捨テ、必ズ當ニ佛ノ金色ノ身ヲ得ベシ。若シ實ニシテ虚シカラズンバ、我ガ兩ツノ臂ヲシテ還復スルコト故ノ如クナラシメ玉ヘ。(藥王品)

實に大なる誓言ではありませんか。自分の成佛が確かであれば今燒き失せた兩臂をもとの通りに還して下さいといふのであります。然るに經文には、

是ノ誓ヲ作シ已テ自然ニ還復ス。斯ノ菩薩ノ福德智慧、淳厚ナルニ由テ致ス所ナリ。爾ノ時ニ三千大千世界、六種ニ震動シ、天ヨリ寶ノ華ヲ雨ラシ一切天人未曾有ナルコトヲ得タリ。(藥王品)

此文によれば直ちに現證の利益を得て、誓の如く成佛の確さを立證する事が出来たのであります。茲に於て思ひを高祖大士の龍ノ口に運び、六百六十餘年の昔を追憶せずには居られないのであります。

あゝ高祖大士は御法の御爲に龍ノ口の頸の座に御すはり遊ばされた。蛇胴丸の名劍は鞘を走つた。双の面、双の裏に水は注がれた。其の水のしたゝる名劍は飛龍の如く振り上げられた。今や一閃直下すれば萬事は終らんとする刹那、喉も裂けよと叫んだのは四條金吾頼基であります。御頸は只今なり。……熱湯の如き涙は滂沱として双の頬に流れた。其の時高祖大士は何事のあるやも知らぬ氣に、コレ程ノ喜ヲ笑ヘカシ、如何ニ日頃ノ約束ヲ違ヘ給フゾと嚴かに誠め遊ばした。其の決定心の如何に磐石の如くなりしかを、思ふも肉震ひ骨鳴るの感があるのであります。

彼の喜見菩薩が故師の御前に喜んで捧げたる兩臂の血燈は遂に成佛の大果報を達せられた、否必ず達すべき確證を現しました。今我が高祖日蓮大士も亦復是の如し。彼ノ不輕菩薩成佛シ玉ハ、日蓮ガ佛果豈ニ疑フベケンヤとの誓言、日蓮ガ流罪ハ今生ノ小苦ナレバ數カハシカラズ。未來ニハ大樂ヲウベケレバ大ニヨロコバシ、との法悦に満ちたる尊き御姿は、彼にありて自然還復の御利益、此にあつてはやがて刀盡段々壞の現證となつた。古今かはらぬ妙法經力のあらたかさ、開導上人歎詠すらくもろ人のきゝおがまれて今も猶ほ祖師のみくしに折れし太刀影

江の島の光りものにて疑ひのむねのくもりぞ晴れわたりぬる

江の島の方より戌亥にかけて光り渡つた光團は太刀取を倒し、つはもの共を恐れ戦かした外に、末法萬年の闇を照した。如何にも經力の尊さ、成佛の確さ、今迄疑へる者も皆此の光りものによりて骨の髄までも晴れ渡つた。げに、

喜んで捨てた命をひろふたり。

日扇上人

と、

讀者諸君!! 念を弘通——慈悲——に専らにせよ、佛界自ら出現せん。執我——瞋恚は——地獄界、金——貪欲——は餓鬼界、女——淫欲——は畜生界、酒——醉——は修羅界、必ずや一身に感せん。又、姑息なる安穩を求め給ふな、遂に向上の一路空しく横はるのみとなりませうぞ。されば一心に念を佛界にかけ其の成佛の成否を現世の願によりて試みて御覽なさい。所願立所に成就せん事疑ふ所なし。高祖大士示し給はく

サレバ我弟子等心ミニ法華經ノ如ク、身命ヲ惜マズ修行シテ此度佛法ノ定否ヲ心ミヨ。(一二四七頁)
一切法華經ニ其身ヲマカセ金言ノ如ク修行セバ、後生ハ確ニ申スニ及バズ、今生モ息災延命ノ大果報ヲ得。(九一五頁)

と、開導上人の御教諭には

何れをか大事と思ひ惑ふらん未來願はゞこの世ともなり

未來大事——成佛——佛界に念をかく——慈悲に住す——弘通第一と信行奉公すべきであります。斯くせば喜見ならぬ信者の自然還復——當病平癒疑ひないのであります。兎角、根本目的を忘れて枝葉の現證に走らぬやう、本末を正すことが大切であります。

八、六根清淨(法師功德品)

今迄は發信門より眺めたる現證でありましたが、當品の六根清淨は成佛門上の現證であります。即ち眼前の證果、即身成佛の事であります。

元來、成佛といふことは、身と心と而して壽命との三つが、極度に發育延齡したものであります。身の發育を申せば、佛說一般に通じて佛身を説くに三十二相八十種好と申します。心の發育とは所謂の悟で、過去現在未來の三世を十方に通じて掌を見るが如く、其の有様、其の内面、其の關係等を知り盡して御座るのであります。壽命の延齡とは無量無盡常住不滅、不老不死をいふのであります。

先づ三十二相八十種好の概要をお話し致しますと、
一、足安平相 足の裏に凹處の無いこと。

- 二、千幅輪相 せんぱくりんさう 足の下に輪形のあること。
- 三、手指纖長相 しゆしせんちやうさう 手指の細長きこと。
- 四、手足柔軟相 しゆそくじゆなんさう 手足の柔かなること。
- 五、手足縵網相 しゆそくまんもうさう 手足ともに指と指の間に縵網あり、連絡すること鴨の足の如し。
- 六、足跟満足相 あしこんまんじゆさう 跟は踵なり、かかとが圓滿なること。
- 七、足踏高好相 あしふみかうこうさう 踏は足の背なり、足の甲高く起り圓滿なり。
- 八、臚如鹿王相 せんにやうくわうさう 臚は股肉なり、股肉の圓滿なる状態恰も鹿の王の股の如しと。
- 九、手過膝相 てあつかひさう 手長くして膝を過ぐ。
- 十、馬陰藏相 ばいんざうさう 佛の陰部體内に藏るゝこと馬の如しといふ。
- 十一、身縱橫相 しんじやうわうさう 頭足の丈と兩手の張りし長とが齊しきをいふ。
- 十二、毛孔生青色相 もうくしやうせうしきさう 一つの毛孔より青色の一毛を生出し雜亂せず。
- 十三、身毛上靡相 しんもうじやうみさう 身毛の頭右旋し上に向て伏す。
- 十四、身金色相 しんこんじきさう 身體の色黄金の如し。

- 十五、常光一丈相 じやうくわういちじやうさう 身より光明を放つこと四面各一丈あり。
- 十六、皮膚細滑相 ひふさいくわつさう 皮膚軟滑なり。
- 十七、七處平滿相 しちじよへやうまんさう 兩足下、兩掌、兩肩、頭頂缺陷なく圓滿なり。
- 十八、兩腋滿相 りやうあきまんさう 腋下充滿せり。
- 十九、身如獅子相 しんじよししさう 身體平正、威儀嚴肅、獅子王の如し。
- 二十、身端直相 しんたんぢきさう 身端正にして偏屈なし。
- 廿一、肩圓滿相 けんえんまんさう 兩肩圓滿にして豊かなり。
- 廿二、四十齒相 しじしさう 四十の齒を具す。
- 廿三、齒白齊密相 しはやくさいみつさう 四十齒皆白く淨らかに、而も齊しく密に揃へり。
- 廿四、四牙白淨相 しげはやくじやうさう 四牙(犬齒)尤も白し。
- 廿五、頰車如獅子相 けつしやにじよしさう 兩ほ、隆滿、獅子の如し。
- 廿六、咽中津液得上味相 いんちゆうしんじやくじゆじやうみさう 咽喉中に常によき津液あり、食するもの皆之が爲に上味となる。
- 廿七、廣長舌相 くわうちやうせつさう 舌廣く長く柔軟にして細薄、之を展ぶれば頰を覆ひ頭頂に達す。

廿八、梵音深遠相

梵は清淨の義、佛の首聲は清淨にして遠く聞ゆ。

廿九、眼色如紺青相

眼睛の色、紺色。

三十、眼睫如牛王相

眼毛の勝れたること牛王の如し。

卅一、眉間白毫相

兩眉の間に白き毛あり、右に旋れり、常に光る。法華經序品の時の如きは東方一萬八千の世界を照せり。

卅二、頂上肉髻相

頭頂の中央に肉の隆起せるものあり、髻の形をなす。他人をよく禮拜せる爲に此の相を得。得了つて再び他人より頂を見らるゝことなし。故に一名、無見頂相ともいふ。頂を見得るもの無しの義。

以上の三十二相の名稱は大智度論によりました。次に八十種好は此の三十二相を更に細かくした様なものでありますから、複雑を避けて略することゝ致します。これが佛身の莊嚴であります。第二の悟——心の方面はとて述べることは出来ません。所謂諸法實相の悟り、妙法蓮華經であります。

第三の壽命は無量無盡、法華經壽量品に説ける、久遠實成三世常住の壽命であります。

佛はかゝる御方であるとして六根清淨は如何といふに、曩に擧げたる佛身の莊嚴三十二相なり、悟の御事なり、將又壽命の無盡といふことを一言にして申すならば、六根清淨の四字に結歸するのであります。三十二相は見らるゝ通り皆身的方面の莊嚴であります。一より二十五までは身根清淨、廿六より廿八までは舌根清淨、廿九、三十は眼根清淨、卅一、卅二は又身根清淨であります。尙耳鼻の二根は略されてあるのであります。それから心の方の悟は意根清淨、以上で六根清淨と約言されます。第三の無量無盡の壽命はといふに、これは六根清淨の結果、六根互用とて、六根互に他の五根の用を兼ねることが出来るのであります。抑も法師功德品は一名六根品ともいはれてある位、六根清淨の事のみが説いてあります。開卷第一に

若シ善男子善女人、是ノ法華經ヲ受持シ若ハ讀ミ若ハ誦シ若ハ解説シ若ハ書寫セン。是ノ人ハ當ニ八百ノ眼ノ功德、千二百ノ耳ノ功德、八百ノ鼻ノ功德、千二百ノ舌ノ功德、八百ノ身ノ功德、千二百ノ意ノ功德ヲ得ベシ。是ノ功德ヲ以テ六根ヲ莊嚴シテ皆清淨ナラシメン。(法師功德品)

是ノ善男子、善女人ハ父母所生ノ清淨ノ肉眼ヲ以テ、三千大千世界ノ内外ノアラユル山林、河海

ヲ見ルコト下、阿鼻獄ニ至リ上、有頂ニ至ラン。亦其ノ中ノ一切ノ衆生ヲ見、及ビ業ノ因縁、果報ノ生處ヲ悉ク見悉ク知ラン。(同上)

と、眼根清淨を説き初めてあるのであります。次に耳根清淨に付ては、

三千大千世界ノ下、阿鼻地獄ニ至リ上、有頂ニ至ル。其ノ中ノ内外種々ノ所有ル語言ノ音聲、馬聲、乃至火聲、風聲、地獄聲、乃至、佛聲ヲ聞カン。(同上)

第三に嗅香の鼻根清淨を説きて、地中の寶藏や、懷妊せる未だ男女の別明らかならざるを明らかに嗅ぎ知ることなどが出来る。第四舌根清淨に至りては、

是人ハ舌根淨クシテ終ニ惡味ヲ受ケジ。其ノ食噉スル所有ルハ悉ク皆甘露トナラン。深淨ノ妙聲ヲ以テ大衆ニ於テ法ヲ説カン。(同上)

と、三十二相中の第廿六咽中津液得上味相や、第廿八の梵音深遠相と同一なるかを思はしめます。第五身根の清淨に付ては、淨瑠璃の如くして衆生の渴仰を受け、三千世界の一切の萬象が皆身中に影現すると説き、最後第六意根清淨に於ては、

一偈一句ヲ聞クニ無量無邊ノ義ヲ通達セン。是ノ義ヲ解リ已リテ能ク一句一偈ヲ演説スルコト一

月、四月乃至一歳ニ至ラン。諸ノ所説ノ法、其ノ義趣ニ隨ヒテ皆實相ト相ヒ違背セジ。若シ俗間ノ經書、治世ノ語言、資生ノ業等ヲ説カンニ皆正法ニ順ゼン。乃至是人ノ思惟シ籌量シ言説スル所アランニ皆是レ佛法ニシテ眞實ナラザルコト無シ。(法師功德品)

と説いてあります。是では佛様そのまゝと申すより外はありません。否々成佛とは六根清淨に外ならぬのであります。佛と雖も六根以外には何物も御持ちになつて御居でなさらぬからであります。偕、成佛の六根清淨、父母所生の此の凡身を以て感得することは果して出来るでありませんか。私は次の項に於て之れを述べたいと思ふのであります。

九、増益壽命(常不輕菩薩品) 前項に説きました六根清淨は御經に明らかに「父母所生ノ」と仰せられになつてありますから、我等凡身に直に感得することの出来る御利益であると、深く信ずるものであります。

偕此の信を一層確めんが爲に其の實例を擧げて見ますれば、常不輕菩薩の御事がそれでありませう。常不輕菩薩は昔威音王如來の滅後の像法の末、即ち末法の初めに修行遊ばされた一人の菩薩であります。此の菩薩は總ての人に、それは男でも女でも、老人でも若者でも、僧侶でも在家でも會ふ人見る人を

皆合掌して拜み、而してア、貴君は尊き佛性を具へて御座る、修行してお研きになれば立派な佛様に
 なられます、それ故に私は貴君を輕しめませぬといふので、人が仇名を付けて不輕菩薩と呼んだので
 あります。この合掌禮拜して私は貴君を輕めませぬ、貴君は當に成佛することが出来ますといふ聲を
 聞いた人は悉く、ナンだ青二歳、お前なんかのいふことを誰が信するものがあらうぞ、餘計なこと
 を云ふな馬鹿野郎と悪罵を加へ、其の上石や瓦を投げ付け、又は棒で打つたりするのであります。其
 の時に不輕菩薩は逃走遠住といふてスーツと其の處から避けて、又向ふの方からイヤ私は貴君を輕し
 めませぬ。貴君はやがて修行されるれば佛におなりになるお方であるからと拜まれました。此の菩薩が
 やがて壽命がつきて臨終遊ばされようとした時に、何處からともなく威音王佛のお説き遊ばされた法
 華經の二十萬億偈の御法門が聞えて來ました。それを聞いた不輕菩薩は一句一偈も漏らさず身と心に
 頂戴なされた爲めに、上の法師功德品で説いた様な六根清淨の功德を感得なされた。そのお蔭で壽
 命が二百萬億歳も延びて更に人の爲めに感得された法華經の法門を弘通遊ばされました。六根清淨
 の御身でありますから、大神通力あり大雄辯力あり聞く人皆信伏隨從された。御經に、
 其ノ罪畢ヘ已テ命終ニ臨ム時、此ノ經ヲ聞クコトヲ得テ六根清淨ナリ。神通力ノ故ニ壽命ヲ増益

シ復タ諸人ノ爲メニ廣ク是ノ經ヲ説ク。(常不輕菩薩品)

以上の物語の不輕菩薩こそ我が釋迦牟尼如來の因位の御修行であつたのであります。不輕菩薩は正
 に凡身に於て六根清淨を得られたお方でありすが、此の菩薩と我等の修行とどんな關係があるか
 と申しますと、我等が祖師、日蓮大士は

日蓮ハ是レ法華經ノ行者ナリ。不輕ノ跡ヲ紹繼ス。(一三三七頁)

と仰せられなまつてあります。日蓮宗と申しますのは即ち不輕宗の事でありす。されば高祖大士
 は御書全體に通じて十數箇所も、不輕と日蓮とは名は異れども體は同じといふことが述べられてあ
 ります。其の一二を擧げて見ますと、

日蓮ハ過去ノ不輕ノ如ク、當世ノ人々ハ彼ノ輕毀ノ四衆ノ如シ、人ハ替レドモ因ハ一也。イカナレ
 バ不輕ノ因ヲ行ジテ日蓮一人釋迦佛トナラザルベキ……(八三四頁)

日蓮ト不輕菩薩トハ位ノ上下ハアレドモ同業ナレバ、彼ノ不輕菩薩成佛シ給ハ、日蓮ガ佛果疑フベ
 キヤ……(一〇一八頁)

されば日蓮大士は不輕宗を日本に弘通遊ばされたお方であるから、不輕品は正に日蓮宗の修行の模

範を示したものといはねばなりません。故に日蓮大士は、

一代ノ肝心ハ法華經、法華經ノ修行ノ肝心ハ不輕品ニテ候也。(一六四六頁)

と仰せられてあります。茲に於て不輕品の所説は、そのまゝ我等日蓮が弟子檀那の手本であると同様に、其の六根清淨、増益壽命も亦我等信者の得分であらねばなりません。

第四 布教法としての現證

一、開基日隆聖人と現證 佛教各宗一般に亘つて其の眞目的である所の成佛を得させる爲、宗義を有縁の衆生に宣授せんとして何れも苦心をして居ります。文書傳道、公開講演、慈善事業、藝術宣傳、防貧事業等種々手を盡して居りますが、さてなか／＼眞の目的である佛の慈悲に觸れしむるところが出来ないのであります。所が我が佛立講に於てはそんなことは何處に吹く風かと計りに頗る呑気に構へ、而も月々年々に偉大な成績を挙げつゝあるのは一重に現證利益の御影といはねばなりません。されば各宗各派に於て佛立講の布教法、又は教義を聞かんとするものが大分に出来て来たのであります。現證主義の布教法！ 何んとよき布教法ではありませんか。我が開導日扇上人の尊さが事に

觸れる度毎に私どもの頭に増加して行きます。あゝ大尊師はエライ人だなあ、あゝ何んといふ現代を見通された高い目であらう。

扱現證利益を以て唯一の布教法とされたのは開導上人でありますが、然しこれは開導上人に始まつた布教法ではありません。宗祖日蓮大士、開基日隆聖人、遠くは釋迦牟尼世尊が此の方法を以て布教遊ばされたのであります。たゞ専ら遊ばしたのが日扇上人で、道理文證の二門と相並んで遊ばしたのが釋尊なり、蓮隆兩祖なりといふ相違があるのであります。尤も開導上人も現證より外に何も施さなかつたといふ譯ではないが、對外的の場合に始んどこれに限られたといふて差支ない位でありました。然し開導上人の御徳を慕ふて入講されたお方——いはゞ隨喜入講といふやうな方も隨分あつた事と信じます。即ち書や畫の方から、又俳句和歌等の方から、開導上人に接近してやがて溫容に同化されて入講する人、或は高松の左近公の様に、道理文證を示されて今の代に得難き導師なりと隨喜入講するものなどもあつたのでありませう。けれども、開導上人から發する所の布教法は、殊に大上段に振りがざされたものは現證利益であつたと深く信するのであります。翻つて對内的布教法としては、日々

現證布教の歴史を辿るといふ程ではありませんが、開基聖人が現證を以て布教遊ばされた一節を述べて見ませう。始め妙顯寺との分離の頃、一室にお籠り遊ばして讀經三昧に入つて居られたのを、妙顯寺の月明の廻し者が六人として聖人を無きものにせんと近よつた時、御本尊様よりサツと光明がほとばしり出でて六人が目がくらんで倒れた。その音に聖人はお氣がつかれて振顧みれば六人も倒れて居つた。この時始めて六人の者は聖人の凡ならざるお方なるを深く信じて何處までも御仕へしようと思ひ出したのであります。それから六人相談の上京都是危いといふので、河内の三井へ御守護申して今の三井の本嚴寺が出来上つたのであると承はつて居ります。此の御難は正に宗祖大士の小松原の御法難に似通うて居る大難であります。尤もそれは布教法として聖人が自ら發せられたものではありませんが、我等の今日申す現證が、佛力經力の現れである以上、法體の折伏てふ經力で弘める當講から見れば、これぞ眞の法體の折伏で、任運自然の布教法であつたと申して差支なからうと思ひます。

元來開基聖人は宗祖門下の教學のすたれたるを歎かせ給ひ三十餘年の間、眞俗二門の折伏弘通を備置いて研學に従事遊ばされたお方でありませう、道理文證といふ方に力をお注ぎ遊ばした事は火を賭るよりも明らかな事でありませうが、それでも御臨終遊された尼ヶ崎の本興寺——五大本山の中尤も堂宇の揃ふて居る、而も宗立學林のある、其の寺の建立になつた因縁を承れば、これぞ現證利益の法によつたのであります。開基聖人も決して現證利益を捨てたお方ではありませんでした。

聖人が三井を出發遊ばされて大阪より更に西に向はれて尼ヶ崎に至られた時——其の地の領主が相續者を是非一人もうけたいと思ふて居る所に夫人が妊娠された。それで種々調べて見た所、専門家は何れも皆女子である旨を申し上げたので、大に落膽されてどうかして男子にならぬものであらうかと種々と心を碎かれて居つた——其の時聖人はこの地を訪れ遊ばされました。この事早くも領主の耳に入り、大徳の出家が今城下に泊まつて居られる急いでこれを迎へよとの御使、依つて聖人は望によりて變成男子の御祈願をこめられ一日にして願成就、安々と玉の如き男子出生された。そこで領主は大に歸依して莫大な地所と堂宇とを寄附されたのであります。これが尼ヶ崎の大本山本興寺建立の由來であります。

これによつて見ますれば大道場建立は全く現證の利益てふ布教法が其の効を奏したものだといはねばなりません。豈に獨り道場の建立のみならんや。歸依の信徒雲の如く集まつたことも想像に難くない

のであります。然し道場建立といふ目的で祈願を籠められたのではない。偏へに先づ領主を教化し、延いて其地方を助けんと遊ばした大慈大悲の御心よりして發せられたこと論を俟たずして明らかであります。然らば其の布教を道理文證によらずして現證によられた事は末代今日我等の尊き手本であると喜ぶのであります。

又北國越前方面は寺院信徒其數頗る多い様であるが、これも隆尊の御利益より一村擧げて入門したに基ひるのであります。第一、色ヶ濱に於て村民一同が大疫病で憫まされて居つた。折しも隆尊の御留錫あることを聞て御祈禱を願ひ出でられた、隆尊は平癒の後には必ず改宗をなすべきの誓約を爲さしめ、色ヶ濱の大石の上に於て伴僧眞乘院日頌と數日御祈願有り、村中の疫疾は悉く全快した。依て一村残らず改宗し一寺建立して本隆寺と命名せられました。この本隆寺建立開堂式の時、隆尊は誘法なく信行懈怠なければ此の里には疫病難産火災あるべからずと示し給ふたと傳へられてゐます。

又色ヶ濱、隣村手の浦の村人もこの御利益を聞傳へ救病の祈願を願ひ出でられたので、これ又改宗の約を堅めさせて病盡除癒の御祈念あり、やがて成就して悉く改宗された。

猶かゝる現證布教は隆聖傳中にいくらかも發見することでありますが、これ位で略して置きます。

二、宗祖大士と現證

宗祖大士と現證利益は枚擧に暇あらずと申してよい位で、就中龍の口法難の如きは所謂の奇跡中の奇跡ともいはれる程世人が熟知せる處であります。それで事實を擧げるよりも現證を如何に重視遊ばしたかの御指南を二三出したいと思ひます。

先づ總體的に申しますと立正安國論は文々句々皆是れ現證主義であると申して過言でないと思ひますのであります。たゞ事が天變地天とか、國家安全とかいふ大舞臺にあるだけに現證利益などいふ小ツぼけなものなど違ふなど申す人もありますが、それは現證利益といふ眞義を知らぬ人の申すことであります。現證利益はそんなじよ其處らのお稻荷様へ一錢上げて一寸拜んでぼろい御利益に預らうなどいふ様な、迷信とは根本的に相違してゐるものであります。毎度申すことですが、法華經の眞理の尊い御力を、現實の事柄を以て證據立んとするものが現證の御利益であるのであります。さればたとゞ現世の苦痛を助けるのみが目的でなく、未來の無間地獄の苦みを救はんが爲に人々に法華に對する信を發せしめんとする方法に外ならんであります。されば其の發信の爲には反對の御罰といふことも必要であつて、これも亦御利益と申すことが出来るのであります。立正安國論を上られたのは、天變地天、飢饉疫病遍く地上に蔓るのみを憂慮されたのではなく、寧ろ此の際に當局及び一切の人々をし

て反省せしめ、正法正師に従はしめようと遊ばされたものであると信するのであります。これは論中の

の
夫レ國ハ法ニ依テ昌ヘ、法ハ人ニヨリテ尊シ 國亡ビ人滅セバ佛ヲ誰カ崇ムベキ、法ヲバ誰カ信ズ
ベキヤ。先ヅ國家ヲ祈リテ須ク佛法ヲ立ツベシ。(三八四頁)

の御文に依りても其の邊の消息は何はれるのであります。又結文の

汝早ク信仰ノ寸心ヲ改メ實乗ノ一善ニ歸セヨ。乃至。先ヅ生前ヲ安ジ更ニ没後ヲ扶ケン。(三九一頁)

によりても伺ふことが出来るのであります。若たど國を安らかにし現世を救ふ耳であつたならば、
換言すれば現世安穩のみが宗祖大士の主義であつたならば、ナゼそれ自身が安穩でなかつたかといふ
不審が起ります。申す迄も無く其の御一生はまことに多艱多難の生涯であつたと申すより外はないの
であります。然し現世に於ては、よし如何なる大難の爲めに苦しめらるゝとも未來の大苦を免るれば
との御信仰であつたのであります。開目抄の結文に、

日蓮ガ流罪ハ今生ノ小苦ナレバナゲカシカラズ。後生ニハ大樂ヲ得ベケレバ大ニ悦バシ。(八二四頁)

と、されば安國論の御主張は安國も大事であるが、それは佛法修行の國土として大切といふ義が含ま

れて居ることを忘れてはならぬのであります。彼の蒙古來襲の時、或は宗祖大士は調伏の祈を致され
たと傳へられて居りますが、これが眞でありとすれば、それは生國の恩を報ゆるといふ上に、法華弘
通の國土を守るの御意が多分に含まれて居つた事を見のがす事は出来ないであります。この御思想
は帝王の恩徳をたゞへ給ふ場合にも顯れて居ります。四恩抄に曰く

天ノ三光ニ身ヲアタ、メ地ノ五穀ニ神ヲ養フコト皆是國王ノ恩也。其上今度法華經ヲ信ジ今度生死
ヲ離ルベキ國主ニ値奉レリ。争カ小分ノ怨ニ依テオロカニ思ヒ奉ルベキヤ。(四二二頁)

之を要するに立正安國論は法華弘通の方法として、國と人とが大なる病に苦めるに際し、サア御信
心をなさい、改良をなさい、謗法拂をなさいと折伏されたものであります。布教法として現證を振り
かざされたのはこの御書を第一とします。

第二、教義の中樞たる觀心本尊抄に於て、而も其の肝要なる人界に佛界を具するを立證せんとする
方法に現證をかりて説明されてあります。即ち

人界所具ノ佛界ハ水中ノ火、火中ノ水、最モ信ジ難シ。然リト雖モ龍火ハ水ヨリ出デ、龍水ハ火ヨ
リ生ズ。心得ラレザレドモ現證アラバ之ヲ用ユ。乃至此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキ也。(九三三頁)

第三に法華經の眞實を信ぜしむる方法の上に明らかに現證を御用ひ遊ばした。法蓮抄に、如何シテカ今度法華經ニ信ヲ取ルベキ。信ナクシテ此經ヲ行ゼンハ、手ナクシテ寶山ニ入り、足ナクシテ千里ノ道ヲ企ツルガ如シ。(一一五六頁)

と先づ問題を起され、どうしたら法華經が信ぜられるであらう。信することなくして如何に修行すとも何の甲斐がないのに、それに一向信が起らぬ、ハテどうしたらよからうかといふに、それは近キ現證ヲ引テ遠キ信ヲ取ルベシ。(一一五六頁)

と、現證でなくては駄目だ、現證に限るのだと力説遊ばされ、

サレバ過去未來ヲ知ラザラン凡夫ハ此經ハ信ジ難シ。又修行シテモ何ノ詮カアルベキ。是ヲ以テ思フニ、現在ニ證據アラズル人此ノ經ヲ説カン時ハ信ズル人モアリヤセン。(一一五七頁)

と再説されてあります。即ち現證布教に限ると示されたのであります。

第四に他宗の無價値を折伏するに就ても矢張り現證によられてあります。尤も著しいものとして

は良觀房の律宗折伏に就て下山抄に曰く。
余案ジテ曰ク現證ニ付テ事ヲ切ラント思フ所ニ、彼常ニ雨ヲ心ニ任セテ下ス由披露アリ。古モ又雨

ヲ以テ得失ヲアラハス例コレ多シ。所謂ル傳教大師ト護命ト、守敏ト弘法ト等也。此ニ兩火房、上ヨリ祈雨ノ御イノリヲ仰セ付ケラレタリト云云。此ニ兩火房祈雨アリ。去ル文永八年六月十八日ヨリ二十四日ナリ。此ニ使ヲ極樂寺ヘ遣ス年來ノ御歎キコレナリ。七日ガ間ニ若シ一雨モ下ラバ御弟子トナリテ二百五十戒具サニ持ツ上ニ、念佛無間地獄ト申ス事ヒガヨミナリケリト申スベシ云々。(一五六五頁)

又曰く、

持戒持律ノ良觀房ハ法華眞言ノ義理ヲ極メ、慈悲第一ト聞ヘ給フ上人ノ、數百人ノ衆徒ヲ率ヒテ七日ノ間ニイカニ降ラシ給ハヌヤラン。是ヲ以テ思ヒ給ヘ、一丈ノ堀ヲ越ヘザルモノ二丈三丈ノ堀ヲ越ヘテシヤ。易キ雨ヲダニ降ラシ給ハズ況ヤ難キ往生成佛ヲヤ。後生恐ロシクオボシ給ハ、約東ノマ、イソギ來リ給ヘ、雨ヲラス法ト佛ニナル道トオシヘ奉ラン云云。(一六〇九頁)

降雨の事は現世一端の利生、これによりて經の力用の有無を決し給はんとされたのであります。(以上は現證眞意義の下に論ぜしものなれど順序上再説せり)

次に眞言宗の折伏に就て三三藏祈雨抄には、

日蓮佛法ヲ試ルニ道理ト諍文トニハスギズ。又道理文證ヨリモ現證ニハスギズ。(一二五五頁)

此の御文に就て一寸注意して置きたいのは動れば或る一派の人は、道理文證より現證の方が尊いのかの様に拜する人があるが、それは誤解で、發信の上には道理を説いたり文證を見せたりしても甲斐がない、現證の一門に限るぞといふ御心であります。日蓮佛法の下の前句は佛法本來の意味から申して、道現と文證とが尊い、けれどもとて下の句を起し、發信には現證に限ると仰せ定め遊ばしたのであります。

第五に信者の信心増進を計る上に現證利益を祈り給ふ事、及び信者の祈りをすゝめ給ふた事があります。

法華經ヲ信ゼン人、現世ノ祈リ後生ノ善處ハ疑ヒナカルベシ。(九〇六頁)

法華經ノ行者ノ祈リノカナハヌ事ハアルベカラズ。(九〇六頁)

サダメテ後生ハサテヲキヌ今生ニ驗シアルベク候。(一四四二頁)

御親父御祈禱ノ事承ハリ候。佛前ニテ祈念申スベク候。乃至只肝要ハ此ノ經ノ信心ヲ致シ給ヒ候ハバ現當ノ所願満足アルベク候。(一五一六頁)

日蓮ハ少ヨリ今生ノ祈リナシ只佛ニナラント思フ計リナリ。サレドモ殿ノ御事ヲバヒマナク法華經釋迦佛日天ニ申ス也。其故ハ法華經ノ命ヲ繼グ人ナレバト思フ也。(一六三四頁)

然レバ則チ罰ヲ以テ利生ヲ思フニ、法華經ニスギタル佛ニナル大道ハナカルベキ也。現世ノ祈禱ハ兵衛ノ佐殿、法華經ヲ讀誦スル現證也。(一八〇七頁)

今、日眼女ハ今生ノ祈リヤウナレドモ教主釋尊ヲツクリマイラセ給ヒ候ヘバ、後生モ疑ナシ。(一八三〇頁)

三、釋尊と現證

教主釋尊が出世の本懐たる法華を説かんとして先づ現證を示し、發信せしめられた事は『法華經と現證』の篇に詳述した如くであります。いはゞそれは現證とは成佛の第一歩——前兆——として述べたものであります。丁度太陽が東天に出でんとして先づ曙光を呈するが如く、人の來るときに自然に氣のさすが様なものであります。瑞相御書に

サレバ天台大師ノ云ク、世人ノヲモヘラク蜘蛛掛レバ則チ喜ビ來リ、鶉鳴ケバ則チ行人至ルト、小事スラ徴アリ大ナンゾ瑞ナカラン。(一三三九頁)

と。尤恭天皇が或時衣通姫のおはすなる藤原の宮に御幸し給ひ、ひそかに物蔭より御覽せられた時、

姫はまちわびての御けしきにて、

我せこが來べき宵なり、さゝがにの蜘蛛の行ひこよひしるしも

と詠ぜられたとか。近代式でいへば、

様の來る夜は宵から知れる前な蓮池鴨が立つ

(徳川時代俗語)

といふ風な、本體に俱ふ自然的な響きの如きものとして現證を取扱ふたのであります。されば其現證は成佛の第一歩、所謂の初期の六根清淨で、更に信心増進すれば二歩三歩と六根清淨が増益して遂に最後の六根清淨たる佛身に到達するのであります。今説かんとする現證利益はたゞ單なる布教法としての現證の義及例を擧げんとするものなることを御承知下さい。

四、三車と大白牛車(譬喩品)

手段を構へて引導するそれはどんな風であるかといふに、先

づ初めに法華經第二の卷、譬喩品の三車と大白牛車との譬説から申し上げませう。

昔し昔し、或る處に大福長者がありました。このお方の家は随分大きいので何しろ五百人から人が住んでをる位です。處が變な建方で出入の門がたつた一つしか無い。それが又狭く出來て居るのであります。或日長者は御用で表へ出られ、借歸らうと思ふて我家の近くまで來ると變に臭い、ハテ何

處か火事の様だナと思ひながら門を入らうとするとヤア火事は我家の臺所から出て今や盛んにも免擴がらんとして居る處である。サア大變だ。マア財産や道具はどうでもよいが人に怪我があつてはならぬ。我が子が數十人中に居るのである。早く呼出さねばならぬと入口から座敷の方に大きな聲で、火事だア火事だよ、早く出ておるでと一生懸命に呼び立てた。けれども子供等は何が火事ですか、お父さんは随分おかしな面付をして居るよなどと遊びにふけて見向きもせぬ。コリヤ困つたどうしたら一人も怪我せぬ様に連れ出せるだらうか。ぐすくして居ると焼き殺されて仕舞うと心配して、其の方法手段を考へた。アツタ、アツタ、これなるかなと大喜び、われとわが胸に相談してよし／＼。ヲウイ、ヲウイ、皆んな早く出ておるで、早く出て來た兒には、何んでもすきなものを上げるよ、牛の車、鹿の車、羊の車、皆門外に待つて居る、早く出て來たものがお利口だ、早いこと、早いこと、と連呼しました。處が欲といふものは子供にもあるものですから、自分等の好きな車に乗れるといふので今迄のおもちや打捨て、他を推しのけて、丸でマラソン競争の様な勢で一度にドツと出て來ました。この處を御經文には

汝ノ欲スル所ニ随ツテ皆當ニ汝ニ與フベシト。爾時ニ諸ノ子、父ノ説ク所ノ珍玩ノ物ヲ聞クニ其

ノ願ニ適ヘルガ故ニ、心各々勇銳シテ、互ニ推排シ競フテ共ニ馳走シ争フテ火宅ヲ出ヅ。(譬諭品)
 随分勝手なものですな、今迄見向きもせぬものが自分の欲にかゝると人を倒してでもやつて來るの
 です。昔も今も人の欲には變りはないと見えます。随汝所欲の四字を味ふべきであります。

猪子供等が一人残らず無事で出たので長者は一安心、ヤレ／＼とばかりに門の前の露地に坐して先
 づ一服、其ノ心泰然トシテ歡喜踊躍スと説いてあります。處が子供の方ではヤレ／＼處でない。早く
 よ、早くよ、早く車に乗らしてよとせがむ、其處でヨシ來たサア特別上等の車に乗らして上げるよ、
 とて先の三車には似るべくもない、立派な大白牛車を引出して皆乗らした。子供等は大方よこびで四
 方に乗廻して非常に楽しく、終日遊んだ。理窟をいふ人ならば、こりや約束が違ふ、おれは羊の車に
 乗りたいたいと思ふて飛んで來たのだ、イヤ僕は鹿の車といふつもりで喜んで居つたのだ、などといふで
 ありませうが、素直なお子なら、ドウシテ／＼こんな立派な車はと喜びを増すのであります。經の文
 には、

各々大車ヲ得テ未曾有ナルコトヲ得タルハ本ノ所望ニ非ザル如シ。
 と望外の賜物なるを喜んだと記されてあります。かくあるべきであります。

猪子供はそれでよいとして、お釋迦様は如上の物語を終へて、猪舍利弗よ、お前はどう思ふ、三車
 をやるといふて大白牛車をやつた長者は噓付といふ非難を受けるのが當然だと思ふか、と其處で舍利
 弗尊者は答へられるには、

どうして／＼佛様、假令一物を與へずとも火難を免れ命を助けられたのですもの、何の非難があ
 りませう、實に立派なものです。況んや其の上に望外の車を賜ふたのですもの。

と申し上げたので佛も御満足遊ばされた。諸子よ、方便とか手段とか申しますのは、こんな事です。
 どうかして貪瞋痴の三毒の火熾なる三界の火宅を免れ、三災四劫を離れたる常住の淨土、本地の娑
 婆世界に住ましてみたいと思ふて、先づ現證の利益——それは今、其の人の最も欲しいと願ふて居る所
 のもの——を與へるといふて入講せしむるのが、なぜに噓付となりませう。なんで手段を弄するもの
 といはれませう。たゞに病を治して上げるのみでない、これより以後の現世安穩、未來成佛の大快樂
 を頂かすのですもの、どんなに喜んで貰ふても決してはどかる處がないのであります。

それに付けても思はれるのは開導上人の御指南、現證の利益を以て教化する時は三類の強敵感心歸
 服すと、如何にもいかに其の通りであります。前に掲げた經文に

父憐愍シテ善言ヲ以テ誘ヒ諭スト雖、而モ諸子等、嬉戯ニ樂著シテ肯テ信受セズ、驚カズ、畏レズ、ツヒニ出ル心ナシ。何者カ是レ火、何者カコレ舍、云何ナルカヲ失フト爲スト。乃至——父所説ノ珍玩ノ物、其ノ願ニ適ヘルガ故ニ心各勇銳シテ互ニ相ヒ推排シ競フテ其ニ馳走シ争テ火宅ヲ出ヅ。どうぞ遅くても結構ですから、御迷惑でも今夜是非御本尊様を御願ひしたいんです。と今迄八ヶ間敷いといふてた人も、自分の願ひが生じてくれれば此の言葉です。經文其のまゝと申さねばなりません。最後に譬喩品の心を詠ぜられた歌に、

得未曾有

非本所望

法印房觀

かねてわが思ひしよりも芳野山なほたちまさる花の白雲。

大僧正 日扇上人

おほきなる車を得ては誰か又三つの車に心ひかれむ。

五、病子と良醫(如來壽量品)

世間の坊主どもは自分等が少しも布教もせず成績も挙げぬに反して、佛立講では年々月々日々ドシドシ弘通が出来て行くのを美望してか口惜しがるか、又は自分の寺の檀徒が佛立講に轉檀入講する憎しみか、兎に角惡口は必ず發する。それも教義上の非難ならば

結構であるが、ナンダ佛立講の奴等は人の病氣とか災難とか逆境に陥ちて苦んで居る足元を見込んで信心をすゝめる、弱り目に祟りつける、ひどい奴等だ、立派な宗教ならば正々堂々公開講演なり、道路布教なり、又は文書傳道なりで布教したらよいではないか。丸でもぐり信心の様にコソ／＼して知らぬ内に檀家を取つて仕舞う。などと布教法を難する人があります。正々堂々といへば大變立派であるが、公開講演や文書傳道で誠の信者が得られると思ふて居るのがお芽出度いと笑ひ度なる。今頃そんなことではとても熱心な信心否實の發信は得られるものではありません、時代や機根の動きを御存じないのであるから仕方がない。

佛立講が主として病人を目前に教化するのは、病人が尤も神佛の加護を求めて居る有縁可度の對機であるからであります。換言すれば神佛の存在を認識し易き心的状態に在るからであります。宗祖大士が妙心尼への御返事に、

コノヤマヒハ佛ノ御ハカラヒカ。ソノ故ハ淨名經、涅槃經ニハ病アル人、佛ニナルベキヨシ説カレテ候。病ニヨリテ道心ハヲコリ候カ。(一七六六頁)

と釋尊も病によせて教化せられた例は決して尠くない。一例として法華經の藥王品には、

此ノ經ハ則チコレ闍浮提ノ人ノ病ノ良藥ナリ。若人病アラニ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ病即チ消滅シテ不老不死ナラン。

と御説きになつてある。其他、御書に御示し遊ばされてある如く、淨名經には問疾品とて淨名居士の病氣見舞に事寄せて多くの弟子を遣し、文殊菩薩との不二の法門問答が闢はされました。涅槃經には、現病品を説いて一闍提人の治し難きことを示されてあります。されば先哲も病ハ是レ佛ナリ（竹窓隨筆）。或は、病ハ善智識ナリ。我レ病苦ニ依テ進修ヲ堅ム（釋書）。又は、若シハ毘耶ニ偃臥シ病ニ託シテ教ヲ興ス。如來又滅ニ寄セテ常ヲ談ジ病ニ囚テカヲ説ク（止觀）などと説かれてあります。恐らくは謗法の僧等も眞似て見たいは見たいけれども、如何せんそれ丈よくきく妙法藥の持合せが無いのであらう。佛立講に仕入にござれ何時でも看板を卸して進ぜる。

處で病氣が神佛の存在を認識し易き心的状態に進んで居るといふに就て、其の根據を一つ示しませう。それは如來壽量品の病子と良醫の譬説に於て明かされてあります。

或る處にそれは、實に上手な御醫者様がありました。子供達が太勢お有りでした。或る日の事お醫者様は近村へ診察に出懸けました。其の留守の事、子供たちは藥室に侵入して其の邊をかき廻した。

迄はよかつたが一つの毒藥を大事大切に仕舞込であるのを發見して、これはキツト甘いに違ひない。

見たら僕等がほしがると思ふてかくしてあるに相違ない。皆んなしてたべようぢやないかといふものがあった。惡戯盛りの連中とて、賛成々々で忽ちの間に喰べて仕舞ひました。處が大變、甘い處の騷でない。何しろ毒藥であるから、また、く間に皆倒れて仕舞つた。あちらでもこちらでもウー／＼とらなつて居ります、子供といふものは仕方の無いもの、醫者の藥室には藥計りで毒は無いものと思ふたに違ひないが、毒とても藥といふても其處は匙加減一つで藥にも毒にもなる。藥だからと澤山飲めば藥毒を起し、毒でも適度に飲めば藥となる。それで毒藥といふのであります。されば大論には、大藥師ノ如シ毒ヲバ藥トナスと。それに反して藪醫は良藥を却て毒と變ずる不思議の力がある。法華經譬喻品にかゝるへボ醫を指して過去の謗法の餘罪なりと説かれてあります。文に曰く、

若シ醫道ヲ修メ方ニ順ジテ病ヲ治セバ、更ニ他ノ病ヲ増シ、或ハ復タ死ヲ致サン。

と、或ハ復タ死ヲ致サンなどはズ星といふ處、偕も恐ろしい次第であります。開導上人が哀れなり人を助くる御法をば習ひ損じて墮獄さすとは

と敷かれてあるのは藪醫ならぬ賣主御折伏の御歌であります。まことに藥を變じて毒となし、成佛

の法變じて墮獄の法となす。厄介な奴が世の中に澤山あつて困るのであります。諸、本題に立歸つて、子供達が毒に當てられて苦んで居るとは神ならぬ身の夢にも知らず、診察をすまして我家に歸つて見ると其處にも此處にも子供達がぶつ倒れて、ウー／＼苦しがつて居ます。どうしたんだ、どうしたんだ、一體どうしたんだと親心は狂はん計りに叫んだ。その時足元に居る比較的少なめた方の子供が、どうも相済みません、僕等が悪戯をして間違つてお父さんの藏つてあつた毒薬を飲んだのです。早く助けて下さい、アー苦しい、苦しい苦しいといふ次第。それは大變なことを仕出かした。叱る處か、大急ぎで一番上等の薬を調合して解毒劑を造り、サア早く飲め、サア早く早くと片端しから飲ましてやつた。喜んで飲んだ兒は早速毒を下して、苦が抜けたが、中には餘り多く毒を飲んだ爲めに心がスツカリ顛倒してどうしても其の薬を飲まない。外のイ、薬を頂戴ヨウ、早く頂戴ヨウと、せがみ泣くが、この薬をどうしても飲まぬ、さすがの良醫もこれには困つた。ハテどうしたらよからうか。

余ノ心ヲ失ヘル者ハ、其ノ父ノ來レルヲ見テ亦歡喜シ問訊シテ病ヲ治センコトヲ求ムト雖モ、而モ其ノ藥ヲ與フルニ肯テ服セズ。所以ハ何ン毒氣深ク入テ本心ヲ失ヘルガ故ニ、此ノ好キ色香アル藥

ニ於テ美カラズト謂ヘリ。

父是ノ念ヲ作ス——此ノ子慙レムベシ毒ニ中ラレテ心顛倒セリ——我今當ニ方便ヲ設ケ此ノ藥ヲ服セシムベシ。(壽量品)

仕方がない一つ方便を使つて薬をのましめようと、其處で其の失本心の子に向つて、

汝等當ニ知ルベシ、我今老衰シテ死ノ時已ニ至リヌ。是ノ好キ良藥ヲ今留メテ此ニ在ク。汝取ツテ服スベシ。(同上)

狂へる子の枕元に良薬を置いてふらりと出かけ、使ヲ遣ハシテ還リテ告グ、汝ガ父死シヌ。(同上)

と病める子等は父のやがて來りて此の苦しみを助けて下さることを期待して居つたのに、誠に晴天の霹靂、

是ノ時ニ諸子、父背喪セリト聞キテ心大ニ憂惱シテ是ノ念ヲ作ス。若シ父在シナバ我等ヲ慈愍シテ能ク救護セラレマシ。今者我ヲ捨テ、遠ク他國ニ喪シ給ヒヌ。自カラ惟レバ孤露ニシテ復恃怙ナシ。常ニ悲感ヲ懷キテ心遂ニ醒悟シ、乃チ此ノ藥ノ色香味美キヲ知リテ、即チ取リテ之ヲ服スル

ニ毒ノ病皆癒ユ。(同上)

大に悲しみ大に歎いた。歎き悲しんだお蔭で心が正氣に歸つた。正氣になつて見れば枕元の父の残した薬の色といひ香といひ味のよき加減、皆具れることが判つた、早速食べるやうに飲み盡すと、忽ちに效驗ありて苦惱はやんだ。この事を聞いた父は早速歸つて来て、イヤ實は方便ぢや、方便ぢや。と一家は再び團樂の春を迎ふることが出来ました。めでたし。

此の警説中、最後の方便が效を奏して、狂子が悲感を懐くといふ處が大事な處であります。樂觀だ順境だといふ人間には、此ノ心遂ニ醒悟スて眞面目の心的状態は來ないのであります。即ち私が曩にいふた病人は神佛の存在を認識し易き心的状態にあるといふたのは茲であります。日蓮主義は樂觀だといふてはしやき廻つて居る手合に、眞面目な佛の存在を認識し渴仰する信仰は決して有りません。さればといふて私達は醫師の如く、殊更らに方便を設けて大に悲感を懐かしめ、而して治さうとする程、即ち特に病氣を起させて而して信心をさせようと迄の勇氣はないが、或はこんな場合も起るかもしれぬが——せめて其の醒悟し易き心的状態にある人々を説き勸めて、一は其の病苦を救ひ、

他は以て現安後善の眞淨大法を持たしめる位は致したい、否致しつゝあるのであります。かゝる布教の仕方が一舉兩得とも勞少くして效多しともいふのであります。妙樂大師が、行淺功深以顯二經力一といはれたのもこゝらであります。

六、父王の教化に二王子の苦心(妙莊嚴王本物品) 昔むかし喜見劫の光明莊嚴國といふ

國に、雲雷音宿王華智如來といふ佛様が御出まし遊ばして法華經を講じ給ふた時、妙莊嚴王といふ王がありました。后は淨徳夫人、王子は淨藏・淨眼のお二方でありました。處が二王子は雲雷音宿王華智如來の御許へ參詣し、御法門を聽聞して結構な御信者となつて御座つたに反して、父妙莊嚴王は波羅門の教に深醉して、なか／＼佛の教を耳に入れませんでした。

然るに淨藏淨眼の二王子は道心堅固となり、是非共出家して専心御法中に入りたいと決心して、母淨徳夫人に私に御相談を申し上げた。

文に曰く、

願クハ母、雲雷音宿王華智佛ノ所ニ往詣シ下へ。

母、子ニ告ゲテ言ク、汝ガ父、外道ヲ信受シテ深く波羅門ノ法ニ著セリ。汝等應ニ往テ父ニ白シテ

與ニ共ニ去ラシムベシ。(妙莊嚴王本事品)

と、お母さん、一緒に御參詣なさいよ、と申されたに對してお父さんをつれて行かねばいけませんよ、と仰しやつたのであります。そこで二王子は父をどうかして佛様の御許へ參詣させたい一心から茲に十八變の神通を現するのであります。文に曰く、

コ、ニ二子其ノ父ヲ念フガ故ニ、虚空ニ踊在スルコト高サ七多羅樹ニシテ種々ノ神變ヲ現ズ。虚空ノ中ニ於テ行住坐臥シ、身ノ上ヨリ水ヲ出シ身ノ下ヨリ火ヲ出シ、身ノ下ヨリ水ヲ出シ身ノ上ヨリ火ヲ出シ、或ハ大身ヲ現ジ虚空ノ中ニ滿テ而モ復タ小ヲ現ジ、小ニシテ復タ大ヲ現ジ、空中ニ於テ滅シ忽然トシテ地ニ在リ、地ニ入ルコト水ノ如ク、水ヲ履ムコト地ノ如シ。是ノ如キ等ノ種々ノ神變ヲ現ズ。(同上)

一多羅樹は高さ四丈九尺を意味する言葉ださうですから三十四丈三尺が七多羅樹となります。二王子はその高さの空中に神通を以て飛び上り、身の上から水を出し身の下から火を出す、といふ様なことをするかと思へば忽ち地の中に水をくぐり如くスーと這入つて仕舞ふ、かと思へば水上を地上の如く自由にかけ廻ぐる。十八變の奥儀を残らず現じて父王にお見せ申したのであります。さすがの邪

王もこの神變には感心してすつかりまゐつてしまひました。文に曰く、

其ノ父ノ王ヲシテ心淨ク信解セシム。時ニ父、子ノ神力是ノ如クナルヲ見テ心大ニ歡喜シ未曾有ナルコトヲ得、合掌シテ子ニ向テ言ク、汝等ガ師ハ爲メテ是レ誰ゾ。誰ノ弟子ゾ。(同上)

父王も餘程感心したと見えて、經文には未曾有なることを得とあり、又子に向て合掌して、お前等の師匠は誰ぢや、誰の弟子かと早口に尋ねられたのであります。十八變を現じられたる其の姿の神々しさに覺えず合掌して拜まれたものと見えます。そこで空中より二子は下りて佛の御許へ同伴し雲雷音宿王華智佛を拜せしめ、これが私共の御師匠様であると申し上げ、やがては心願も成就して出家なされました。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな

といふ古歌に對して

人の親のまよふときし道なれど子のしるべする方もありけり

と詠まれたのは此の妙莊嚴王教化の一段であります。又、

たらちねを眞の道に勧め入れて子はいかばかり嬉しかるらん

との古歌も矢張り同じであります。

いか程口を酔にして説立てゝもいつかな聞入れぬ頑固爺も、神變にはコロリと落ちて仕舞つたでは
ありませんか。どうして〳〵御信心などは眞平だと忌み嫌ふた人の親も、不思議の現證には感心歸伏
して悴諸共結構な信者となつた、といふ様なことはザラにあります。末法惡世に妙莊嚴王品を色讀し
得るは佛立講の信者のみに限るのであります。實に難有い御法は當講の御題目、布教法として巨益を
成するは現證利益の一筋より外はないのであります。而もこれ日扇上人の手前勝手の發明でなくて、
佛の立て給ふた布教法であつたのであります。

十二宗名大意

第一總釋……………一五六

一 序説……………一五六

二 正傍……………一五八

三 大意……………一六三

第二過去宗……………一六五

一 過去の義……………一六五

二 三千の墨點……………一六六

三 五百塵點劫……………一六六

四 源遠流久……………一七〇

五 久遠の効果……………一七一

六 過去常……………一七三

七 佛界の確立……………一七五

第三下種宗……………一七六

一 種熱脱……………一七六

二 第一番の成道……………一七七

三 本佛行因の相……………一七八

四 下種の義……………一八一

五 修得・性徳の二佛種……………一八一

六 修得の權威……………一八三

七 下種を成する力……………一八五

八 下種は開顯の義……………一八七

九 弘通の大目的……………一八八

一〇 經力下種……………一九〇

一 一 お經とお題目……………一九一

第四本門經王宗……………一九三

一 一の義……………一九三

二 三説超過……………一九五

三 本門經王……………一九七

四 迹門は裏……………一九九

第五事相宗……………二〇三

一 愚者には事相……………二〇三

二 本門事妙……………二〇四

三 機法相當……………二〇五

四 事相とは有相行……………二〇六

五 對境が事相……………二〇七

六 理證よりも現證……………二〇九

第六無智宗……………二二一

一 惡世末法……………二二一

二 要法を説け……………二二四

三 無智の誇り……………二二五

第七信心宗……………二二八

一 信心の價值……………二二八

二 信心の定義……………二二九

三 發信の方法……………二三〇

四 何を信する……………二三三

五 三箇は一祕……………二三四

六 妙法は生身の佛……………二三五

第八易行宗……………二三七

一 易行道……………二三七

二 眞の易行……………二四〇

第九經力宗……………二四三

一 妙法經力……………二四三

二 本有の妙理……………二四三

三 内薰外護……………二四五

四 籠鳥の譬……………二五三

五 力士の譬……………二五九

六 水火の譬……………二五九

第二〇口唱宗……………二六二

一 宗祖の御使命……………二六二

二 開基の助釋……………二六二

三 受持の方法……………二六三

四 ありのままの妙法……………二六五

五 無餘念の口唱……………二六六

六 無餘念の工夫……………二六七

七 三業受持……………二六九

八 法體折伏……………二六九

九 長時の口唱……………二七一

一〇 一目の羅……………二七三

一一 化他の爲め……………二七四

一二 二者の會道……………二七六

第二一名字即宗……………二七八

一六 卽……………二五八

二 爾前の佛は理卽……………二六三

三 六卽一卽……………二六四

四 元品の無明を斷す……………二六六

五 口唱正意……………二六七

六 佛の始め……………二六八

七 六と卽と……………二六九

八 信能く無明を破す……………二七一

第二二教彌實位彌下宗……………二七三

一 二つの位彌下……………二七三

二 法の位彌下……………二七三

三 五十二位……………二七五

四 六卽と五十二位……………二七六

五 經力にて先づ元品を斷す……………二七八

六 初心こそ經の御本意……………二八〇

七 人の位彌下……………二八一

八 其病に同す……………二八五

第二三直入法華折伏宗……………二八六

一 順化と逆化……………二八六

二 正像二時……………二八八

三 直入法花……………二八九

四 逆化の法式……………二九〇

五 一念三千の佛……………二九一

六 法界の成佛……………二九三

七 衆生無邊誓願度……………二九三

八 進歩の近道……………二九五

九 不輕の先證……………二九七

一〇 下種益……………二九八

一一 折伏の事……………三〇〇

第二四結 勸……………三〇二

一 信心法度十三箇條……………三〇二

二 二十七の異名……………三〇四

十二宗名大意

第一總釋

一、序説 十二宗名は開基日隆聖人の御製作十三問答抄に御示し遊ばされたもので、十二宗名の名目は恐らく吾が佛立開導日扇上人の創唱ではないかと思はれます。即ち十三問答抄には、日蓮宗トハ、過去宗也、下種宗也、本門經、王宗也、事相宗也、無智宗也、信心宗也、易行宗也、經力宗也、口唱宗也、名字即宗也、教彌實位彌下宗也、直入法華折伏宗也。

とありまして、前後に十二宗名などいふ文字は全くありません。加之本門法華宗の人々も丸で氣がつかぬ様で、十二宗名? そんな事がありますか、と不思議な面持で問返すといふ風であります。されば十二宗名といふ名目は開導上人の始めて御使ひ遊ばした言葉で、當講内に限り通用して居るのであらうと思はれます。然し如何に大切であるかは以下次第に御心付にならうと思ひます。

開導上人の晩年の御著述、開化要談宗の巻を拜見致しますと、巻尾に特に十三抄十二宗名私註抄と題されて、十二宗名を一々御註釋遊ばされた御指南があります。其の最後に

十二宗名ハ本門佛立題目宗ノ上ノ十二ノ宗名ナリ。此御意ヲ丸呑ミノミ込デ、ワキ見フラスト弘通折伏、口唱信行スレバ、コレ即チ御鈔、御聖教ノ御指南ナレバ云云。

と御示し下されてあります。十二の名は分れて別なものやうに見えますけれど、それは本門佛立の妙法蓮華經宗を十二通りに説明したものに外ならぬのであるから、この全體をよく覺えて、此の十二通りの御指南に背かぬ様に御弘通、御奉公にはげれば、宗祖大士の御鈔、又開基聖人の御聖教の御義に叶ふものである、との御意であります。

『開化要談』(廣)三の巻に云く、十二宗名ヲ忘レヌヤウニ毎朝ヨムベシ。乃至、毎朝御看經ノ時ニ此ノ十二ノ宗名ヲ誦シテ、御法門セン時ニ此筋ヌハツサネバ三部ノ修行抄ノ御意ニカナフモノ也云々。

三部の修行抄と遊ばされたのは、門祖日隆聖人の五帖抄の御指南により、觀心本尊抄、四信五品抄、如説修行抄を申されたのであります。十二宗名の御意に基て御信心を勵めば此の三部の如説修行抄の御意にかなふのでありますから、當講の信者としてはどうでも十二の宗名をよく暗んぜねばならぬ

わけであります。今御看經のあとで一才暗誦なさるに調子のよいやうに並べて見ませう。暗記の出来る迄、書ぬいて御齋前の側にはりつけて置くとよろしう御座います。

十二宗名

●過去宗、下種宗、經王宗。

●事相、無智宗、信心宗。

●易行、經力、口唱宗。

●名字即宗、位彌下宗。

●直入法華折伏宗。

始は六行を六口にはつきりく唱へ、後には一口で唱へられるやう練習を重ねるのがよろしう御座います。初から一口に覺えて仕舞はうとすると本當には覺えられなくなります。

二、正傍

同じ十二宗名中でも矢張り正意と傍意との別があると思ひます。意味に輕重を論ずるではありません。機根に對して自から正傍が出来て來るのだと思ひます。それなら開導上人が何か其事に就て書殘されたものでもあるかといふに、それは未だ拜見した事はありませんが、開導上

人の御書物の中に、非常に屢御用ひ遊ばす宗名と、殆ど取立て、御用ひ遊ばされない宗名との差別があります。それを大體統計を取つて見ましたので、その統計の數字が示す處によりて正傍を別けて見たいと思ひます。然し少いものが價值が輕いと決して思ふてはならぬのであります。鶴の一聲、天子の一言といふ諺もあります。少いのが却て貴い場合もあります。されば價值の高下でなくて、用の多少を見、やがて末代今日の下根下機にはこの宗名に基いて指導する方がやり易いのであると考へて頂きたいのであります。

統計を取るに就て其の範圍をばごく晩年の明治二十、二十一、二十二、二十三の四箇年と致しました。これは次の御指南に依つたのであります。

開化要談(廣)三卷に云く、

コノ明治二十年ヨリ已來ハ如説抄、四五抄、本尊抄ノ三部ノ如説抄ヲ土臺トシテ、唯謗法ト懈怠トヲ嚴敷責メテ、一向令唱題目ノ不輕行相ヲス、メ云々。

尤も明治十四年の佐前佐後といふ御改良や、廿一年の御改良等ありますが、今は此の御指南に基いて二十年以後の統計を取つた次第であります。

	(廿年度)	(廿一年度)	(廿二年度)	(廿三年度)	(四年合計)	順位
過去宗	〇	一	二	〇	三	十二位
下種宗	〇	二	二	一	五	十一位
經王宗	〇	一	二	一	四	十一位
事相宗	一	一	二	五	九	九位
無智宗	十一	十二	三十八	二十一	八十二	三位
信心宗	十一	二十五	四十三	十八	九十七	次位
易行宗	二	九	七	一	十九	六位
經力宗	五	十四	二十九	十	五十八	四位
口唱宗	五	十二	二十二	十三	五十二	五位
名字即宗	〇	三	十	三	十六	七位
教彌實位彌下宗	〇	二	九	四	十五	八位
直入法華折伏宗	九	十三	五十一	二十六	九十九	首位

總計

四十四

九十五

二百十七

百〇三

四百五十九

これは精確とは申しにくいのでありますが、大體は間違ないと思ひます。この統計表によりますと、明治二十年中首位は無智、信心、二位、折伏、三位、經力、三位、折伏、同、廿一年中首位、信心、二位、經力、三位、折伏、同、廿二年中首位、折伏、二位、信心、三位、無智、同、廿三年中首位、折伏、二位、無智、三位、信心、全體として首位、折伏、二位、信心、三位、無智、

過去、下種、經王、事相などは十二宗名を全部數へられる時に擧げられたのみで、他には殆んどありません。而して此の表が大體何を物語つて居るかといへば、自行よりも折伏を重んじられて居る一點であります。而も其折伏を自力でなく經力折伏でなければならぬと思ふのであります。それは次位が信心、三位が無智であります。加之此の三者は明治二十年、二十一年、二十二年、二十三年に通じて三巴となつて居ります。これはたゞ時によりて何れを主とするかといふ丈の事で、三つのものは離れられぬ相關的關係、換言すれば互に他の内容をなして居るものであると拜します。無智のも

の信心で折伏するのです。經力を頭に頂いた折伏であることは自ら明かであると信じます。

三、大意 十二宗名に一貫せるものは下種といふことであります。既に開基隆聖は下種の項下に此の十二宗名を挙げ給ふてあるを以ても知ることが出来ませう。次上の御文に

法華經ヲ過去三五下種ノ處ニ置キ、下種ノ義ヲ以テ能開ノ神ト爲シ一經ヲ談ズ云云。

とあります。法華經を拜見するに下種の義を以てしなければ末法の益には相立たぬ事となるのであります。されば一經の肝心たる南無妙法蓮華經はいふまでもなく本因下種の大法であるのであります。下種の義を忘れたる御題目は末法今日の我等の爲には他人の寶で一分の得にもならぬのであります。然るに此の下種に就ては空々漢々とこれが種子です、これを凡夫の心田に下せばこれで成佛出来ず、と申して見た處で誰も信用するものはありません。恰度いふて見れば、極く小さな塊のものを持つて来て、これが菊の種です。これを春まけば綺麗ないろ／＼な花がさきますといつても誰も取上げるものはありません。第一菊といふものは一體どんなものだと逆襲されませう。若しこの種子をあゝさうかと直に信用する人があればそれは既に菊の花を見たことのある人です。それと同様に下種は先づ佛種でなければなりません。何の爲の下種だ、それは佛になる爲です。その佛とはどんなお

方です。と溯らねば下種の義が成立せぬのであります。こゝに於て過去久遠の五百塵點劫以前の佛様を顯さねばならぬことになるのです。法華經の壽量品は法華經中、吾佛一代五十餘年中の最も勝れた御經である、壽量品ましますば、天に日月なく人に神なきが如しと極説されてあるのはこの義に基くのであります。これが過去宗の義であります。この過去經は一切の佛の出生する根本であります。されば一切の佛の説き給ふ御經が如何程澤山あつても是に勝れたお經はありません。法華經が無かつたら一切の佛もないのです。一切の佛が無ければ一切のお經は説かれません。經王宗の義は自ら知られませう。然るに下種を成すべき衆生は何れも未だ曾て佛敎に御出逢ひ申さぬ衆生でありませう。これを本未有善の衆生といふ、本未だ善有らずと讀む、これ等の衆生は佛智に少しも觸れてゐませんから無智宗、無智の人々を助くるは偉大なる經力によらなければ到底救濟することは出来ません。偉大なる經力のみ能く底下の凡夫を救ふことが出来ます。教彌々實なれば位彌下るの御文を弘通の根本精神とせよと、宗祖も仰せ置かれてあります。依て教彌實位彌下宗といふ。偕てこの無智の人々を成佛せしむるの道は信心より外ありません。無念無想の觀念など、とても出来ない相談であります。その信心も心でやりますといふのでは結局しない、出来ないことになるので目に見えた事相の信心、

口で南無妙と唱ふる口唱宗、誠に仕易い易行宗でなければ無智の凡夫には持つことは不可能と頭からけなして仕舞ふのであります。かく口でお題目の名字だけを唱へて、深、其の妙法の體を研究しないから名字即宗と申すのであります。妙法蓮華經の名字を信すれば即ち佛となるの義であります。是が一段進みますと、妙法の其體如何と研究する即ち四種三昧といふ禪定によりて觀念の行を起すこれを觀行即といひます。今はたゞ名字の上止まつて深入しません。何か、深入すれば必ず間違ふ。間違つて而も我は悟を得たりと慢心する。されば危きに近寄らしめず、名字即に安住せしむるを指導の方針と致します。最後に下種を施す時代は末法といふ惡世であります。即ち根機下劣の愚人のみでありますから、初から法華經に直に入らしむるのであります。兎角愚人は初めのものに執著し易い。即ち先入主といふものにとりつかれ易いので、うっかり淺い小乘教を施しますと後に深遠な大乘教を與へんとしても受け付けなくなるのです。佛の時代の上根上機であつた舍利弗尊者等でさへ矢張り此の弊は免るゝことが出来なかつたのです。けれども指導者である佛陀が慈悲も廣大、智慧も無量でありましたから遂に法華經の會座で改めさすことが出来たのであります。奪はんとするには先づ與へよとよくいひますが、一度與へたものを奪ふといふのはなか／＼六ヶ敷い事です。それで私は常に、奪ふ

力のあるものでなければ決して與へてはならぬと教へて居ります。末法の導師は凡師です。故に始めより與へずに法を弘めるのです。これを直入法華の義と致します。又かゝる機根のものは折伏でなければとても修行は出来ません。折伏でなければ攝受であります。攝受といふのは小より大へ、淺より深へ次第順序を逐ふて教養するやり方です。今はその反對の直入法華であります。随つてじわ／＼でなく、一氣呵成の折伏行を取らねばなりません。下種の時は必ず折伏でなくてはならぬのであります。

以上おわかり憎い點が多からうと思ひますが、これは大意を述ぶる爲に止むを得ぬ次第であります。不惡御了承を願ひます。次項から少しはわかり易くなることと思ひます。

第二 過去宗

一、過去の義 十二宗名の首は過去宗であります。過去とは過ぎ去りし時代を指すのであります。すが、こゝでは漠然と過ぎ去りし時代をいふのでなくて、特定の時代を指すのであります。換言すれば過去、現在、未來といふ三世は多くは自己を現在に置いていふものであります。然るに佛教に於て

は長き歲月を三世に仕切つて用ゆる場合があります。例せば過去莊嚴劫、現在賢劫、未來星宿劫の如きであります。此三世に三千佛が出現せられます。過去莊嚴劫には華光佛を首とし毘舍浮佛を終として千佛、現在賢劫では拘留孫佛を首として我が釋迦如來は第四番目の出現、最後は樓至佛に至る千佛、未來星宿劫には日光佛を首として須彌相佛まで千佛、合計三世に三千佛が出現すると御説きになつてあります。三千佛名經といふ御經がある位であります。今こゝで申す過去宗の過去はこれとは違つてゐますが、一般の過去と同じくない點に於てこれと類似して居ります。即ち今より三千年前の釋迦牟尼如來の御時代を現在と立て、それより五百塵點劫の昔を以て過去となし、釋尊御入滅以後を以て未來と申すのであります。尤もこれは本門の三世であります。迹門に於ては三千塵點劫を以て過去となすのであります。お話しをする都合上、迹門の三千塵點劫を先づ述べ、次に本門の五百塵點劫の事に移りたいと思ひます。

二、三千の墨點

迹門化城喻品にお説きになつてある御法門であります。昔し過去に佛いましき、大通智勝佛と申し奉る。この佛が御入滅遊ばしてから今日までの年月はとて／＼古／＼長／＼星霜を経て居ります。譬を以て申しますと、三千大千世界のあらゆるものを以て墨汁をつくり、

東方千の世界を行き過ぎてから一點を下す大さ微塵の如し。又千の世界を行き過ぎてから同様に小さい一點を打つ。かくしてこの墨汁が無くなつた時にどの位の世界を経由したと思ひますか、とても算盤に乗せることの出来ない漢大もない數となりませう。全體一口に三千大千世界と申しますが、これは一般に考へられて居る娑婆世界のことではありません。このお互の住む地球をかりに一世界と立てまして、この世界が千あるを小千世界と名け、その小千世界が千あるを中千世界といひ、中千世界が千あるのを大千世界と申します。大中小と三段に千が重なるので大千世界の事を三千大千世界と稱し又、略して三千世界ともいふのであります。今日の教へ方はいへば中千世界は百萬の地球、大千世界は十億の世界となるのであります。この十億の地球を墨汁にしたら随分どつさり出来ることで、とても想像も出来ない數量となります。それを又大さ微塵斗りの小さな點を千世界過ぎる毎に打つて、それが皆になつたら何處まで行けませう。何といふてよいかわからぬ數が出来上りませう。

偕て話はそれですんだものではありません。この無量無邊の世界を、點を打つた世界も打たない世界も悉く抹してこなく／＼にして、その一塵を一劫とします。これが又お話しにならぬお話であります。經由せる世界が既に數量の遠く及ばぬ個數であるのに、それをこなく／＼にする其塵の數はと申せばい

やはやといふより外ありますまい。而もその一塵を一劫といふ。一劫とは磐石の一劫など申して、四十里四方の石を、三年に一度天人が舞ひ下つて羽衣でそーツとなでて、その石がすりきれたといふその長い時間を一劫と譬へてあります。この長い一劫を單位として上にいふた塵の数を數へたら一體どんな事になります。彼の大通智勝佛の御時代はそれよりも猶ほるか遠い過去であります。以上これが迹門で明された過去であります。一切經廣しと雖、又一切の學問無量なりと雖、かゝる古い過去を説いたものは外に全く認むることは出来ないであります。たゞ一つだけ、それはこの驚くべき數量よりも猶どの位古いか全く人智の及ばぬ程古い過去を説いた本門五百塵點劫の法門を除いては外には絶對に無い大過去物語であります。

三、五百塵點劫

本門壽量品に於て釋迦牟尼佛の一番始めに成佛された時を計量したお話がこの五百塵點劫であります。この法門は前の三千の墨點とよく似た數の數へ方であります。たゞ單位が違ひます。前のは一個の三千大千世界を磨つて墨汁としたのですが、これは五百千萬億の三千大千世界を微塵と碎くのであります。單位に於て五百千萬億倍の差があります。前のは千の世界を過ぎて一點を下したのですが、これは五百千萬億の國を過ぐる毎に一塵を置くのであります。こゝで又五百千

萬倍となつて居ります。この五百千萬億の三千大千世界を微塵となし、それを東方五百千萬億の世界を過ぐる毎に一微塵を下して終にこの塵の無くなつた時、經由せる總ての世界を悉く塵と碎き、其一塵を一劫として本門の釋迦佛の過去を量るに、猶遠く及ばぬ以前であると御示し遊ばされてあります。前の迹門の三千墨點も實に古い大過去であります。この本門壽量品の五百塵點劫はそれには似るべくもない大々過去であります。否大々過去といふ様な言葉では到底形容も出来ない廣遠な過去であります。我が宗祖日蓮大士はこれを無始の古佛と觀心本尊抄に仰せ遊ばされてあります。實に無始の古佛!! 恐らく無始の古佛と申すより外はありますまい。これ程の過去は全世界有史以來何人も考へた事もない時間でありませう。近代の科學が世界の創造に就て星雲説を述べてゐますが、この事に比すればとても足下にも及ばぬ近頃の話であります。迹門の三千墨點遠く及ばず、況や彌陀佛の十劫正覺をや。大海の一滴にも譬へられない。實に人力を以て計量の術を盡して其の始に溯り遂に筆を擲つた尊い努力の記録であります。一般佛經中にはたゞ古い過去を談じ、或は漠然無始といふ語を使つて居りますが、それとこれとは大變な相違であります。天台大師が、彼の阿彌陀佛を無量壽如來と稱するを引き來つて實ニハ有量ニシテ無量ト云フ彌陀是ナリ。と喝破し、今經の如來は五百塵點劫の

壽といふ故に有量に似たれども實は無量なりと數釋せられてあります。始めを説かんとして而も筆を擲つ、寧ろ無始の絶稱を適當とする外はありません。

四、源遠流久

三千の墨點とか五百の塵點とか古い事を説いてどれだけの効力があるかと尋ねたい人が多からうと思ひますが、是はなかく大切な事で、これがよく判れば本門の教の眞價がわかつたといつてよいのです。しかしそれを讀者によくのみ込んでもらふやうに説くことは頗る困難なことであります。されば極くわかり易い所を述べてあとは各自の研究感得に譲りたいと思ひます。

先づ世間の事でこれをいふて見ますと、商店に老舗といふものがある。長い間賣り込んだ店、これは古い事を自慢にしてゐる一つであります。又書籍の良否を見わける早わかり法は、著作の年代が古くて而も今日勢力を持つてゐるものは必ずよいにきまつてゐるのです。長い間名聲を維持するものは必ず其處に立派な價値を有して居るものです。どんなに一時パアツと榮えても嘘と山師は永く續かぬもので、まあ永い目で見てゐて下さいといふが、永い間いつも變らぬものは木地で、メツキはやがてはげます。一時は珍らしいから盛るが眞價のないものは直に廢れます。永く續くには眞價があるから世間で止めさしてくれぬ、世間の必要、要求に應じて存在するのであります。是と理を同するもの

は我大日本帝國の皇統連綿の大事實であります。神武天皇御即位以來既に二千五百九十餘年を経て、皇威は益々全世界に輝き渡つてゐます。實に世界列國に於て其の比を發見することの出来ない我皇室の尊貴で、かくも皇基の深遠なる大事實は科學の力も模倣する事が出来ない。哲學でもでつち上げることは不可能事で、やがて我帝國の存在の必要が要求されて居ることを物語つてゐる。換言すれば、全世界に對する日本帝國の使命の重且つ大なることを立證するものといはねばなりません。源遠ければ流れ久し、の格言の如く、深山連峰に源を發する流れは必ず大川となり、而も四時不斷の碧水を湛へるものであります。

五、久遠の效果

迹門で説く所の三千の墨點に就ても説くべきことが多々ありますが、これは他日に譲つて、本門五百塵點劫の上より久遠の効果を論じて見ますと、第一に最勝の義が顯れます。一切經中に多數の佛名が説き現されましたが、安養淨土の教主阿彌陀如來は其の最も顯著なるものであります。然し淨土の三部經の一である無量壽經(無量義經に非ず)には「成佛ヨリ已來凡ソ十劫ヲ歴タリ」とあります。即ち昔し昔し鏡光如來世に出現し給ひてより幾多の佛出世しました後に、世自在王如來出現し給ふ、其時に王位を捨て、御弟子となつた法藏といふ沙門がありました。後に成

佛して阿彌陀如來と號すとあります。然しこの阿彌陀如來の大々先輩である錠光佛は又燃燈佛ともいふ佛様で、法華經第六の卷に説いてある御方であります。即ち如來壽量品に曰く、是ノ中間ニ於テ我レ燃燈佛等ト説キ又復ソレ涅槃ニ入ルト言ヒキ。是ノ如キハ皆方便ヲ以テ分別セシナリ云云。即ち久遠實成の釋迦牟尼如來が成佛已來、方便を以て種々に姿を變へ名を改めて衆生救済に出現されたが其中に燃燈佛（錠光佛）等と名稱つた事もあつた、といふのであります。阿彌陀如來も結局は釋迦佛の濟度を受けた一人であつたと申さねばなりません。然らざれば釋迦佛の分身のお方であつたのであります。何れにしても阿彌陀佛の自家は釋迦佛であることは毫も疑を容れる餘地はありません。又次に彼の迹門に説き顯した三千塵點劫の昔世に出現されたのは大通智勝佛であります、斯程に古い成佛なれども本門の五百塵點劫の成佛が現るればやがて大通智勝佛も中間の佛となり、根本自家は矢張本門の大釋迦牟尼佛であるといふことになります。日現るれば星かくるの諺、師匠が出席すれば弟子は引込まねばなりません。

然らば五百塵點劫よりもモツト古い昔に成佛した佛があつたらどうなりますか、あつたらお目にかかりませんとハツキリ御答へ致して置きます。然しこれは私の研究の結果でなくして宗祖大士の御言

葉であります。開目抄に云く、華嚴方等般若深密大日等ノ恒河沙ノ諸大乘經ハ未ダ一代ノ肝心タル一念三千ノ大綱骨髓タル二乗作佛、久遠實成等ヲ聞カズ云云。妙樂大師云く、本迹ノ事ノ希ナル諸經ニ説カズと。三千墨點、五百塵點の事は諸經に説いて無いとあります。佛が諸佛の頂上にましますといふ比較上の優勝を誇るのではありません。あらゆる佛の根元である。十方の佛は我が大釋迦牟尼佛の分身佛であるといふ義が顯れるから尊いのであります。やがては成佛は釋迦牟尼佛の專賣特許であつて他は皆販賣人に過ぎないことが現れて來ますから難有い、實に尊い佛様であります。

六、過去常 次に過去常を談するが故に尊貴であります。過去常とは過去が常住であるといふことで、觀心本尊抄に、佛既ニ過去ニモ滅セズとありますのと同義であります。前項に於て述べました五百塵點劫の譬説は何を物語つてゐるでせうか。單に壽の長きを説いて居るのみでせうか、決して左様に考ふべきではありません。量れる限り量つてそれで迎も是以上は量れぬといふ所迄行つたのです。その量れる丈量つた部分丈で、是は無量の壽命なることを充分に物語つてゐます。況んやそれよりも猶ほ過ぎたる事百千萬億劫であると説くに至つては、實に宗祖の御言葉の如く無始の古佛でなくて何であります。阿彌陀如來を無量壽といふも成佛已來漸く十劫、かゝる佛を無量壽といふこれは

天台大師の判の如く、實には有量であるのを無量壽といふた丈の事であり、それとこれとは到底比較にならない天地水火の相違であります。此經は實には無量なれどもかゝる有量的形式によつたものに過ぎないことは獨り天台一家のみの判ではない。羅什の四高足の一たる容師も、壽無量劫未ダ以テ其ノ久シキヲ明スニ足ラズと云ひ、河西の道朗は壽量ハ大虚ト量ヲ齊フスルコトヲ明スと釋せるが如きで、故に天台大師も、前代ノ匠者向キニ説ク所多ク無量ニ約シテ常ヲ明スといつてあります。經文にも、是ノ如ク我成佛シテヨリ已來甚ダ大ニ久遠ナリ。壽命無量、阿僧祇劫、常住ニシテ滅セズと。實に常住不滅の四字は眞の無量壽を立證して餘りあるものであります。然し一寸注意して置きたいのは、同じ無量壽でも非壽の無量壽と同一視しないやうにせねばなりません。佛教では法身は非壽と申します。法身は眞如の理に名けた語で、この法身は無量壽です。然し非壽非量と申して壽命を量らうにも壽命といふものが無いのです。それを一見すれば無量壽經の無量壽とまがふのです。天台大師云く、法身ノ非壽ハ諸教ニ常ニ談ズ。但ダ久成ノ遠壽會テ説カズと。今法華經に於て談する所の如來の壽は理體に名けた無量壽でなくして「我本菩薩ノ道ヲ行ジ成セシ所ノ壽命」であります。法身の壽はいはば死人の無量壽です。夜道に日が暮れぬと同じで、死人はもう死ぬ事がありませんから無量壽、

今經の壽は報身佛の壽であつて生きた佛の壽命です。大變な相違があります。かく過去の實修實證の佛の壽命が常住不滅であることを明すから久遠といふことは尊いのです。

七、佛界の確立

或は又問ふ人があるかもしれませぬ。過去常を談するが故になぜ尊いのかと、それは佛界が確立するから尊いのです。若しこれと反對に佛は過去に滅す。従つて現在に生れ、又現在に滅す。かくの如く生死を免れざる佛は眞の佛ではありません。眞の佛は不老不死でなくてはならぬ。そんなたより無い佛では些くとも我等の願ふ佛とするに足らぬのであります。宗祖大士はかかる佛を指して夢中の權果といはれてあります。久遠實成の本佛はそれ等の佛と全然異り常住不滅の覺體であらせられます。故に金剛不壞の佛とも申し奉る。折角苦勞をして成佛したらその佛が、又生死を免れぬといふのでは成佛して又苦勞せねばなりません。確乎として生死海に屹立する千古不動の大燈明たるべき佛界の確立これぞ法華の生命であります。されば開基日隆聖人は法華經を過去經なりと斷じ、かりそめにも法華經を現在に置くなと十三問答抄に遊ばされてあります。萬が一にも佛が此の壽量品を御説き遊ばさならんだつたらばどうなるであらうか。迹門の中にて舍利弗は華光如來、目連は多摩羅跋梅檀香如來等とそれ／＼成佛の記を授けられたけれども、千辛萬苦の後の佛界が

安定を缺いで居つては何にもならぬのであります。宗祖大士はこれを指して水中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮べるに似たりと仰せ遊ばされてあります。げに

一切經ノ中ハ此壽量品マシマズバ、天ニ日月無ク、國ニ大王ナク、山海ニ玉ナク、人ニ魂ナカランガ如シ。サレバ壽量品ナクシテハ一切經イタヅラゴトナルベシ。根無シ草ハ久シカラズ、源無キ河ハ遠カラズ、親ナキ子ハ人ニイヤシマル。所詮壽量品ノ肝心南無妙法蓮華經コソ十方三世ノ諸佛ノ母ニテ御座シ候ヘ。(六七二頁)

との絶讃又むべなる哉。過去の佛(本佛)過去の土(本時の娑婆)に於て過去の本弟子(本化上行)を召して過去經(妙法五字)を説く、これ即ち本門八品の儀式であります。この八品の間に説き顯す法門を最尊最上と信じこれを弘通す。故に當宗を過去宗といふのであります。

第三 下種宗

一、種熟脱 十二宗名の第二は下種宗であります。下種宗の重要さは最初に申しました通り、十二宗名に一貫せる義でありますから、最も大切な宗名であるといはねばなりません。宗祖大士は

設ヒ法ハ甚深ト稱ストモ未ダ種熟脱ヲ論ゼズ還テ灰斷ニ同ズ。化ノ始終無シトハ是也。譬ヘバ王女タリト雖モ畜種ヲ懷妊スレバ其子尙旃陀羅ニ劣ルガ如シ。(九四二頁)

御意は、よし甚深微妙の法ちやと申しても種熟脱の三益が具してゐない。熟益とか、脱益の法門は暫く措て下種益の義が少しも無いではないか。佛様の御教導の始めは即ち下種益で、此下種を成長せしめるのが中間熟益、最後は脱益として成佛せしむる所である。然るに種は蒔いて無いのに手入や收穫があつてたまるものか、蒔かぬ種は生えぬといふ事を知らぬのか。木を焼いて灰となす、灰の中から芽が出ますか、花が咲きますか。更に譬へていへば、王女が畜生の種を宿されたらどうでせう。如何に王女の生める御子でも非人乞食に劣るものといはねばなりません。或は

眞言、華嚴等ノ經々ニハ種熟脱ノ三義名字スラ猶ナシ何ニ況ヤ其義ヲヤ。種ヲシラザル脱ナレバ趙高ガ位ニ登リ、道鏡ガ王位ニ居セントセンガ如シ。(七九三頁)

佛種を植えずに佛果を望むのは、恰も天子の御血統でない趙高(支那)や道鏡(日本)が王位を覗ふのと同じで到底成就し難いものであります。種の尊い事はこれで知られませう。

二、第一番の成道

一口に成佛と申しましても、大體に於て二通の場合があることを知つて置

かなければなりません。即ち自行の因果と化他の因果であります。自行の因果とは佛がまだ凡夫でおはした時道念を起して成佛の修行を遊ばされる、これを自行の因といふ。其の結果遂に目的を達せられて佛となる、これを自行の果と申します。化他の因果とは既に佛とお成り遊ばして衆生を見れば何れも苦海に没在して居る、大慈大悲の御心よりして化他の行を起す。その爲に寂光の本宮を立出で娑婆に示現遊ばす。然し突如として化現遊ばされることは効果的でありませぬ。何ぜかと申しますと化人の説法、人の信を得ることが弱い。何處の馬の骨かわからぬものゝ口車に乗るなよ、といふ氣持は何處にでもあります。矢張り其の世界、其の國、其の町、其の村の人となつてイの一番からやり出さねばなりません。故に如來ニモ父母アリと御經文に説かれてあります。中天の迦毘羅衛城主淨飯王の子悉達と生れ給ひ、結婚もなされ一子羅睺羅も設け、人間一通りの事をすませてから出家成道、やがて一代の説法といふ段取となつたのであります。口先で修行をせよ、成佛が得られるであらうと説いた文では効果はうすい。人間の子悉達既にかく大悟徹底す、汝等何ぞ學ばざるといふ實證を示さねばなりません。宗祖大士も凡夫の成佛出来る御手本として

悉達太子ハ人界ヨリ佛身ヲ成ス、此等ノ現證ヲ以テ之ヲ信ズベキナリ。(九三三頁)

と擧示されてあります。この化他の爲に出現されて修行遊ばされることを化他の因、成佛の相を示されることを化他の果と申すのであります。

以上二種の因果中、前の自行の因は眞實の成佛の方法であります、後の化他の因は方便の修行であります。前の修行を眞似すれば成佛出来ますが、後の方便を模倣しても成佛は出来ません。其處で眞實の成佛の方法たる自行の因果を求めて行きますと一番古い佛のその修行といふ處を求めねばなりません。然るに一切經を十五返ひつくり返して調べ上げた其の結果はと申しますと、法華經 本門壽量品に説き明かされた五百塵點劫の成佛より以前の佛は絶対に發見することは出来なかつたのであります(過去宗の下参照)。さればこの五百塵點劫の成佛を第一の成道と申します。これが自行の因果であります。根本の佛因、根本の佛果なる故に本因、本果と稱し、而も至極の因果なる故に妙の字を加へて本因妙、本果妙と讚歎致すのであります。これより以後、換言すれば本因本果以外を化他の因果と稱し、第二番以下と申すのであります。

三、本佛行因の相 第一番の成道の、其の修行たる本因妙行を本佛行因の相と申します。即ち眞實の下種行相であります。法華經第六の卷如來壽量品にその事を説いて曰く、

我本ト菩薩ノ道ヲ行ジテ成ゼシ處ノ壽命、今猶盡キズ、復タ上ノ數ニ倍セリ。

上の數といふのは五百塵點の譬であります。その五百の遠喻よりも倍する程の壽命を菩薩道を行ずることによりて得給へりと説かれてあります。これが本因妙行を説示し給ふ御經文であります。然れば本佛行因の相は菩薩行であつたことは明瞭な譯であります。次に其菩薩行の内容はと申しますと、開導上人の御歌に

釋迦佛の菩薩でましし其昔、娑婆の修行は南無妙法蓮華經

とあります如く、南無妙法蓮華經の五字七字を我も唱へ他にも勧め遊ばしたのであります。開基隆尊の御指南に

題目ヲ開テ下種ヲ成ズ、故ニ題目口唱ヲ以テ本佛行因ノ相ト爲ス也。

と遊ばされてあります。法華經第七の卷如來神力品に

國アリ娑婆ト名ク。是ノ中ニ佛イマス釋迦牟尼ト名ケ上ル。今諸ノ菩薩摩訶薩ノ爲ニ大乘經ノ妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念ト名クルヲ説玉フ。汝等當ニ深心ニ隨喜スベシ。

此の妙法蓮華經は佛の常に護念し給ふ處にして而も復た菩薩に教ふるの法なり。菩薩行——成佛道

——には妙法蓮華經より外に全く道無し。故に南無妙法蓮華經を唱ふるより外に成佛を求めざれと蓮隆兩祖堅くいましめ給ふたのであります。

四、下種の義

一體下種といふのはどういふことかと申しますと『成佛の種を衆生の心田に下す』といふことであります。曾谷入道御返事に

法華經ハ種ノ如ク佛ハウヘテノ如ク衆生ハ田ノ如クナリ。若シ此等ノ義ヲタガヘサセ給ハ、日蓮モ後生ハ助ケ申スマジク候。(一五一六頁)

とあります。お互衆生は田の如く、佛が植ゑ手で法華經の種を下すのであります。衆生に於ても佛在世の衆生や正像二千年の間の人々は本已有善(本已ニ善アリ)とて最早佛種子を植付けられた方々であります。末法の衆生は本未有善(本未ダ善アラズ)とて佛種子が下されて無い者ばかりであります。有善の者は肥料を加へてのばす様に骨折るこれを熟益と申します。熟益の次は脱益とて秋の收穫で成佛することであります。未有善のものは何も植ゑて無いから手入の仕方がありません。それで第一に大善根の佛種子たる妙法蓮華經の五字を授けて下さるのを下種益といふのであります。

五、修得・性徳の二佛種

佛種にも修得・性徳の二つがあります。修得といふのは修行して

獲得した佛種といふことであります。即ち菩薩行をはげんで遂に悟を開いた佛様を指して修得と申します。その佛様の御教こそ我等の成佛の唯一の指南でありますから、この御教を修得の佛種といふのであります。然るに佛様が修行して得たものは其の佛に依て始めて製造されたものかといふと決してさうではない。元來有つたものであるが誰も知らなかつたものであります。恰度金剛石を發見したといふのと同じであります。これは光るものだといふことに氣が付いて一生懸命に磨いたらあんな立派なものとなつた。この發見はダイヤモンドの製造家ではありません。ダイヤモンドは大昔からチヤント地上にあつたものです。此の昔からあつたといふ事を性徳といふのであります。性は性質といふ義で衆生の本來の性質として具はつてある徳であるから性徳といふのであります。即ち佛になるといふからとて外部から注射するとか移植するとかして出来るものでなく、衆生本來に具はれる徳——佛となる性質——を磨き上げた丈であります。云ひ換へますと誰もかれも皆久遠の佛種を性質に具へて居るのであります。それを覺つて磨き上げたのが佛様であります。そこで修・性の二つを更に譬へてかういふことが出来ませう、修得の佛種は光れる金剛石、性徳の佛種は地中の荒石に似たる金剛石、修得をお手本として性徳を磨くべきだ。金剛石も磨かずば玉の光りは添はざらむ。人も學びて後にこそ

誠の徳はあらはるれの御歌の通りであります。

六、修得の權威

何ごとでも一番初めに得るといふことは非常に六ヶ敷ことであります。聞いて見れば何の事だい、といふ事でも扱それに仲々氣がつかぬ、氣がついても出来上らないものです。苦心に苦心を重ねて漸く仕上る。それを他より見ればそれ位の事がなんだといひたくなる、方法を明かさず一つやつて御覽なさいといふウムそれ位がなんだとやつて見るがなか／＼も一つといふ處がどうしても出来ない、ナル程六ヶ敷ものだなあと悲鳴を上げた時一寸コツを教ゆる、その時の難有さそのコツの尊さ、苦心せぬとわかりません。されば秘傳口傳といふものはむやみと誰にでも教へるものではない。教へても難有味がわかりません。わからぬものはこれを尊重しません。却て冒瀆する恐れがあります。佛が衆生の性徳の佛種を發見遊ばされたことを何でも無い様に思ふては勿體無い事でありませう。それに付て一つ連城の壁の話を致しませう。

昔し支那の楚といふ處に卞和といふ人がありました、荆山といふ山で一つの璞玉を發見して、これはすばらしい玉になると大喜び、早速、楚の厲王に献上しました。王はこれを玉磨きの専門家に見せた處、これは玉ではありませんと御答へしたので、王を誑す不届な奴として卞和の左足を切つて追放

されました。卞和は泣く／＼其璞玉を懐いて時を待つて後に武王に献じました。これ又玉に非ず石な
 りと専門家がいふので王怒つて右足を切つた。武王死して文王位につく。此時卞和は璞玉を抱き荆山
 の麓で三日泣きくらし、遂に涙盡きて血を流すに至つた。この事が王の耳に入つたので可哀想と思召
 され玉造りをして磨かした。處が果して立派な寶玉となつた。後秦の昭王は十五の城を以てこの玉
 を得んとしたことより連城璧といひはやされるに至つたといふ。

玉を得ることの如何に困難であるかといふことよりも璞玉を発見することの六ヶ敷さが知られませ
 ろ。誰が見ても玉だとしれるやうならば譯はないが、専門家が見てさへ石だといふやうなものを玉だ
 と鑑定するのは、餘程目がきかなければ出来なことです。而も兩足を切られて猶確信を翻さなか
 つたのは實にえらい人だといはなければなりません。併しこの卞和にして人にも習はず、一々石に當
 つて此の鑑定力を得た所謂鑑定元祖であつたらそれこそ更に更にえらい人であります。我が大聖釋
 迦牟尼世尊は即ちその鑑定の元祖でいらせられます。これを無師獨悟といふ。久遠五百塵點劫の昔、
 三毒強盛の凡夫心の中に寶玉妙法蓮華經を發見遊ばされたのであります。而もこれを磨き磨いて尊貴
 極まりなき報身佛とならせ給ふたのであります。是獨り釋迦如來のみの御事でなく、此の寶玉は十界

の一切衆生に遍在せるものでありますから、其御悟りの影響する處實に廣大無邊であります。お一人
 の成佛がやがて一切衆生の成佛であります。されば我等受益者側より大恩教主と尊崇し奉る。實に
 其いわれありと申さねばなりません。

七、下種を成ずる力

下種とは衆生の本來として具へたる尊貴なる徳性を教示することであり
 ます。然し教へさへすれば下種となるか、即ち成佛の種となるかといふと左様に簡單にまゐるもの
 はないのであります。前述の卞和の璞玉の例で知られる如く、なか／＼人が聞いてくれません。聞い
 ても信じません。信じなければこれを磨くことはありません。されば本當の璞玉であつても、結局一
 般の石と少しも變らないのであります。門祖日隆聖人は

信ト教ト合シテ下種ヲ成ズ、之ヲ以テ日蓮宗ノ宗要ト爲ス也。(四帖抄)

と御教示下されてあります。佛性が、あなたの胸の中にありますよ、と教へたのを有難く信する時
 下種となる——これが日蓮大士の御本旨であるとの御指南であります。然るに何事によらず新らしい
 事を教へると、その實證がありませんと人は容易に信するものではありません。よし口ではハハア左
 様ですか、といふても心ではそれに相違ないと思つて居ないのであります。小事すら猶斯の如くで

す。況んや成佛の大事をやであります。彼の不輕菩薩は如何でありました。

我深ク汝等ヲ敬フ、敢テ輕慢セズ、所以ハ何ン、汝等皆菩薩ノ道ヲ行ジテ當ニ作佛スルコトヲ得ベシ。(不輕品)

シ。(不輕品)

諸君は佛性を具して居る、菩薩道を行すればやがて成佛することが出来るぞ、と教へられたのであります。然るにこの教を聞いた人々が直に信を發すれば下種を成する譯でありますが、ナニヲ生意氣なことぬかしやがるんだ。手前等のいふことなんざ眞面目に聞かれるかい。どなる、なぐる、然しこれ程の人々でも、不輕菩薩が六根清淨の位に登つた時は何れも信伏隨從したといふ。やはり六根清淨てふ現證を拜すれば信を起さずには居られないのであります。宗祖大士が久遠實成といふことを

一切經ノ中ニ此壽量品マシマズバ天ニ日月無ク、國ニ大王ナク、山海ニ玉ナク、人ニタマシヒナ

カラシガ如シ。サレバ壽量品ナクシテハ一切經イタズラゴトナルベシ。(六七〇頁)

と口を極めて讚歎し尊重遊ばされたのは何故ぞと深く推し奉れば、實修實證の成佛の大事實なるが故であります。成佛の上に事實を尊重遊ばされてあることは次の御文にも伺はれます。

イカニ人申ストモ即身成佛ノ人ナクバ川ユベカラズ、乃至大日經、金剛頂經、眞言經ニハ其人ナシ。

二乗成佛ナシ。久遠實成アトケヅル。

眞言宗で即身成佛といふことを如何程強調しても、肝心な成佛の事實が眞言三部の經に説いて無いではないか。事實が無くては到底信することは出来ないとの御折伏であります。日存聖人の御仰にも信ハ事教ヨリ起ル。(二帖抄)

とあります。實際お五佛教の修行者は理論鬭争とか、理論遊戯とかを目的として居るのではないのですから、どうしても事實の御手本を頂きこれを先證とし、これを目標とせねば徒らに望洋の歎に陥るのみであります。

八、下種は開顯の義

上來述べましたことによりて、下種とは開顯の義であることを肯定せられたことと思ひます。御義口傳、壽量品の下には『成ハ開ク義ナリ』とあります。佛になるといふことは佛性を開顯することであるとの御意、宗祖大士又曰く、

即身成佛トモ開佛知見トモ、コレヲサトリ、コレヲ開クヲ申ス也。提婆達多ハ阿鼻獄ヲ寂光極樂ト開キ、龍女ガ即身成佛モコレヨリ外ハ候ハズ云云。(一〇五二頁)

即身とはその身そのまゝといふことであります。その身そのまゝ佛になるといふことは、言ひ換へる